発掘調査報告第８集

県営ほ場整備事業大田切(3)地区(昭和53年度分)
埋蔵文化財緊急発掘調査

中通り下遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1979

南信土地改良事務所
駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第８集

県営ほ場整備事業大田切(3)地区（昭和53年度分）
埋蔵文化財緊急発掘調査

中通り下遺跡

――緊急発掘調査報告書――

１９７９

南信土地改良事務所
駒ヶ根市教育委員会

序　文

今回ここに刊行との運びとなった報告書は，県営ほ場整備事業に伴い，昭和53年に実施された発掘調査の報告書であります。

北は大田切川，南は中田切川を境界とする赤穂地区は，広い扇状台地状に展開し，その間には，古田切川・上穂沢・辻沢川などの小河川が東流し，田切地形を形成しており，遺跡は中央アルプス山麓や小河川の沿岸に沿って集中して見られ，その濃密な遺跡群は古くから学界の注目するところでした。

駒ヶ根市では，これらの遺跡群を対象に，昭和45年以来県営ほ場整備事業に先行しつつ，多くの遺跡の発掘調査を行ってきたわけであります。

今回発掘調査を行った中通り下遺跡は，昭和34年の道路工事中に灰釉の双耳壺など多くの土器が発見され，赤穂地区の歴史解明上欠かせぬ遺跡として注目されていた遺跡であります。

発掘調査の詳細は報告書の各項にみられるとおりでありますが，古墳の発見は最大の成果だったと思います。さらに古墳時代から平安時代にかけての30軒の住居址の発見は出土遺物とともに今後の研究上重要な役割を果たすものと確信しております。

長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長を初め，快く発掘作業に参加していただいた地元の方々，事業に深いご理解をいただいた大田切土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々，地主の方々等，多くの皆さまのご協力，ご厚志によって無事初期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに，この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和54年３月１日

駒ヶ根市教育長　木　下　衛

凡　例

1．今回の調査は昭和53年度に実施したもので大田切（3）地区内県営ほ場整備事業に伴うものである。

2．事業は南信土地改良事務所の委託により，県営ほ場整備事業大田切（3）地区埋蔵文化財調査会が実施したものと文化庁補助金事業との両者のものである。

3．本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため，調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき，文章記述はできうる限り簡略し，資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。

4．遺構関係の図面は小原晃一，宮下喜代子が製図した。焼土はドットで表し，柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。

5．土器の実測は気賀沢進，小原晃一が主にあたったが一部佐藤信之氏の手をわずらわした。製図は気賀沢進，宮下喜代子があたった。

6．鉄製品，石製品，土製品の実測・製図は小原晃一があたった。

7．土器の復元は福沢幸一氏の手をわずらし，一部気賀沢進があたった。

8．写真撮影は気賀沢進が担当した。

9．本文執筆は気賀沢進，小原晃一があたり文末に記した。

10．土器表は気賀沢進が担当した。

11．本執告書の編集は気賀沢進があたった。

12．遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。

13．住居址内層位は次のとおりである。

Ⅰ―耕土，Ⅱ―地場，Ⅲ―埋土(旧地場含む)，Ⅳ―黒色土(炭化物含む)，Ⅴ―暗褐色土(漸位層)，Ⅵ―ローム層，Ⅵ―ローム腐乱土，Ⅶ黒褐色土(ローム粒・炭化物含む)，Ⅷ―暗褐色土(ローム粒，炭化物含む)，Ⅷ′―暗褐色土(ローム粒，炭化物，焼土含む)，Ⅸ―暗褐色土(ロームブロック，炭化物含む)Ⅸ′―暗褐色土(ロームブロック多い)，Ⅹ―ロームブロック，Ⅺ―炭化物層，Ⅻ―灰・焼土層

14．カマドの層位は以下のとおりである。

Ⅰ―暗褐色土(炭化物含む)，Ⅱ黒色土，Ⅱ′―黒褐色土(黒色土とロームブロック)，Ⅲ―暗黄褐色(黒色土とローム粒・焼土)，Ⅳ―暗黄褐色(黒色土，ローム粒，炭化物，灰)Ⅳ′―炭化物，灰，焼土，Ⅴ―焼土，Ⅵ―ローム層，Ⅵ′―ロームブック

15．土器については笹沢浩氏より多くのご教示をいただいた。

目　次

序　　文
凡　　例
目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査会の組織 …… 1
　第3節　発掘作業経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 2
　第1節　位置及び地形 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　発掘調査 …… 8
　第1節　調査概要 …… 8
　第2節　古墳と遺物 …… 8
　第3節　住居址と遺物 …… 19
　第4節　その他の遺構 …… 88
第Ⅳ章　おわりに …… 90
　　土器表 …… 91

挿図目次

第1図　中通下遺跡位置図 …… 3
第2図　〃　地形図 …… 4
第3図　中通下遺跡付近遺跡分布図 …… 5
第4図　中通り下遺跡遺構図 …… 9・10
第5図　古墳周溝実測図（折り込み） …… 11・12
第6図　古墳周溝断面図 …… 13
第7図　古墳出土遺物接合図 …… 14
第8図　古墳出土土器 …… 15
第9図　古墳出土土器 …… 16
第10図　古墳出土土器 …… 17
第11図　古墳出土土器 …… 18
第12図　古墳出土・鉄製品 …… 18

第13図　第１・２号住居址実測図 …… 19
第14図　第１・２号住居址カマド実測図 …… 20
第15図　第１号住居址出土土器 …… 21
第16図　第２号住居址出土土器 …… 22
第17図　第２号住居址出土鉄製品 …… 22
第18図　第３号住居址実測図 …… 23
第19図　第４号住居址実測図 …… 24
第20図　第４号住居址カマド実測図 …… 25
第21図　第４号住居址出土土器 …… 26
第22図　第４号住居址出土鉄製品 …… 27
第23図　第５号住居址実測図 …… 27
第24図　第５号住居址カマド実測図 …… 28
第25図　第５号住居址出土土器 …… 28
第26図　第６号住居址実測図 …… 29
第27図　第６号住居址出土土器 …… 30
第28図　第７号住居址実測図 …… 31
第29図　第７号住居址カマド実測図 …… 32
第30図　第７号住居址出土土器 …… 33
第31図　第７号住居址出土土器 …… 34
第32図　第８号住居址実測図 …… 34
第33図　第８号住居址カマド実測図 …… 35
第34図　第８号住居址出土土器 …… 35
第35図　第９号住居址実測図 …… 36
第36図　第９号住居址カマド実測図 …… 36
第37図　第９号住居址出土土器 …… 37
第38図　第10号住居址出土土器 …… 38
第39図　第10号住居址カマド実測図 …… 39
第40図　第10号住居址出土土器 …… 39
第41図　第11号住居址実測図 …… 40
第42図　第11号住居址カマド実測図 …… 41
第43図　第11号住居址出土土器 …… 41
第44図　第12号住居址実測図 …… 42
第45図　第12号住居址カマド実測図 …… 42
第46図　第12号住居址出土土器 …… 43
第47図　第13号住居址実測図 …… 43
第48図　第13号住居址カマド実測図 …… 44

第49図　第13号住居址出土土器 …… 45
第50図　第13号住居址出土鉄製品 …… 45
第51図　第14号住居址実測図 …… 46
第52図　第14号住居址カマド実測図 …… 47
第53図　第14号住居址出土石器 …… 48
第54図　第14号住居址出土鉄製品 …… 48
第55図　第15号住居址実測図 …… 49
第56図　第15号住居址出土土器 …… 49
第57図　第16号住居址実測図 …… 50
第58図　第16号住居址カマド実測図 …… 50
第59図　第16号住居址出土土器 …… 51
第60図　第16号住居址出土鉄製品 …… 51
第61図　第17、18号住居址実測図 …… 52
第62図　第18号住居址出土土器 …… 53
第63図　第20号住居址実測図 …… 55
第64図　第20号住居址カマド実測図 …… 56
第65図　第20号住居址出土土器 …… 57
第66図　第21号住居址実測図 …… 58
第69図　第21号住居址カマド実測図 …… 59
第68図　第21号住居址出土土器 …… 60
第69図　第21号住居址出土土器 …… 61
第70図　第21号住居址出土土器 …… 62
第71図　第21号住居址出土土器 …… 63
第72図　第21号住居址出土土器 …… 65
第73図　第21号住居址出土土器 …… 66
第74図　第22号住居址出土土器 …… 67
第75図　第22号住居址出土土器 …… 68
第76図　第23号住居址実測図 …… 69
第77図　第23号住居址カマド実測 …… 70
第78図　第23号住居址出土器 …… 69
第79図　第24号住居址実測図 …… 71
第80図　第24号住居址出土土器 …… 72
第81図　第24号住居址出土鉄製品 …… 72
第82図　第25号住居址実測図 …… 73
第83図　第25号住居址カマド実測図 …… 74
第84図　第25号住居址出土土器 …… 75
第85図　第26号住居址実測図 …… 76

第86図　第第26号住居址出土土器 …… 77
第87図　第27号住居址実測図 …… 78
第88図　第27号住居址カマド実測図 …… 77
第89図　第27号住居址出土土器 …… 79
第90図　第28号住居址実測図 …… 80
第91図　第28号住居址カマド実測図 …… 81
第92図　第28号住居址出土土器 …… 81
第93図　第29号住居址実測図 …… 82
第94図　第29号住居址カマド実測図 …… 83
第95図　第29号住居址出土土器 …… 84
第96図　第29号住居址出土鉄製紡錘車・土錘 …… 83
第97図　第30号住居址実測図 …… 85
第98図　第30号住居址出土土器 …… 86
第99図　第31号住居址実測図 …… 86
第100図　第31号住居址カマド実測図 …… 87
第101図　柱穴址実測図 …… 88
第102図　特殊竪穴実測図 …… 89

図版目次

図版 1　遺跡遠景 …… 109
図版 2　遺構群（東）と古墳 …… 110
図版 3　古墳周溝ふき石と遺物 …… 111
図版 4　住居址群 …… 112
図版 5　カマド …… 113
図版 6　住居址 …… 114
図版 7　住居址 …… 115
図版 8　住居址 …… 116
図版 9　カマドと遺物出土状態 …… 117
図版10　第21号住居址 …… 118
図版11　住居址 …… 119
図版12　カマドと遺物出土状態 …… 120
図版13　住居址とカマド …… 121
図版14　住居址とカマド …… 122
図版15　出土遺物 …… 123
図版16　出土遺物 …… 124
図版17　出土遺物 …… 125
図版18　出土遺物 …… 126
図版19　出土遺物 …… 127
図版20　出土遺物 …… 128
図版21　出土遺物 …… 129

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至るまでの経過

昭和51年度より県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の経費のうち，農家負担分については，文化財保護担当部局において負担するようにとの指示があったため，中通り下遺跡の一部を中通り下B遺跡として文化庁補助事業として委託事業として実施することとし，昭和53年5月8日予算220万円の補助事業交付申請書を提出した。

当該事業は県営ほ場整備事業と関連するため，南信土地改良事務所・大田切土地改良区と連絡をとりながら，9月5日から着工することとした。団長には友野良一氏をお願いし，調査団を編成して県文化課へ発掘調査の指示を仰ぐ。

今回の発掘調査は一遺跡を補助事業と南信土地改良事務所からの委託調査を進めて行くという調査方法を採った。

第2節　調査会の組織

○中通り下遺跡発掘調査会

会　長	木　下　　衛	（市教育長）
理　事	有　賀　　勤	（市教育次長）
〃	下　村　忠比古	（市文化財審議会副委員長）
〃	宮　下　一　郎	（市文化財審議委員）
〃	松　村　義　也	（　〃　）
〃	伊　藤　和　正	（市博物館長）
監　事	松　崎　保　穂	（市文化財保存会長）
〃	佐　藤　雷　洞	（駒ケ根郷土研究会長）
幹　事	松　崎　勝　治	（市教委社会教育係長）
〃	原　　寛　恒	（市教委社会教育係）
〃	福　沢　房　美	（市博物館）
〃	気賀沢　　進	（　〃　）

○調査団

団　長	友　野　良　一	（日本考古学協会会員）〈発掘担当者〉
調査員	気賀沢　　進	（長野県考古学会会員・市博物館）〈発掘担当者〉
	小　原　晃　一	（　〃　　〃　）
	北　沢　雄　喜	（長野県考古学会会員）

調査員　田中清文（長野県考古学会会員）
〃　吉沢文夫（　〃　）
〃　伊藤　修（　〃　）
指導者　丸山敞一郎（県文化課指導主事）
〃　関　孝一（　〃　）
〃　今村喜興（　〃　）
〃　樋口昇一（　〃　）
〃　伴　信夫（　〃　）
〃　笹沢　浩（　〃　）
〃　青沼博之（　〃　）
〃　小林秀夫（　〃　）
〃　林　茂樹（日本考古学協会会員）　（順不同，敬称略）

第3節　発掘作業経過

9月5日，器材運搬を行い続いてグリット設定を行う。6日現地にて友野団長のあいさつのあと早速試掘作業にかかる。

発掘作業は思いもかけぬ古墳の発見という成果と30軒の古墳時代から平安時代の集落址を確認して10月13日すべての作業を終了した。

地元土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方々・長期間発掘に参加して下さった地元の協力者をはじめ，多くの方々のご協力とご配慮によって，ここに初期の目的を果し，調査を終了することができました。ここに心から感謝の意を申し上げる次第であります。

（以上気賀沢進）

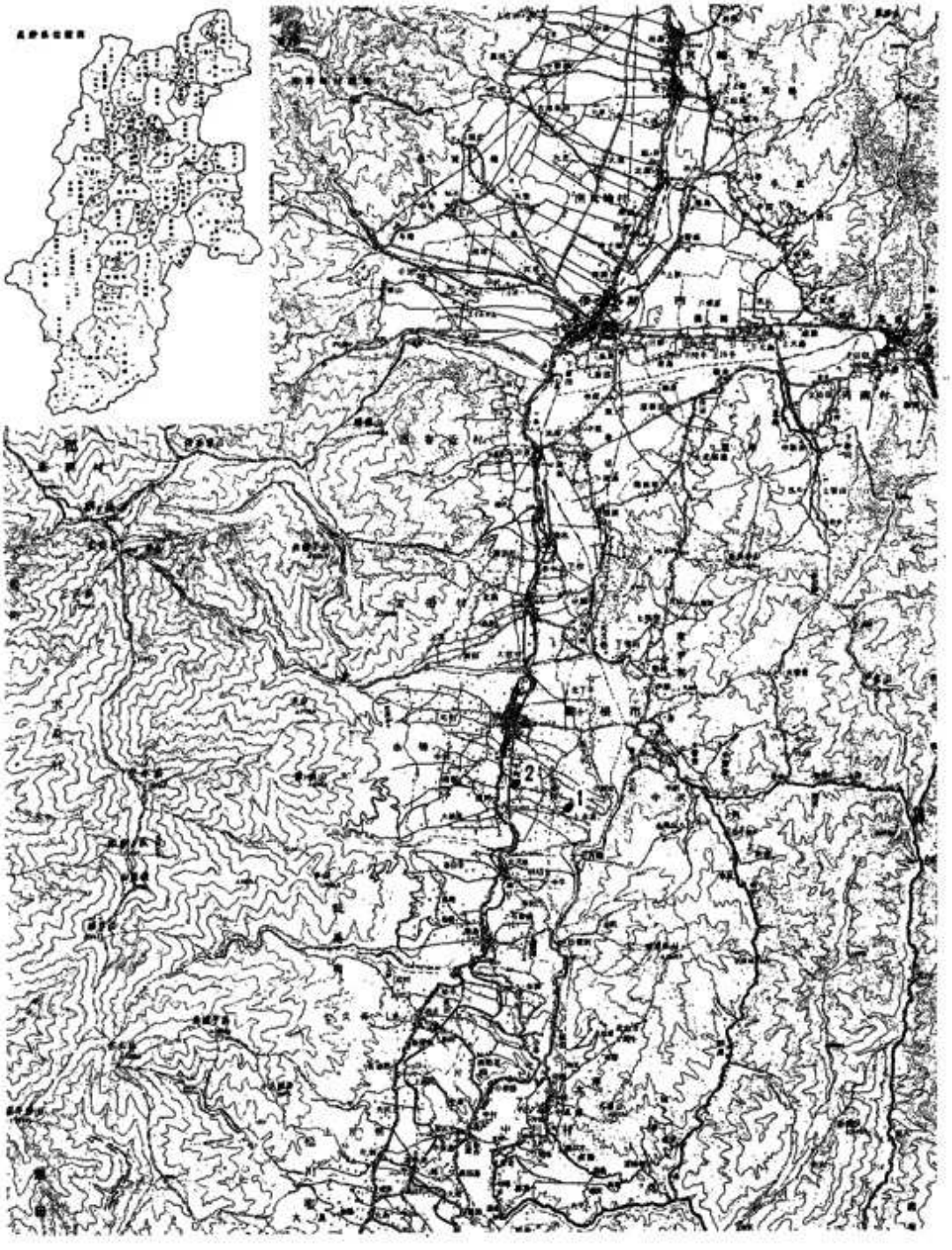
第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　位置及び地形（第1・2図）

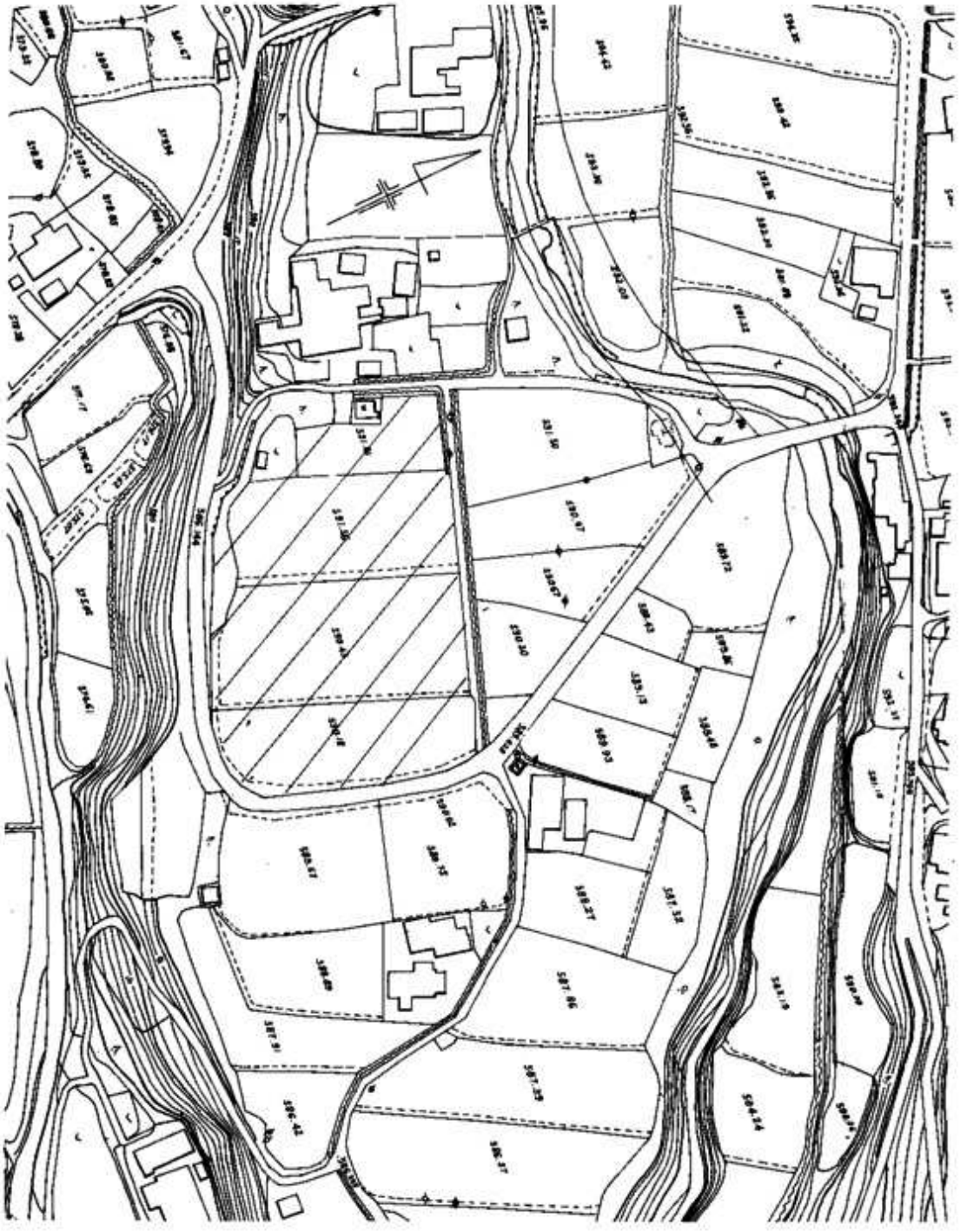
当遺跡は駒ケ根市赤穂上赤須中通り地籍に所在する。国鉄飯田線小町屋駅より南東2.3kmに位置し，標高591m前後である。

伊那谷は長野県の南部にあり，東に赤石山脈，中央構造線をはさんで戸倉山・高烏谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曽山脈があり，天竜川をはさんで西北に並走する。

駒ケ根市赤穂地区は市の境界となっている北の大田切川，南の中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。この両河川にはさまれた赤穂地区は中を更にいくつかの小河川が東流して田切地形を造っていることで有名である。赤穂地区の遺跡はそれらの小河川の沿岸にほとんどが分布している。



第1図　中通り下遺跡位置図（S＝$\frac{1}{200000}$，1は中通り下，2は荒神沢遺跡）



第2図　中通り下遺跡地形図（S＝$\frac{1}{2000}$）

当遺跡は上穂沢の北側第１段丘面に位置し，すぐ北側にはねずみ川が流れている。河川改修のため現在は整備されたが，10年ほど前まではかなり蛇行していたものである。南側を流れる上穂沢川は赤穂地区を南北に分断する河川で，源を中央アルプスに発し，国道153号線付近より深いＶ字谷を形成している。遺跡との比高差は20m ほどである。上穂沢と同様中央アルプスに源を発したねずみ川は遺跡の東から深いＶ字谷を形成し，東流するに従い上穂川との距離をちぢめ，当遺跡の東方800m で合流して天竜川に注いでいる。

当遺跡はこの両河川によってはさまれた台地土にあり，台地の幅は現況で200m 前後である。しかしながら発掘の結果では，ねずみ川が非常に南までくい込んでおり砂層が1.5m ほど推積しており氾濫原となっていたことが知られた。また上穂沢段丘崖ぎわは礫層となっており，遺構は，この礫層部分にはまったく構築されていないことがわかり，この間にはさまれた30～40m の幅の細長い台地上に立地している。

当遺跡の層位について簡単にふれてみたい。現況が水田のためノーマルな状態は示してはいない。耕作土（客土）を第Ⅰ層とし，以下に示すとおりである。

第Ⅰ層――耕作土（客土）
第Ⅱ層――地場
第Ⅲ層――埋土（旧地場含む）
第Ⅳ層――黒色土（旧表土）
第Ⅴ層――暗褐色土（漸位層）
第Ⅵ層――ローム層

このような層位関係がみられるが，開田時の状況によって第Ⅳ層をまったくない部分などがあったりすることは当然のことである。また一部に砂層がみられる部分もあり，氾濫原の広がりもみられる。

第２節　歴史的環境

昭和28年に行った赤穂地区の遺跡分布調査によると，遺跡数77箇所，遺物採集地点230箇所に及んでいる。最近の分布調査によって遺跡数100箇所ほどとなっている。

では中通下遺跡付近の遺跡について簡単にふれておきたい。

１．南原遺跡　上穂沢川の右岸，天竜川第１段丘上突端に位置している。昭和50年に発掘調査が行われ，縄文時代中期中葉の住居址９軒とその他土坑を確認している。打製石器を多量に出土し，石器の原石・剥片さらに剥片加工具と考えられる石器など特殊石器群を持つもので，石器製作址の性格を持つ集落として非常に注目される。

２．丸山南遺跡　南原遺跡の西方段丘上に位置し，昭和51年秋発掘調査が行われている。縄文中期中葉から後葉の大集落址で52軒の竪穴住居址を確認している。遺跡は東西 200m，南北50～70m の大規模なもので，集落全体を確認でき集落研究上貴重な遺跡である。

３．尾崎遺跡　ねずみ川の右岸にあり，台地の突端部に位置している。最近の分布調査によ

1.南原　2.丸山南　3.尾崎　4.原垣外　5.七免川　6.御射山
7.小鍛治上の原　8.小鍛治古墳群　9.赤須城址　10.上の原

第3図　中通り下遺跡付近遺跡分布図（S＝$\frac{1}{20000}$）

って発見された遺跡で縄文時代中期と思われる。遺跡の範囲は広い。

4．原垣外遺跡　尾崎遺跡の対岸，ねずみ川の左岸丘陵上の南斜面に位置している。昭和52年に発掘調査され，縄文時代中期の住居址30軒，奈良から平安時代にわたる住居址13軒，さらにほとんどが縄文時代中期に属すると思われる土抗300基あまりが確認され，大複合遺跡であることがわかっている。遺跡は北側丘陵上にかけて続くものと考えられる。

5．七免川遺跡　原垣外遺跡の北側を流れる七免川の左岸低位丘上に位置する遺跡である。開田による破壊が激しいが，弥生時代後期の遺物が多量に出土している。また縄文時代中期から後期の遺物も発見されており，広い範囲にわたる複合遺跡である。

6．御射山遺跡　七免川の北丘陵上に位置し，北には宮沢川が流れる。由緒古い美女ケ森大御食神社一帯から東に広がる大遺跡である。昭和50年に遺跡の東部分の発掘が行われ平安時代の住居址９軒が確認されており，当中通り下遺跡同様歴史時代研究上欠かせぬ遺跡である。

7．小鍛治上の原　御射山遺跡の東，天竜川第２段丘面上に位置しており，故下村修氏が桑畑の深耕によるロームブロック中より御子柴形尖頭器５点と若干離れた所よりブレイドを採集している。

8．小鍛治古墳群　小鍛治上の原と同一地籍内にあり，段丘下には小鍛治の元村がある。大正15年に発行された鳥居龍蔵博士になる「先史及原始時代の上伊那」によると９基の円墳が確認されているが，その後の開墾により破壊され現在完全な形で残るものは４基である。

9．赤須城　天竜川の第１段丘上突端にあり南側は宮沢川によって自然の堀としている。中世の城跡とされているが今だ詳細なことはわかっていない。周辺地域を含めると 100,000㎡を超す広大な城跡で堀は南北に走るもので８条を確認している。

10．上の原遺跡　原垣外遺跡の東方，七免川の対岸南側丘陵の端部にあり，正確なことははっきりしないが大きな遺跡である。丘陵の一部から縄文時代前期諸磯期の遺物が採集されている。

以上が本遺跡を取り巻く遺跡の概要であるが，過去の調査についてふれておきたい。

当遺跡は古くからの水田のため分布調査では確認されていなかったものである。昭和34年，今回の調査区域の東の限界点である道路を拡幅中に遺物が発見されたことによるのである。出土した遺物は市立博物館に保存されている。灰釉の双耳壺を初め須恵器の提瓶などかなりの量に及んでいる。当時現場に立合った方幾人かに出土状態を聞いた訳であるがまったくわからない状態である。

このようなことから今回の調査が非常に期待されていたわけであるが，灰釉を伴う遺構は全く検出されず，それ以前の時期の遺構のみで過去の採集品の出土状態を知ることはできなかった。

遺跡は現在この道路によって分断されているが，当然東側に続くわけであるが，一部破壊されており非常に残念なことである。

当遺跡名である「中通り」は通常「中通」とかかれ「なかどおり」と読まれているが，奈良～平安時代の大集落址で東山道駅址でないかと考えられている箕輪町中通遺跡と同様の字が用

いられている。この「中通」という名称には何らかの性格を持っているのではないだろうか。古代の地方における中心道路と考える訳であるが，今後に待ちたい。

第Ⅲ章　発掘調査

第1節　調査概要

前章で述べたとおり，過去に貴重な遺物が発見されている遺跡であり，多いに期待をかけて調査を行ったわけである。

遺跡が広範囲のため，分布調査を実施した所，上穂沢に面する段丘突端部は礫層となっており全く遺構・遺物の検出がなかったため，当初考えていたような台地全体にわたって遺構が検出される可能性はなくなり，台地中央部30～40mの幅に的を絞って調査することにした。

調査方法はグリット方式を採用し，遺構確認を待って全面発掘へと切り換えることとした。

出土遺物については重要遺物，床面上出土のものについてのみ平面図へのせカマド出土のものについては原則として全点図面上にのせることとした。

この調査によって台地の中央部に東西にわたる集落址と古墳1基を確認し得たわけである。

第2節　古墳と遺物

今回の発掘によって古墳の発見があった。今までにまったく存在の知られていなかったもので大きな収穫である。予想外の古墳発見は伝世古墳の事実がないことからして，かなり古い時点での破壊を考えさせ，また上伊那における古墳研究上大きな発見といえるわけである。

遺構（第5・6図）

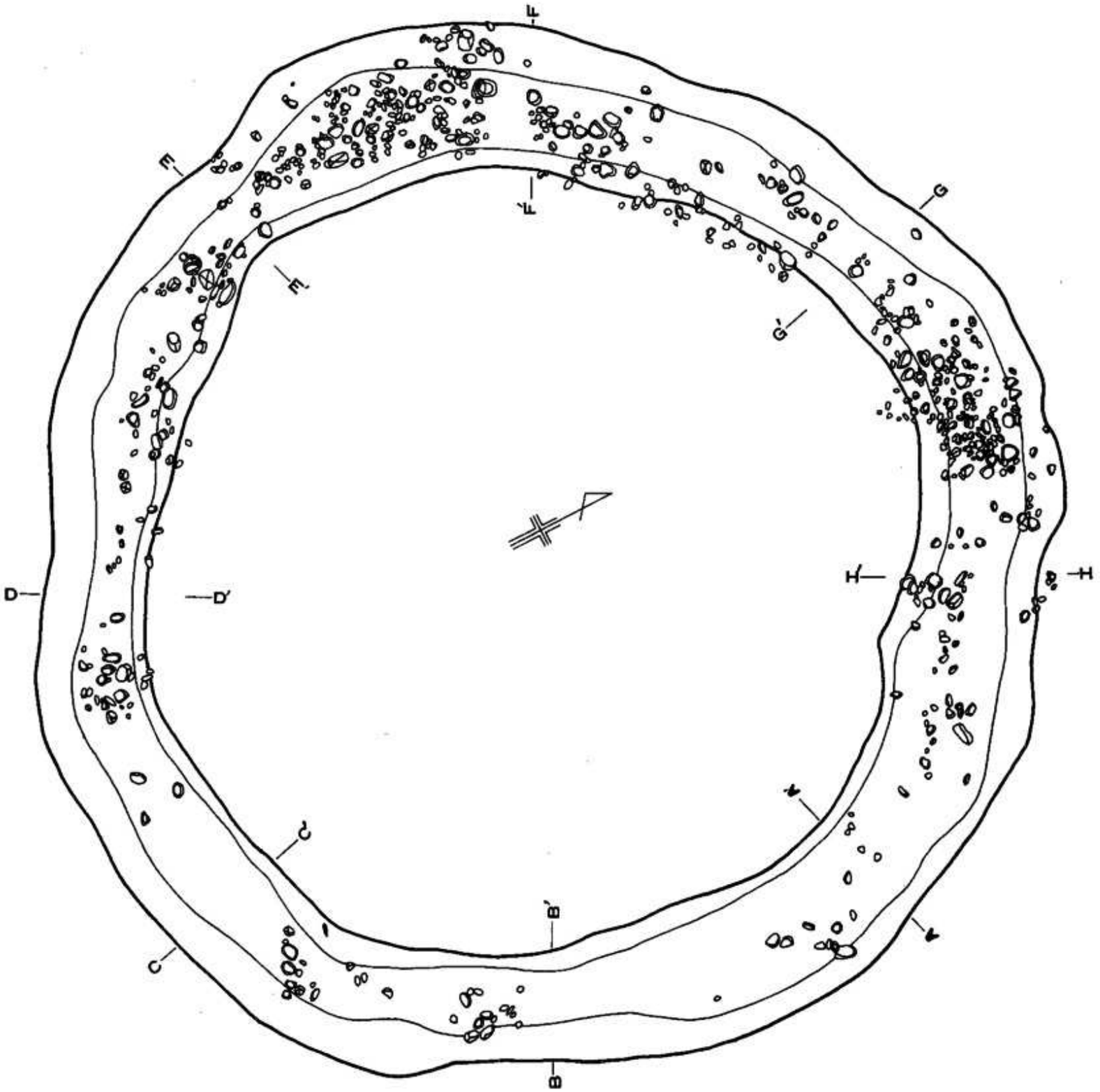
古墳といっても上部はすでに破壊されており，周溝のみ確認されたものである。周溝から中心部にかけて8本のトレンチを設定し，主体部確認に努めたが主体部の痕跡はまったくみられずに終わっている。

確認された周溝は一定していないが，外径ほぼ16m，内径12mを測ることができる。これからすると明らかに円墳が考えられるが墳丘の高さは全く不明である。

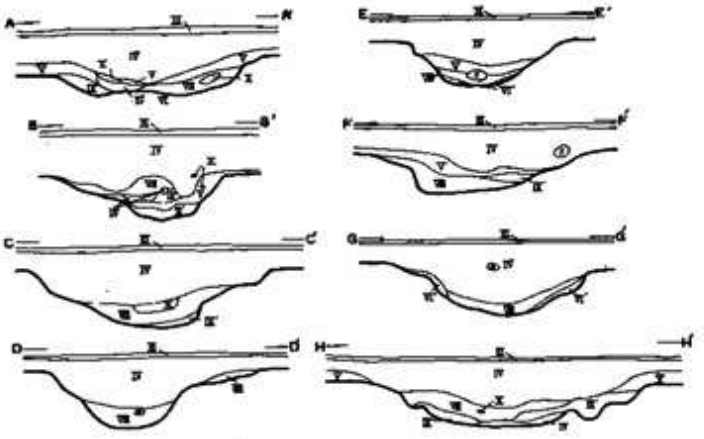
周溝上層には図示した如く頭大からこぶし大位の自然石がかなり発見され，遺物もそれらに交じって出土している。周溝外には全く石がみられないことからするとふき石が周溝内に流れ込んだものと考えられる。

周溝の深さ，掘り方も一定していない。層位は上面に黒色土（Ⅳ層）が覆っており下部は複雑である。

第４図　中通り下遺跡遺構図（S＝$\frac{1}{300}$）



第5図　古墳実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



第6図　古墳周溝断面図（S＝$\frac{1}{80}$）

周溝層序説明

Ⅲ 層ー埋土
Ⅳ 層ー黒色土（炭化物粒含む）
Ⅴ 層ー暗褐色土（　〃　）
Ⅵ 層ーローム層
Ⅵ'層ーロームふらん土
Ⅷ 層ー暗褐色土（ローム粒炭化物粒含む）
Ⅸ 層ー暗褐色土（ロームブロック炭化物粒含む）
Ⅸ'層ー暗褐色土（ロームブロック炭化物粒含む）ロームブロック多い
Ⅹ 層ーロームブロック

次に土器の出土状況についてみてみたい。土器は周溝上層より多量に出土している。図示したものは全部で34点であるが，完形品は少ない。21の甑と22の甕はそのままの状態で出土し，8～10の壺形土器は一部壊れて出土している。23～25の高坏はつぶれて出土している。

遺物は北西部周溝内にほとんど集中しており，ころがり込んだ状態で石と一諸に発見されており，周溝底部まで至っているものはなく，周溝上面からやや下がって出土している。33の須恵器の水瓶を除いては一箇所から出土している。33と他の遺物とは状態が違っていたのであろうか。いずれにしろどのような状態で祀られていたものかまったくわからない。

遺物（第8～12図）

遺物は土師器と須恵器，鉄鏃2点と小形砥石である。土器は非常に多いが須恵器は少なく，18 19の杯と20の蓋，22の蓋と33・34の水瓶だけで他はすべて土師器である。鉄器は35·36の鉄鏃2点である。

1・5は口縁が直立して短い甕形土器で壺に近いものである。6は甕の口縁部，2～4・7は甕の底部である。1～7はともに土師器である。

8～10は土師器の壺形土器で，ともに焼成は良く底部は欠かれている。口縁部に段を持つがS字口縁はややくずれている。

11・12は器高が高く口縁が直立しており盌に近いもので土師器である。

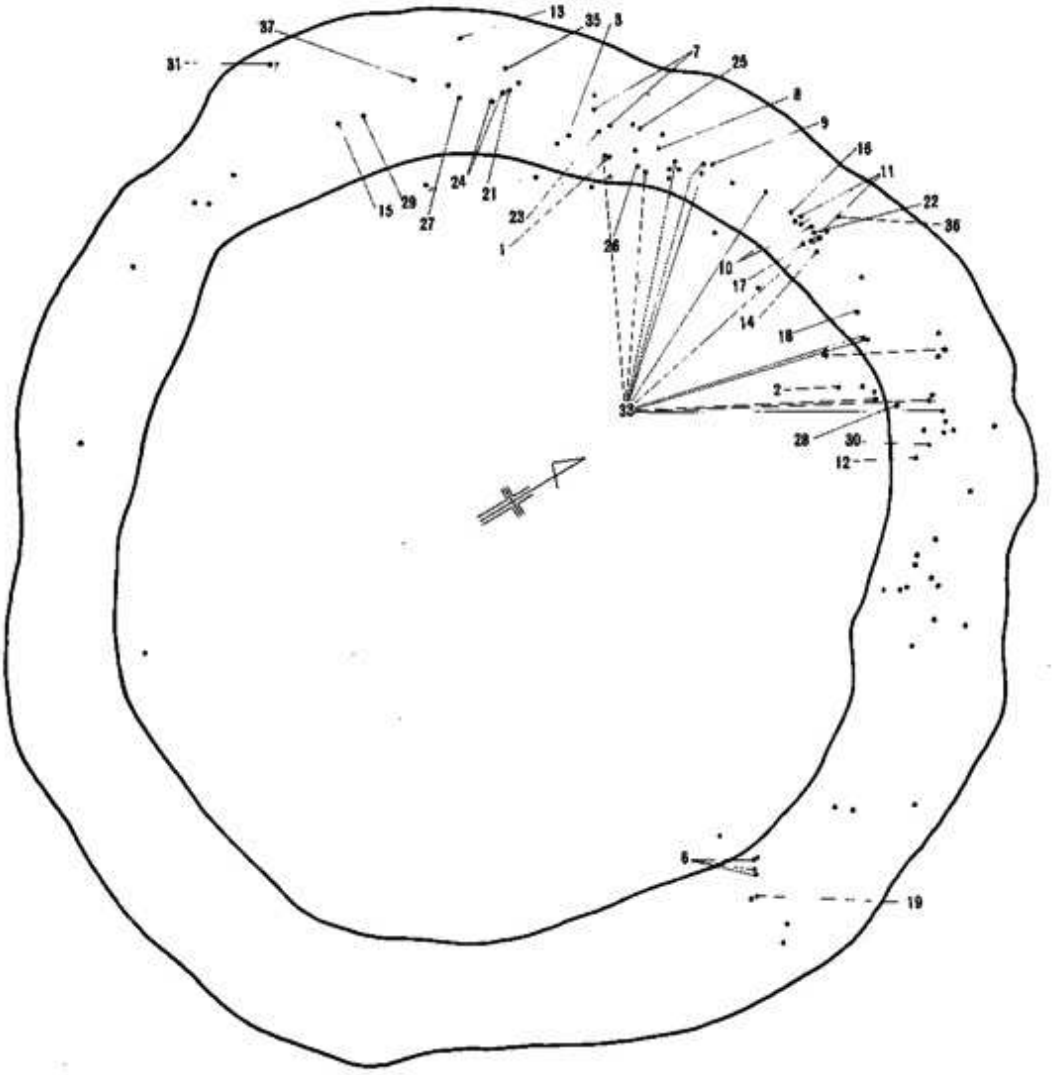
13～16は坏で土師器である。口唇はともに外反するが口縁が直立するもの（13・16）と外に開くもの（14・15）とがある。14～16は高坏の坏部とも考えられる。

17は坩とも考えられるが内面整形からすると坏とした方が良い。

18・19は須恵器の蓋付坏である。口縁はかなり内傾している。

20は須恵器の坏蓋である。

21は土師器の小形甑で単孔である。口縁を上にして完形で出土している。



第7図　古墳出土遺物接合図（S＝$\frac{1}{120}$）

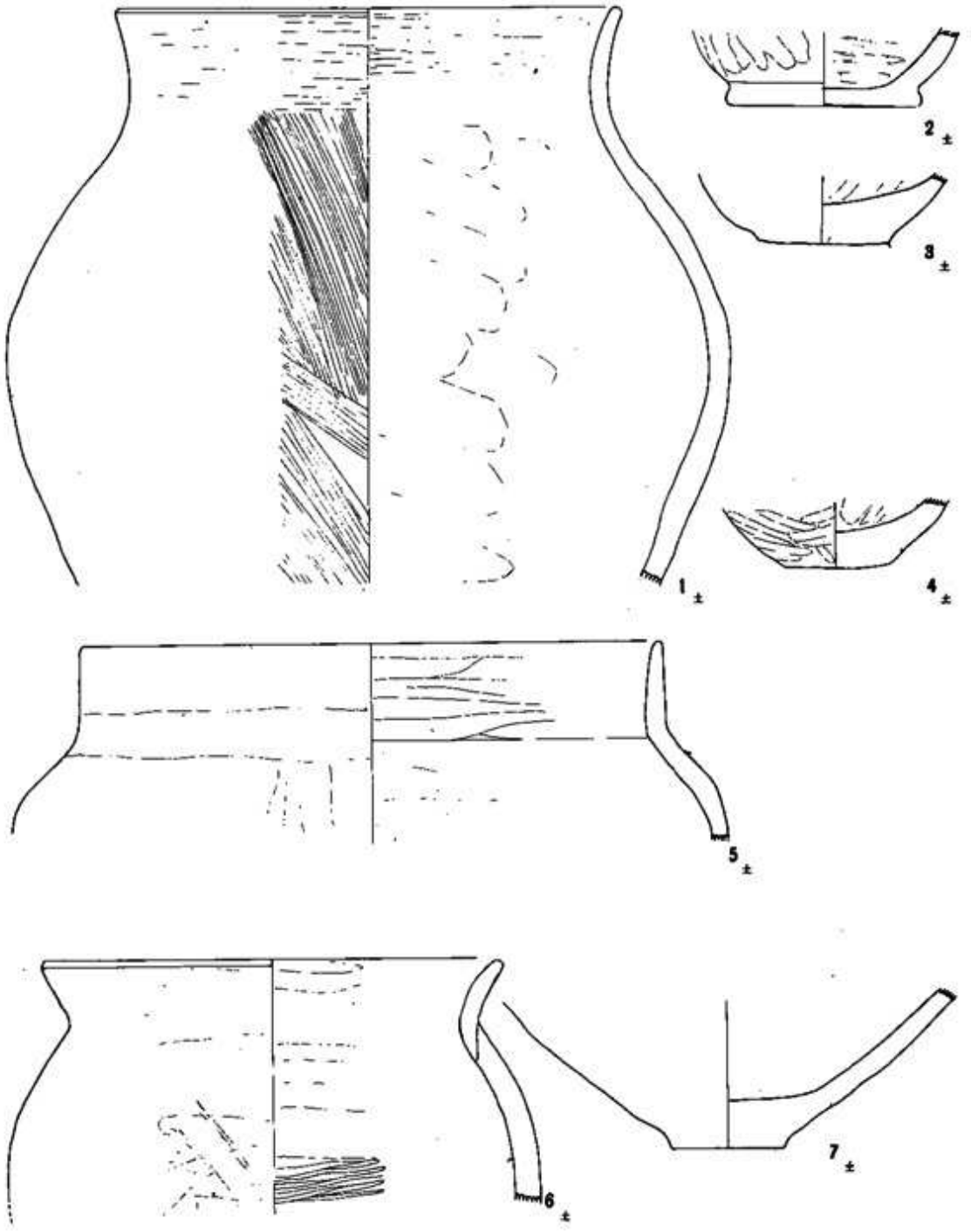
22は須恵器の甕で10の壺形土器と重なるような状態で出土しており，完形品である。自然釉がかかった優品である。

23～32はすべて土師器の高坏である。23～25はほぼ完形である。23・25，30～32の坏部は内黒である。脚部はかなり開くものが一般的のようである。

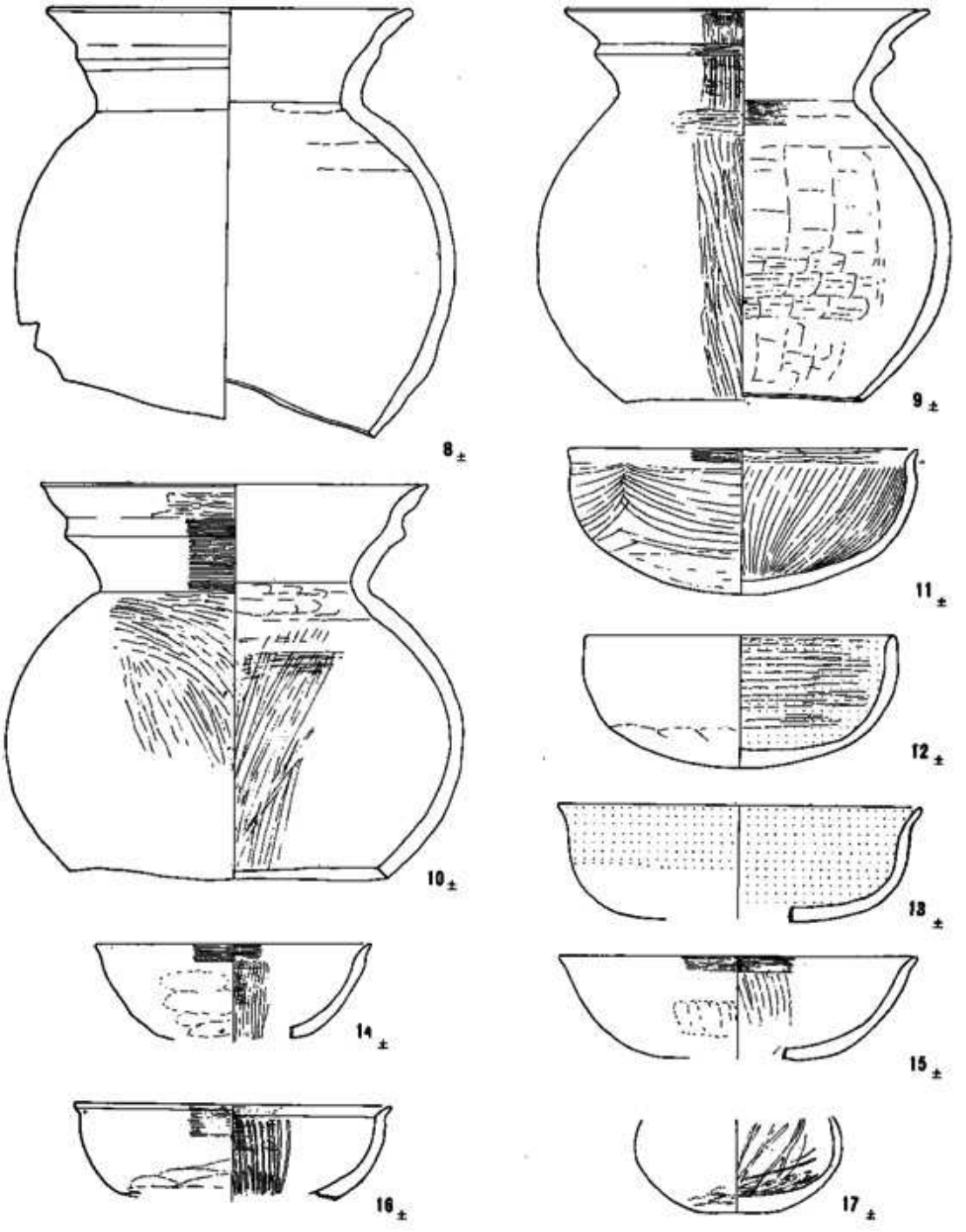
33・34は須恵器の水瓶である。33は非常に大きなものである。34には自然釉がみられる。

35・36は鉄鏃，37は小形の砥石である

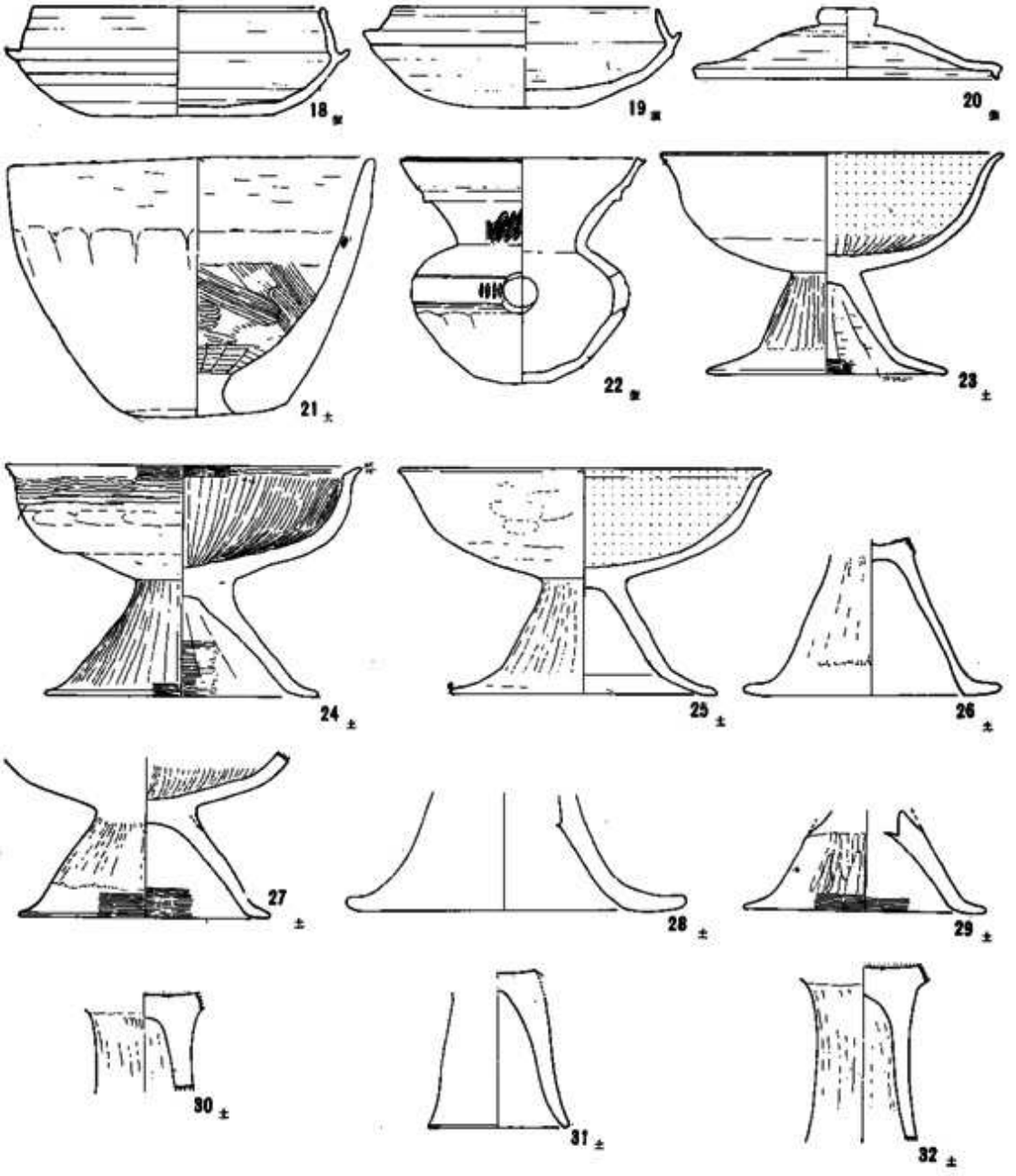
これらの土器の時期であるが須恵器は陶邑編年のＴＫ47窯期に比定でき６世紀初頭に位置づけられ土師器もほぼ同時期と思われる。19の蓋付坏は後出するものである。　　（気賀沢　進）



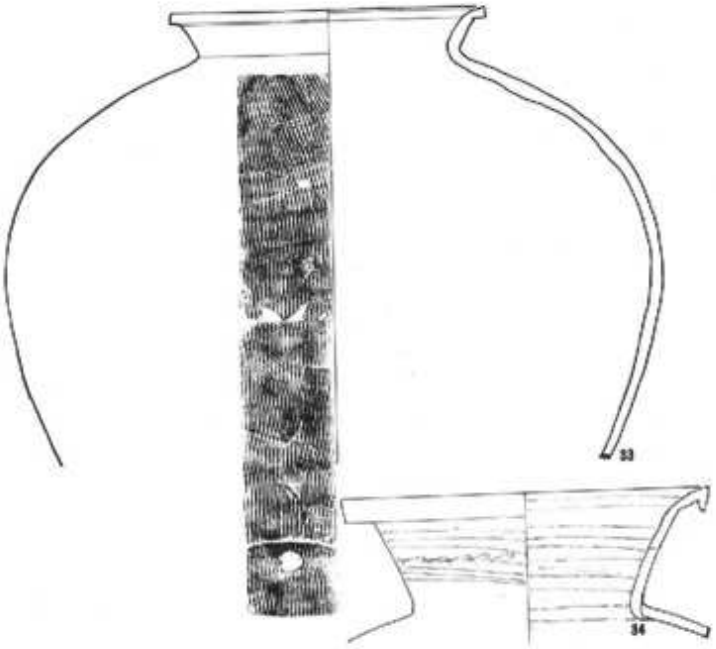
第8図　古墳出土土器（$\frac{1}{3}$）



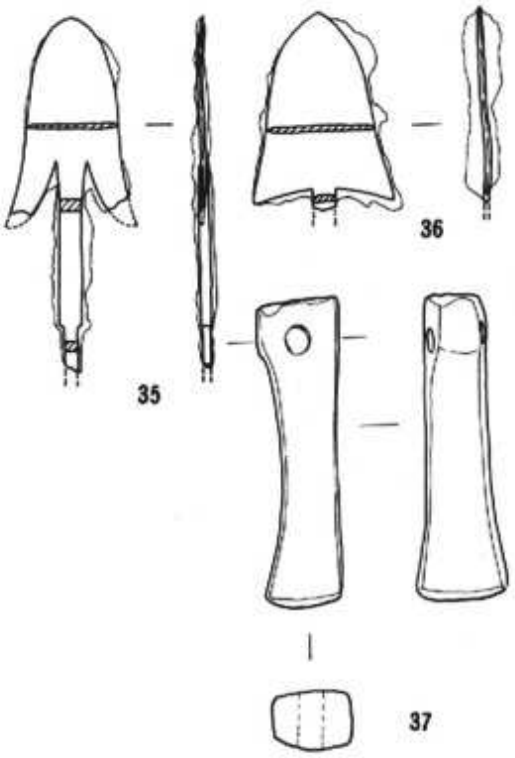
第9図　古墳出土土器（$\frac{1}{3}$）



第10図　古墳出土土器（$\frac{1}{3}$）



第12図　古墳出土土器（$\frac{1}{4}$）



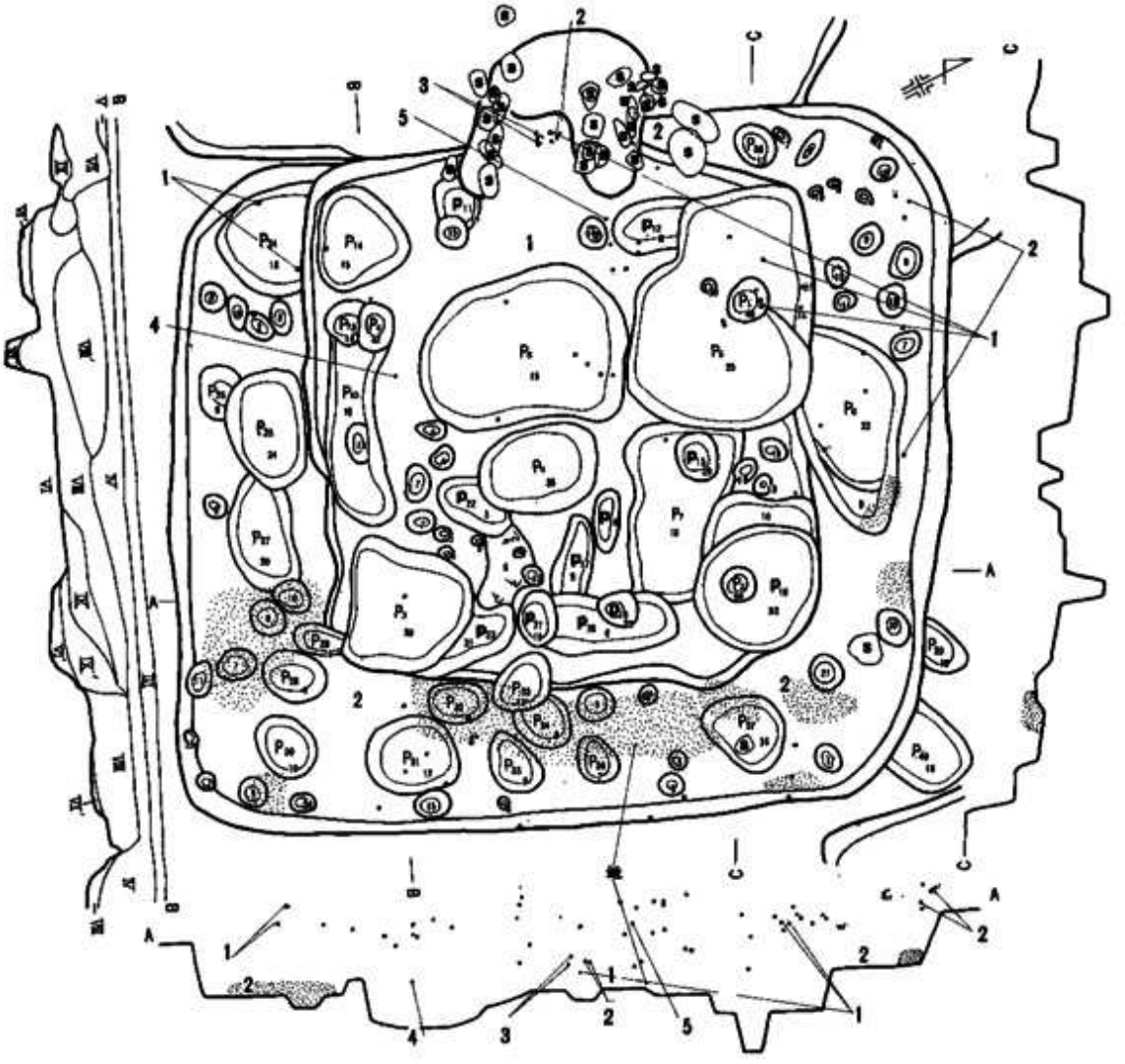
第12図　古墳出土鉄製品（$\frac{1}{2}$）

第3節　住居址と遺物

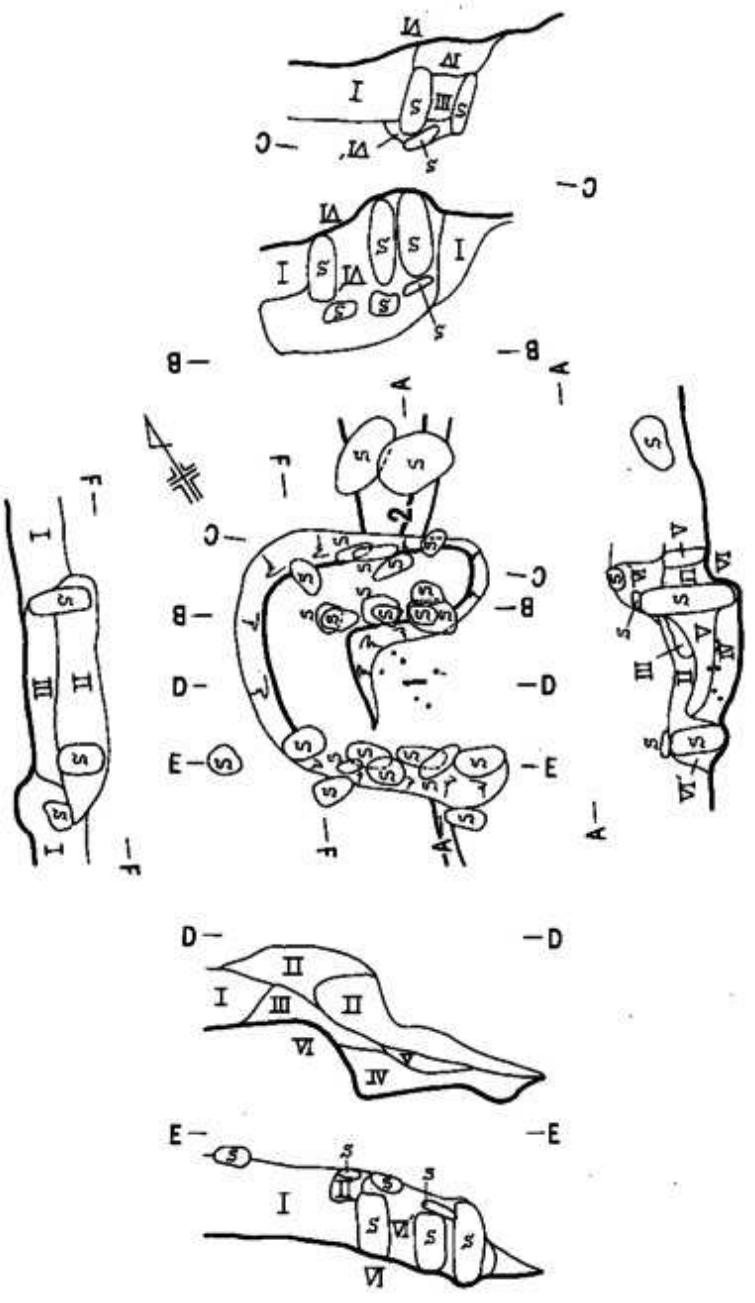
1　第1号住居址（第13～15図）

遺構（第13・14図）

当住居址は古墳の北東にあり，第2号住居址の西部分を壊ってつくられている。西には第4号住居址がある。一部第4号住居址を切っておる。当住居址のカマドが第4号住居址の床面上にあることからしてもその切り合い関係は明らかである。



第13図　第1・2号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第14図　第1・2号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{20}$）

プランは隅丸長方形で4.2×3.8mを測る。壁の立ち上がりは直に近く第2号住居址との床面差は20cm前後である。床面はロームを叩きしめ固いが浅い大きな不定のピットによって壊されている。このような例は赤穂地区においても幾例かあり，カマド内の灰や焼土の捨て場としたものではないかと考えている。

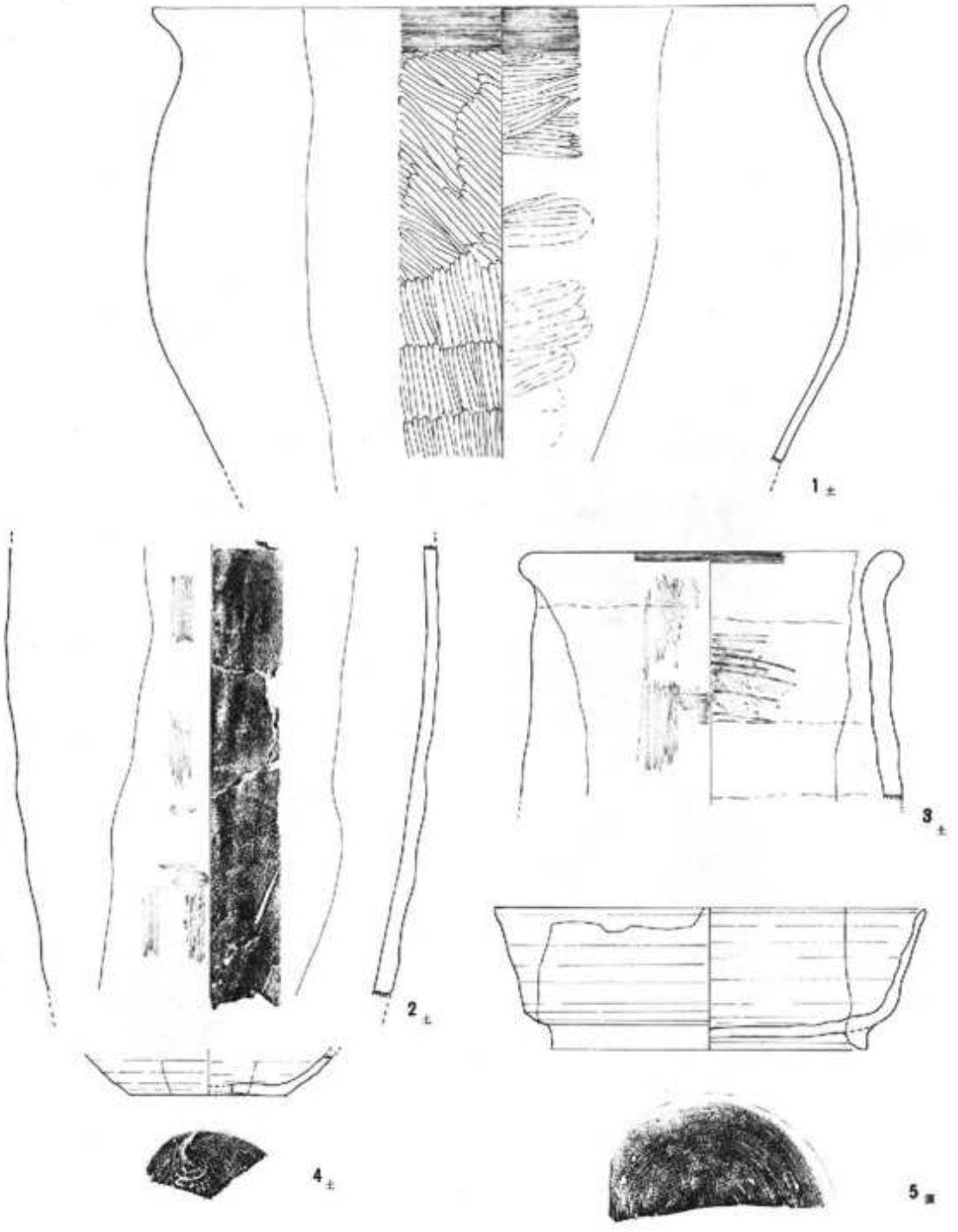
主柱穴はP_1，P_2 P_3，P_4の4本と考えられる。

カマドは西壁中央にあり石心造りである。すぐ右側に石組みがみられる。第2号住居址のカマドの一部と考えている。

第4号住居址床面を20cmほど抉り煙道部は覆土上に構築している。残存状態は非常に良い。

遺物（第15図）

出土土器はあまり多くない。土師器では甕が多い。須恵器は5の高台付坏の外に蓋・甕の破片があり



第15図　第1号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

主体は土師器である。

1～3は甕で2・3は烏帽子形である。ともに土師器である。

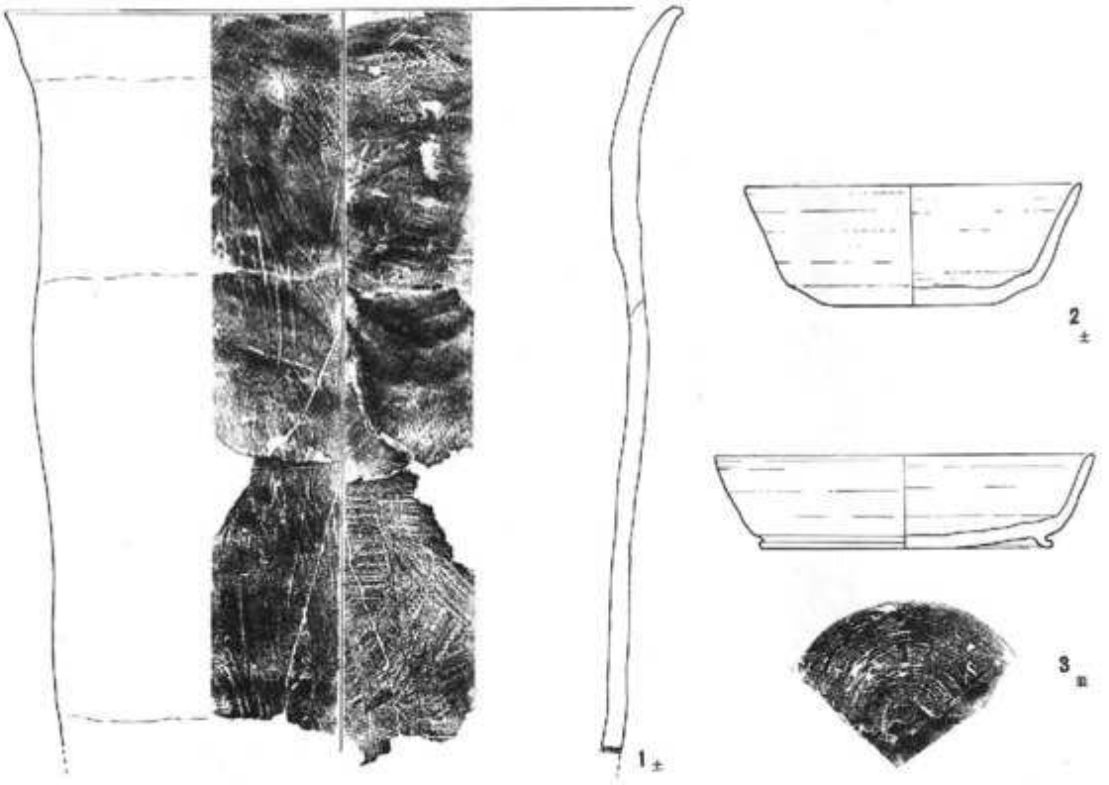
4は土師器の坏で口縁を欠く。5は須恵器の高台付坏である。1はカマド内出土の破片と他からのものとが接合している。

時代は奈良時代末と思われる。　　（小原　晃一）

2　第2号住居址（第13・14・16・17図）

遺構（第13・14図）

当住居址は第1号住居址によって中央部から西側を破壊されたもので西を除く三方がテラス状に残っているものである。北西コーナにて第3号住居址を切っている。第4号住居址との関



第16図　第2号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

第17図　第2号住居址出土鉄製品（$\frac{1}{2}$）

係はやはりカマドの残存からして当住居址の方が新しいと思われる。

プランは隅丸長方形で5.5×6.0mを測る。床面は残存部のみであるが固く叩きしめられており良好である。壁の立ち上がりはややゆるやかで壁高は40cmを測る。床面上には部分的にかなりの焼土の堆積がみとめられ火災にあったことがうかがわれる。

主柱穴は定かでない。

カマドは第1号住居址の北にあり一部は壊されているが石心造りである。西壁中央やや北寄りである。

遺物（第16・17図）

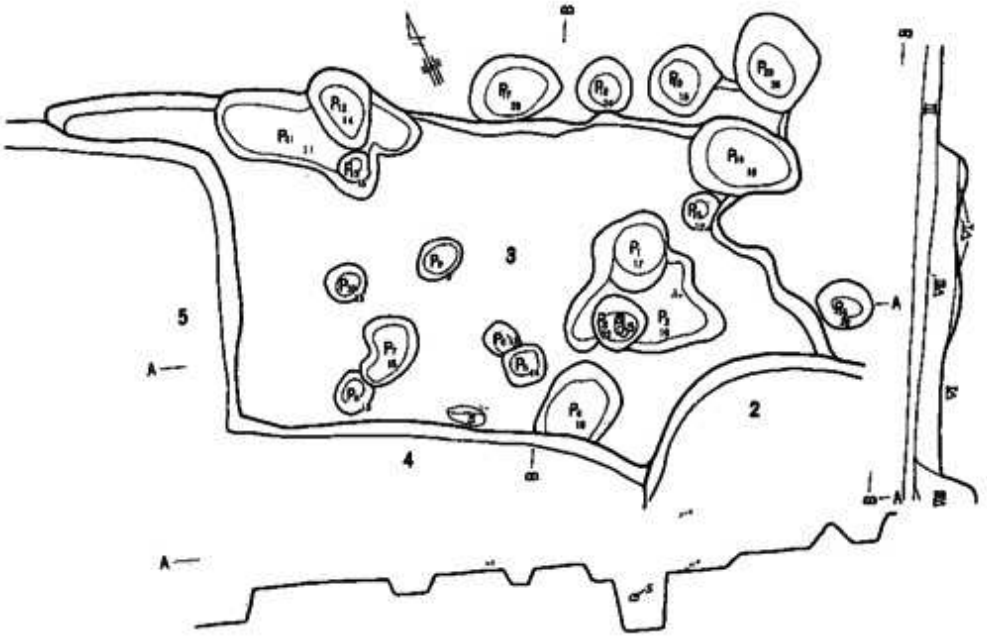
遺物は残存状態からすれば多いほうである。土師器が主体を占め須恵器は3を除いては甕の破片のみである。土器の外に鉄錐（第17図）1点が出土している。

1は土師器の甕で烏帽子形である。2は土師器の坏で器高はやや高い。3は須恵器の高台付坏である。時代は奈良時代中葉である。　（気賀沢　進）

3　第3号住居址（第18図）

遺構（第18図）

当住居址は南半分を第1・4号居址によって切られ，西側は第5号住居址に切られており約三分の一を残すのみである。



第18図　第3号住居址実測図（S－$\frac{1}{60}$）

プランは隅丸長方形を呈すと思われるが規模は不明である。床面はあまり固くないが平担である。数多くのピットがみられるが主柱穴と考えられるものはP3のみである。これからすると大分大きな住居址と推定される。

カマドは多分西側にあったものと思われる。

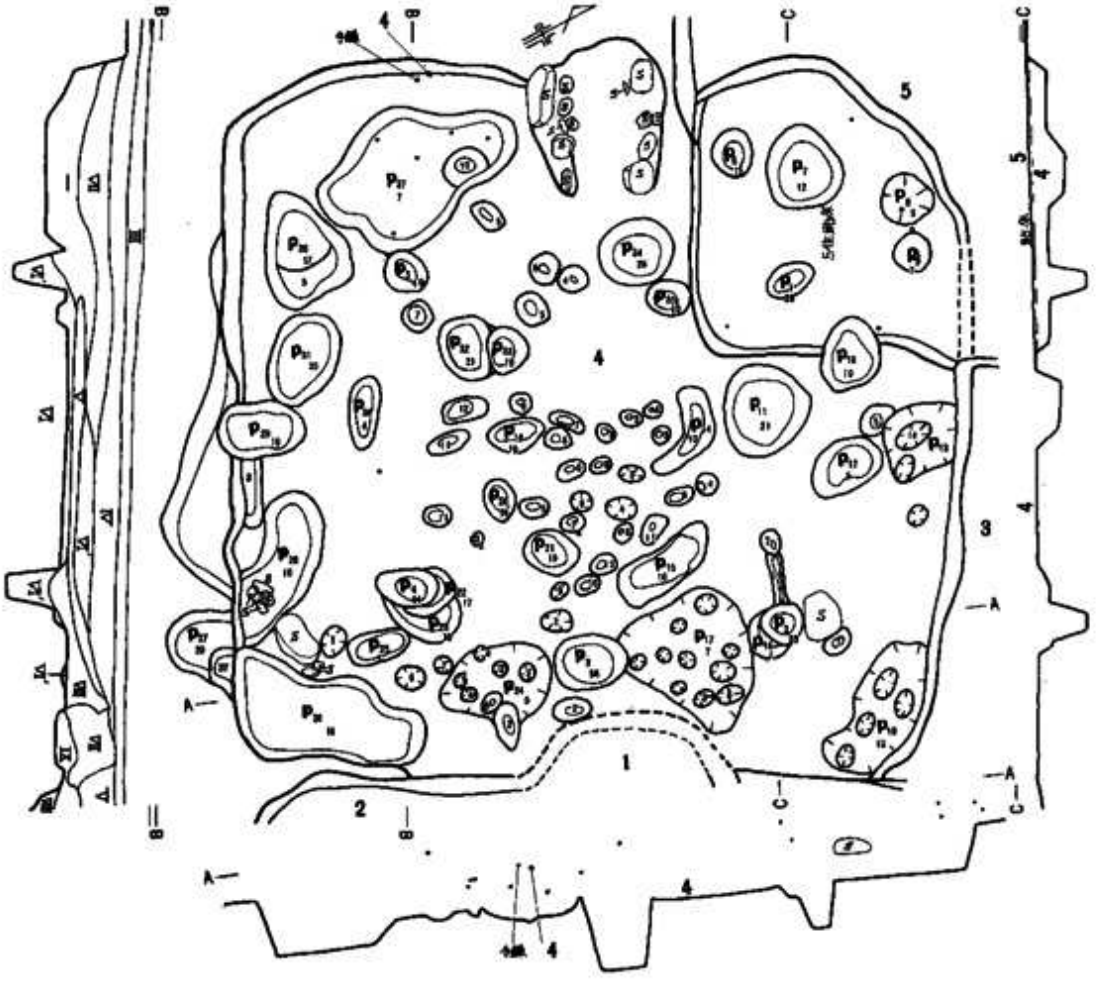
出土土器は非常に少ない。土師器は甕の破片が多く，須恵器は甕の胴部破片である。

（気賀沢　進）

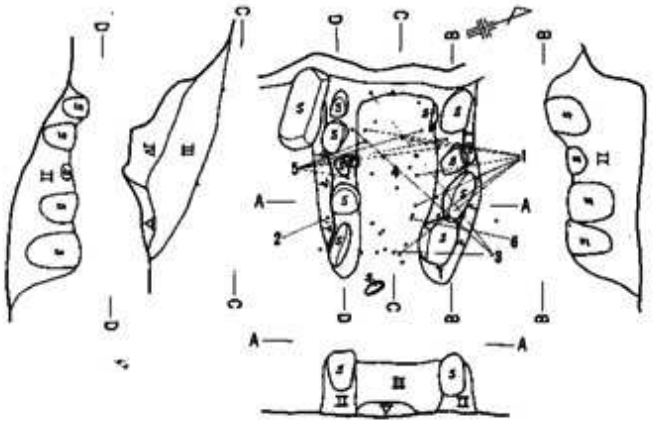
4　第4号住居址（第19～22図）

遺構（第19・20図）

当住居址は第1・2号住居の西にあり一部東側は切られている。北側第3号住居址を大きく



第19図　第4号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



第20図　第4号住居址カマド実測図（S－$\frac{1}{40}$）

壊しており，北西部は第5号住居址によって貼り床されている。

プランは隅丸方形で5.6×5.7mを測ることができる。壁の立ち上がりは直に近い。

床面はやや凹凸するも固く叩きしめられており良好である。主柱穴はP_1, P_2, P_4, P_5の4本を基本とするがP_2とP_4の中間やや外側に深いピットがあり柱穴の可能性もある。

カマドは西壁ほぼ中央にあり石心造りで残存状態は良い。わずかに壁を削って煙道部としている。袖石は床面上に黒色土を置きその上にのせている。

さて第1～5号住居址の新旧関係についてふれておきたい。第3号住居址は第2・3・4号住居址に切られており最も古いと考えられる。次に第1・2・4号の関係であるが，カマドの残存状態からして第4号住居址が古く第2号・第1号住居址となる。第5号住居址は第4号住居址に貼り床しているので明らかに第4号住居址より新しくなる。しかしながら第1・2号住居址と第5号住居址の関係は切り合い関係だけでは不明である。図示したものが下のものである。

3 →4 →2 →1
↘ 5（不明）↗

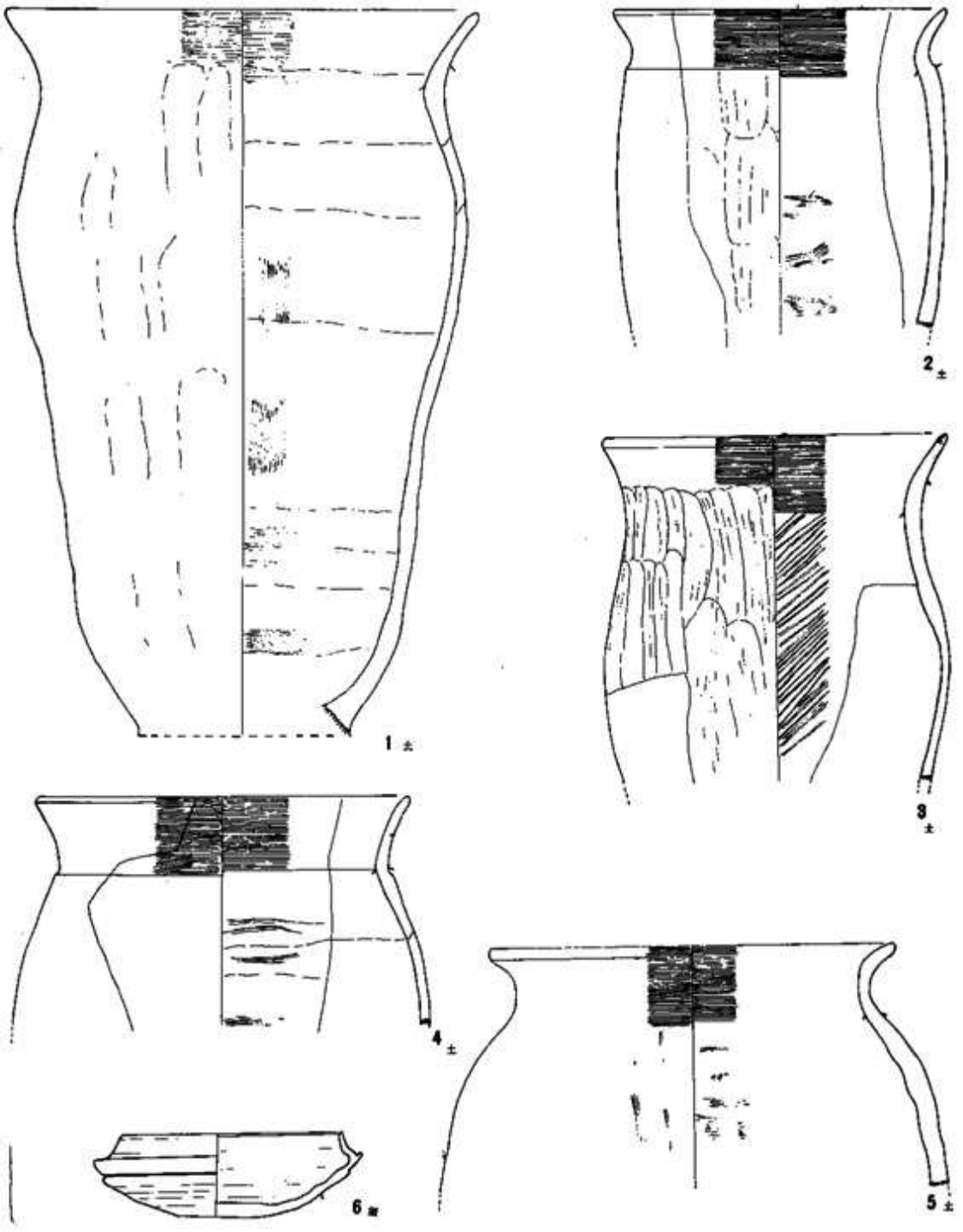
遺物（第21・22図）

出土土器は多い。とりわけカマド内部より多く出土している。土師器が主体を占め甕が多い須恵器はわずかで6の杯と甕がある。鉄製品として覆土上層より手鎌の一部（第22図）が出土している。

1～5は土師器の甕である。4は覆土上層より出土したもので他はすべてカマド内出土のものである。1は半分ほど5はほぼ周るもので他は破片である。

6は須恵器の蓋付杯で完形品である。カマド内より出土している。

時代は6世紀末～7世紀初頭陶邑のTK43～TK209窯期に比定される。　（小原　晃一）



第21図　第4号住居址出土土器（$\frac{1}{8}$）

5　第5号住居址（第23～25図）

第22図　第4号住居址出土鉄製品（$\frac{1}{3}$）

遺構（第23・24図）

当住居址は東側で第3号住居址を切り，南東部は第4号住居址に貼り床している。

プランは隅丸方形4.1×4.3mを測る。壁の立ち上がりはややゆるやかで壁高は一定していない。西側中央部から南側にかけて周溝がみられる。多分貼り床部分まであったものと思われる。

床面は平担で固く叩きしめられている。ピットはカマドの北側に浅いものがみられるのみで柱穴らしきものは全くみられない。貼り床はあまり明瞭でない。

カマドは東壁中央にあり石心造りである。全体に小さく煙道部に石がみられるのみである。カマドの南側は第4号住居址への貼り床部に構築されている。基底部はかなりの掘り込みがみられる。

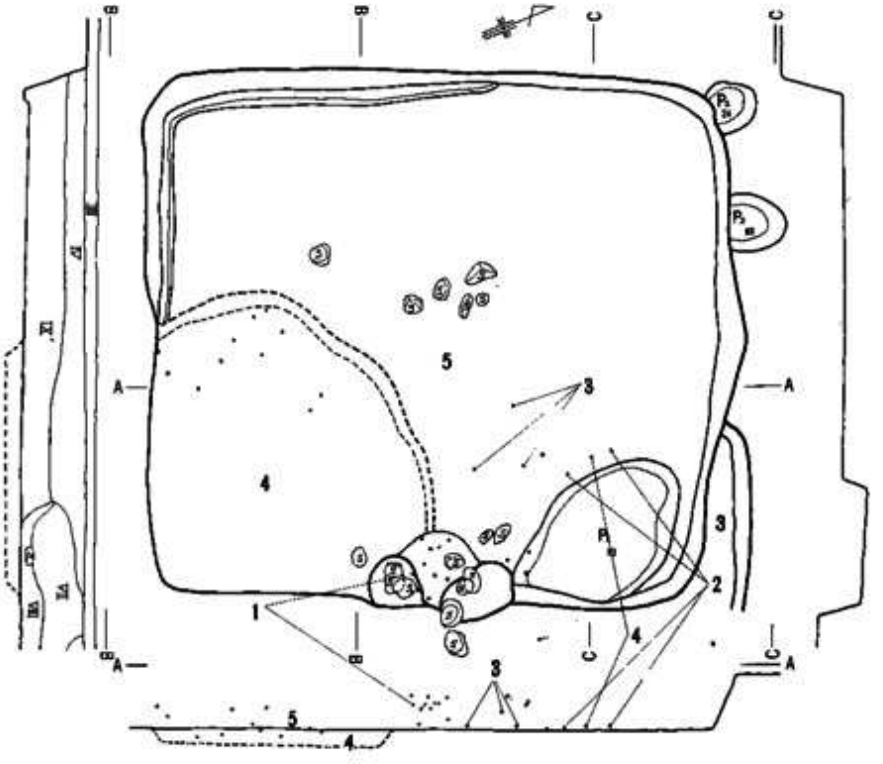
遺物（第25図）

出土土器は少ない。やはり土師器が主体を占めている。

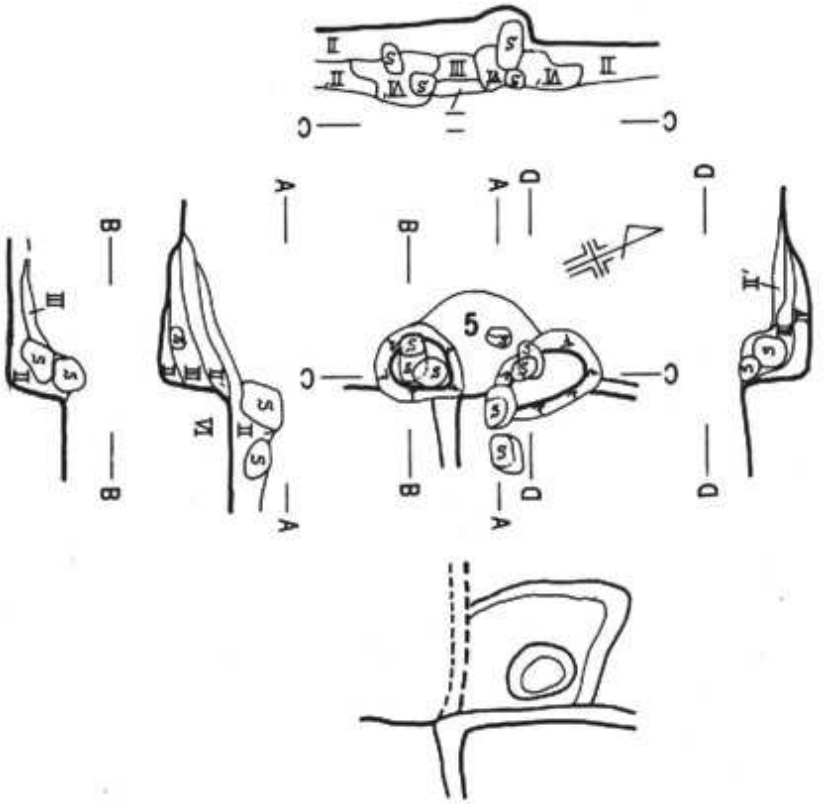
1・2は土師器の甕でともに胴部である。3は須恵器の甕で胴下半部のものである。

4は須恵器の蓋付坏である。

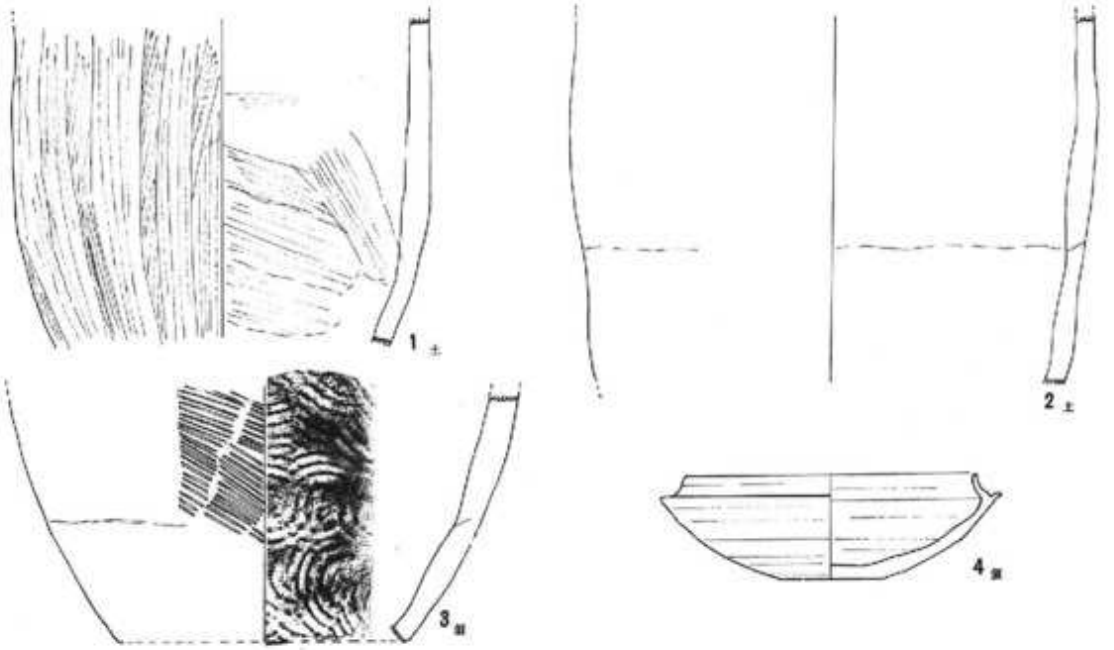
時代は7世紀初頭に位置づけられると思われる　　（気賀沢　進）



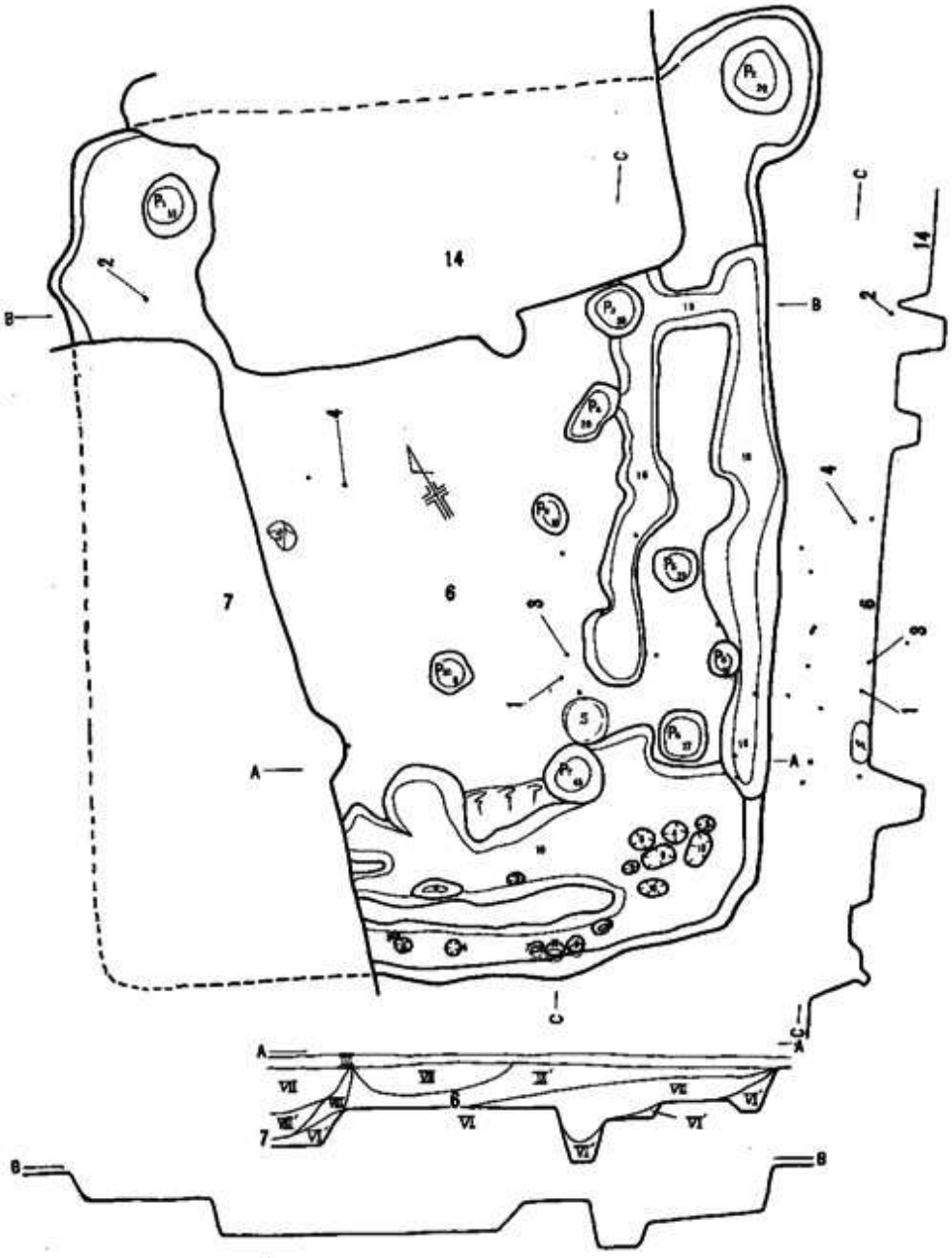
第23図　第5号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



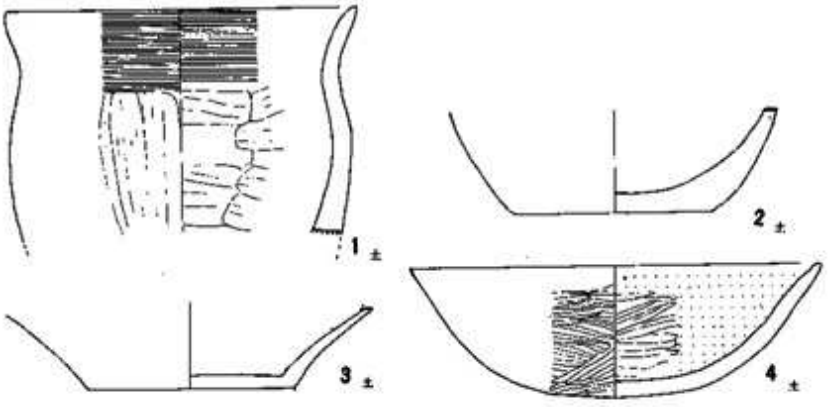
第24図　第5号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第25図　第5号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第26図　第6号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



第27図　第６号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

6　第６号住居址（第26・27図）

遺構（第26図）

当住居址は第１～５号住居址の西側にあり、北側は第14号住居址に西側は第７号住居址に切られており，北西部は狭い床面でつながっている。

残された北西部コーナを結んでみるとプランは隅丸長方形と思われる。大きさは5.5×6.2mと推定される。北東にて張り出しを持つものと思われる。

壁の立ち上がりはややゆるやかである。床面はわずかに凹凸あるが全体に平担で固く叩きしめられている。

主柱穴はP_3，P_7が考えられるがP_3はやや中に入る気もする。東壁とその内側，南壁からやや入った所に溝があるが，周溝であろうか。

カマドは多分西壁にあったものと考えられる。

遺物（第27図）

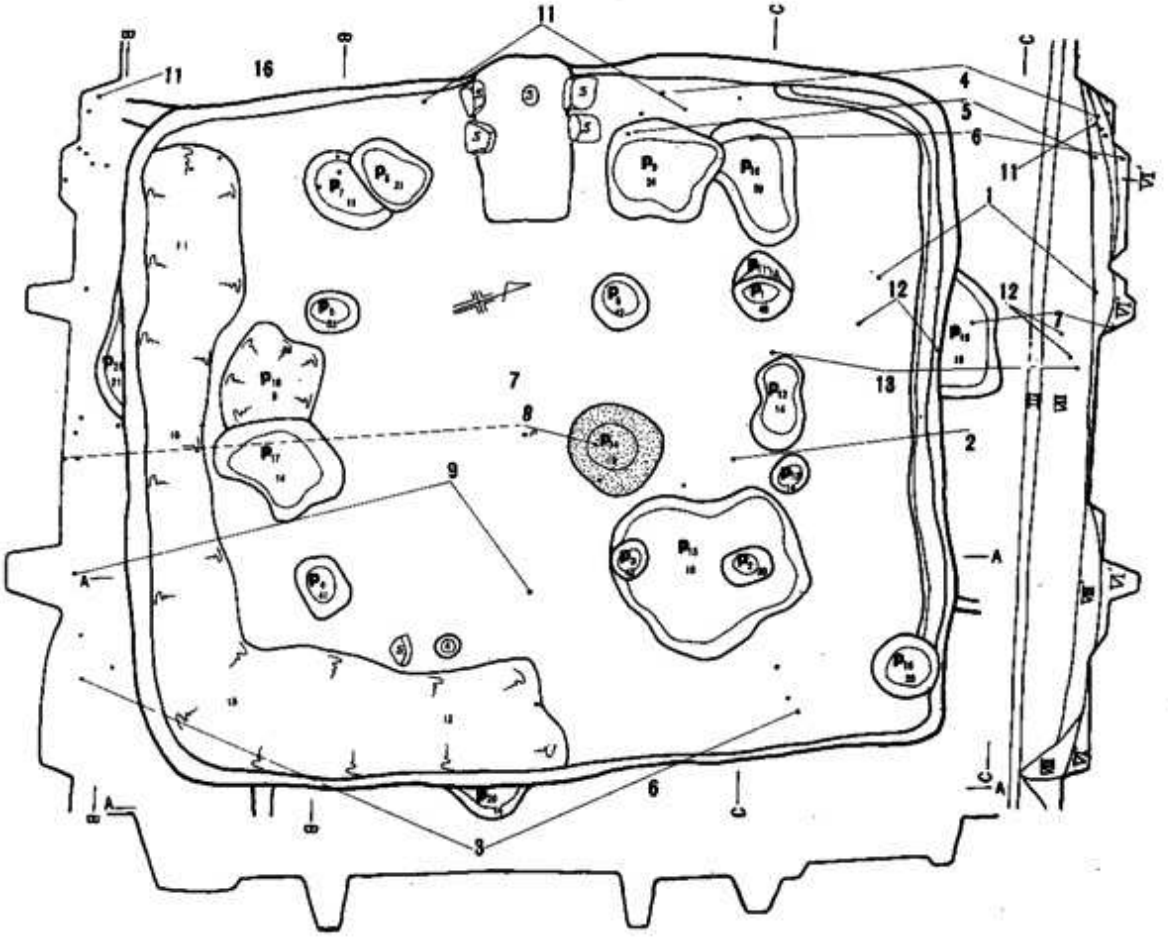
出土土器は多くない。須恵器はほんのわずかで土師器が主体を占めている。

１・２は土師器の甕で２は底部である。

３は土師器で坏と思われる。

４は土師器の内黒の坏で丹念なヘラ磨きが行われる。

時代は７世紀後半と思われる　　（気賀沢　進）



第28図　第７号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）

7　第７号住居址（第28～31図）

遺構（第28・29図）

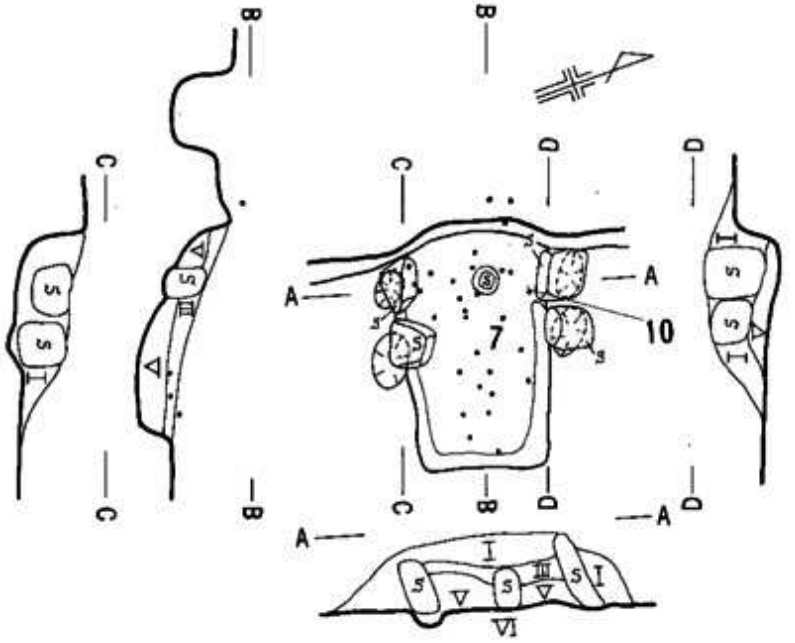
当住居址は東側で第６号住居址を西側で第16号住居址を切っている。

プランは隅丸長方形で大きさは5.3×6.3m を測る。床面は良く叩きしめられており平担である。

壁高は北側は直に近いが他はややゆるやかである。壁高は南側が高く40cm前後，他は30cm前後である。第６号住居址との床面差は15cmほどである。

P_1，P_2，P_4，P_5 が主柱穴と考えられるが，P_3～P_6 が対応してあり，柱穴とすれば６本となるがはっきりしない。さらにP_3とP_6の真ん中にP_{14}があり，内部には焼土が充満しており甕の底部（第28図の８）が出土している。

カマドは西壁中央にあり，わずかに壁を削っている。基底部は手前を深く掘ってあり，袖石



第29図　第7号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{20}$）

は両側に2個ずつと小さなものである。奥中央に支石がある。

遺物（第30・31図）

出土土器は多い。やはり土師器が主体を占めており須恵器は少ない。

1～9はすべて土師器の甕である。1・4は烏帽子形と思われる。

10～13は須恵器で10は高台付坏，11は坏蓋，12は短頸壺，13は長頸壺である。

時代は奈良時代後半と考えられる。　（小原　晃一）

8　第8号住居址（第32～34図）

遺構（第32・33図）

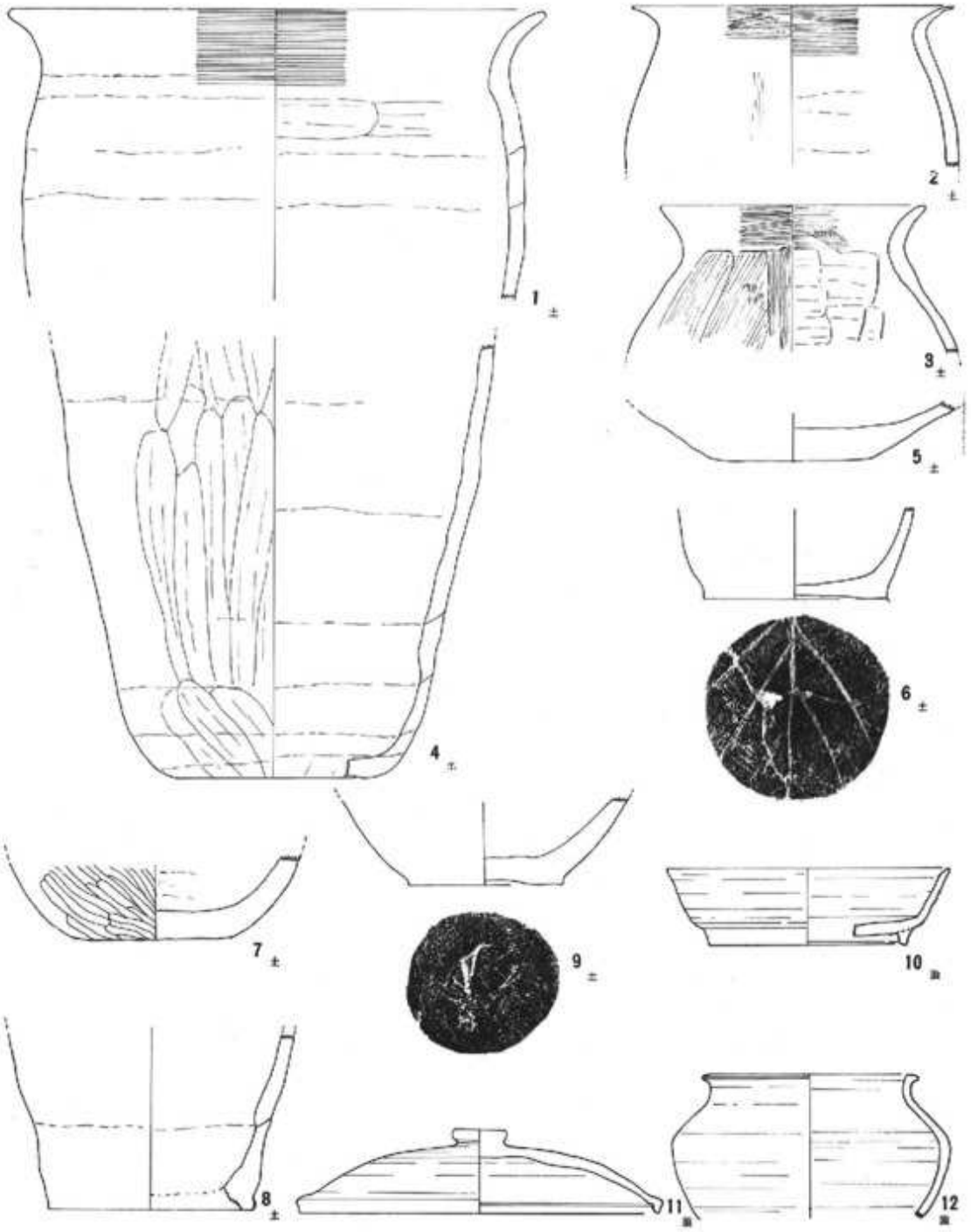
当住居址は第5号住居址の北にあり，その間には柱穴址がある。北側は砂礫層となり遺跡立地の限界となっている。

北西部は攪乱のため壊されている。プランは東壁が張り出しており不整であるが，隅丸方形に近いものと思われる。大きさは5.7×6mである。

壁の立ち上がりはゆるやかで，壁高は西で20cm前後東に行くに従って低くなっている。

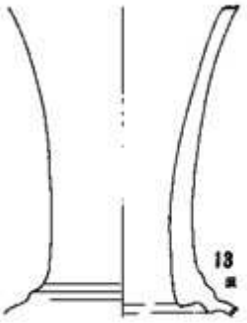
床面は礫が露出しておりぼこぼこしている。多くのピットがみられるが，主柱穴はP_1・P_4，P_9，P_3の3本が考えられ，攪乱部の1本を入れて4本と考えられる。

カマドは西壁ほぼ中央にある。袖石は左側に2個みられるのみである。破壊されたものか，



第30図　第7号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

そのままのものかは不明である。



第31図　第7号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

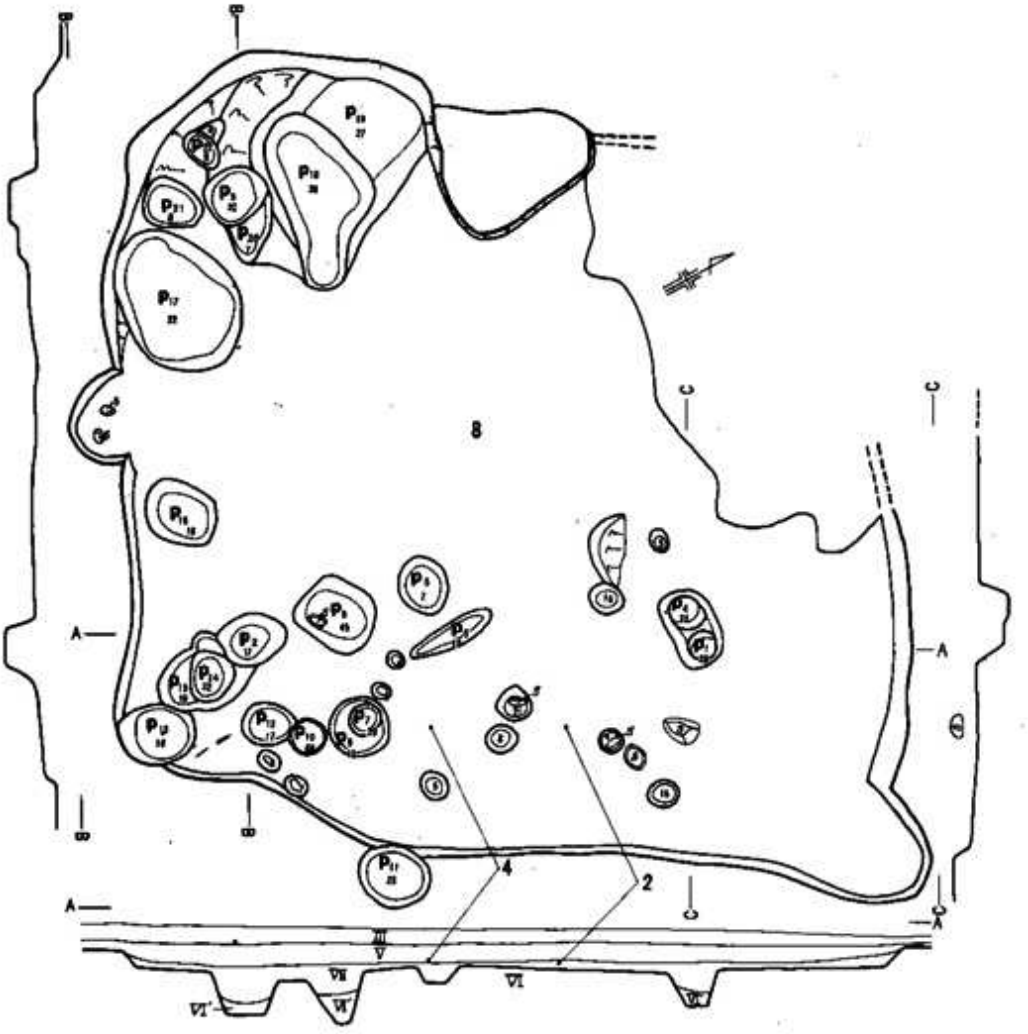
遺物（第34図）

出土土器は多くない。須恵器は高台付坏と坏の破片があるのみで土師器が主体を占めている。甕がほとんどである。

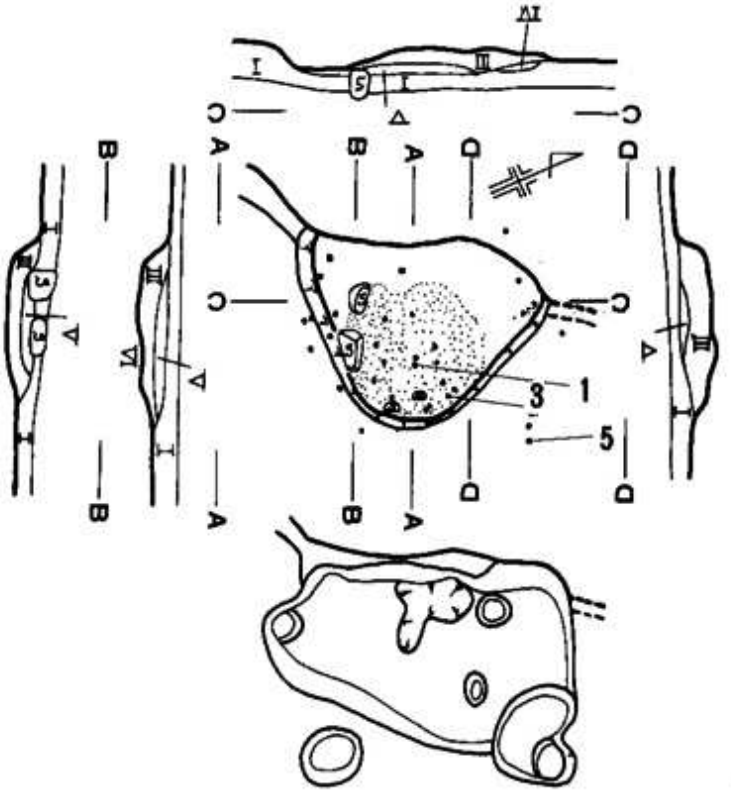
1～3は土師器の甕である。

4・5は内黒の坏でともに図上復元のものである。

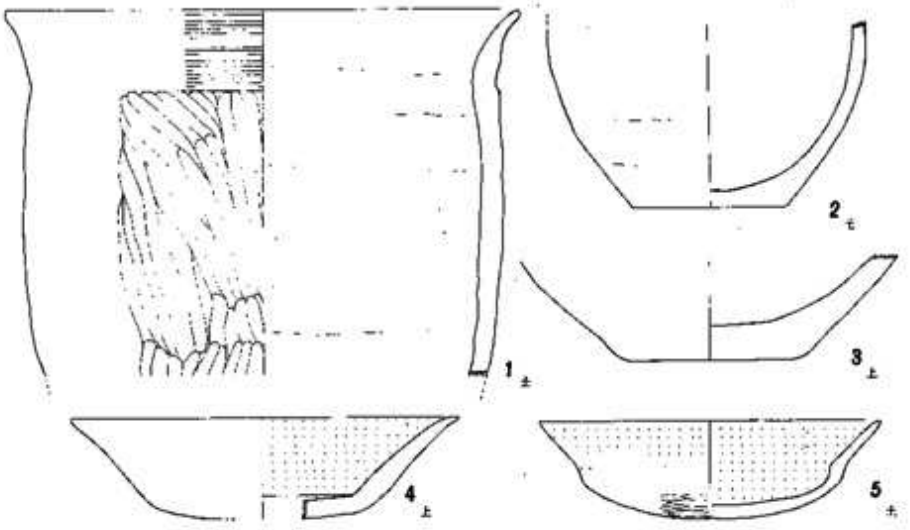
時代ははっきりしないが6世紀後半と思われる。（気賀沢　進）



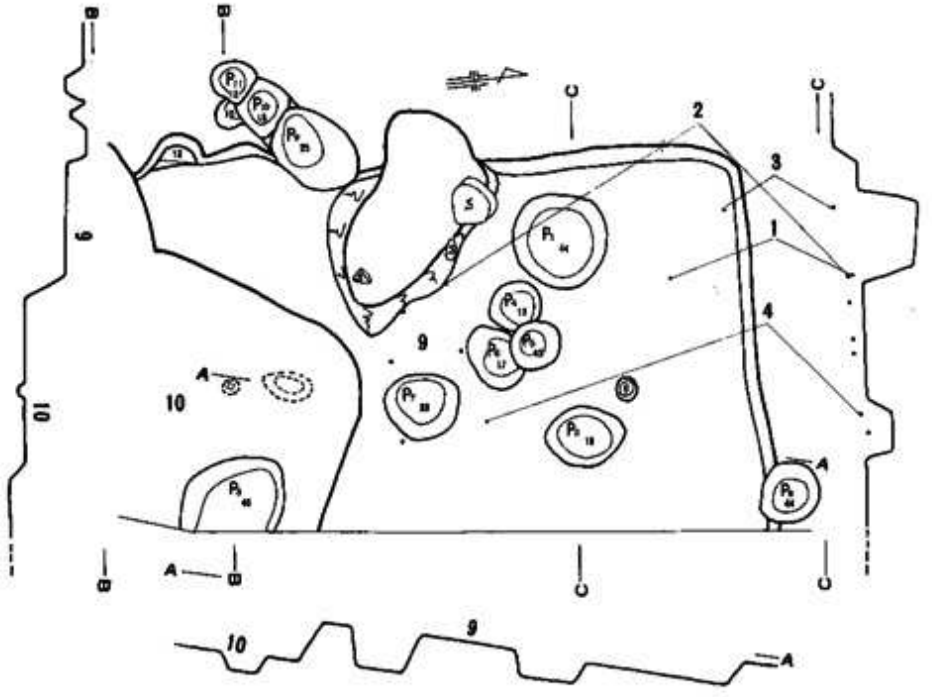
第32図　第8号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



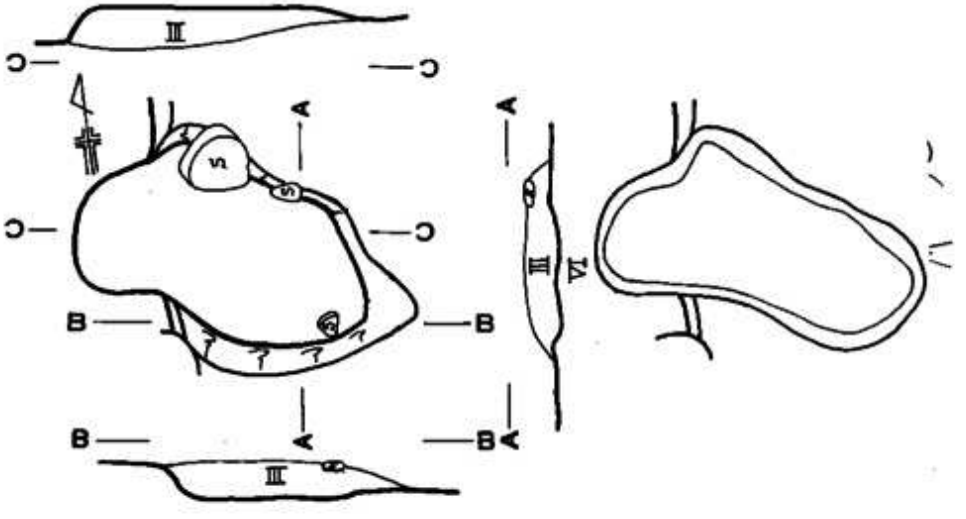
第33図　第８号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



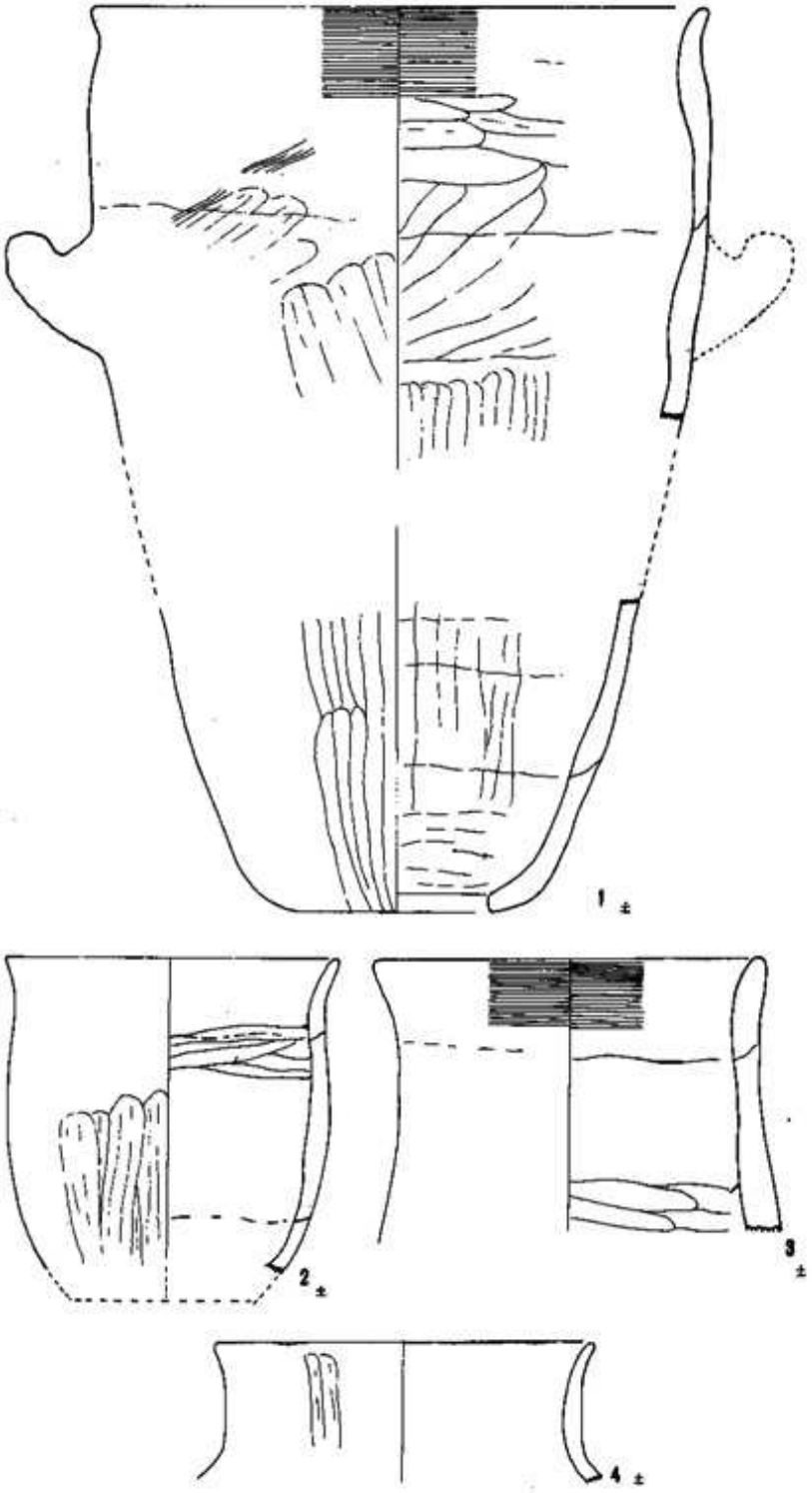
第34図　第８号住居址出土土器（S＝$\frac{1}{40}$）



第35図　第９号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第36図　第９号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第37図　第9号住居址出土土器（$\frac{1}{4}$）

9　第9号住居址（第35～37図）

遺構（第35・36図）

当住居址は第8号住居址の東にあり，南側は第10号住居址によって切られている。さらに東側は道路のため破壊されている。

プランは隅丸の方形か長方形と思われるが定かでない。大きさは南北5.0m位，東西は不明である。

壁の立ち上がりはややゆるやかで，壁高は北側で20cm，南側に行くに従い低くく10cmほどである。床面は全体に平担であるが，所々に礫が露出している。

主柱穴はP_1かP_5と思われるが定かでない。本数は多分4本と考えられる。$P_7-P_2-P_8$は直線的にほぼ1間間隔で並んでおり柱穴址と考えられる。

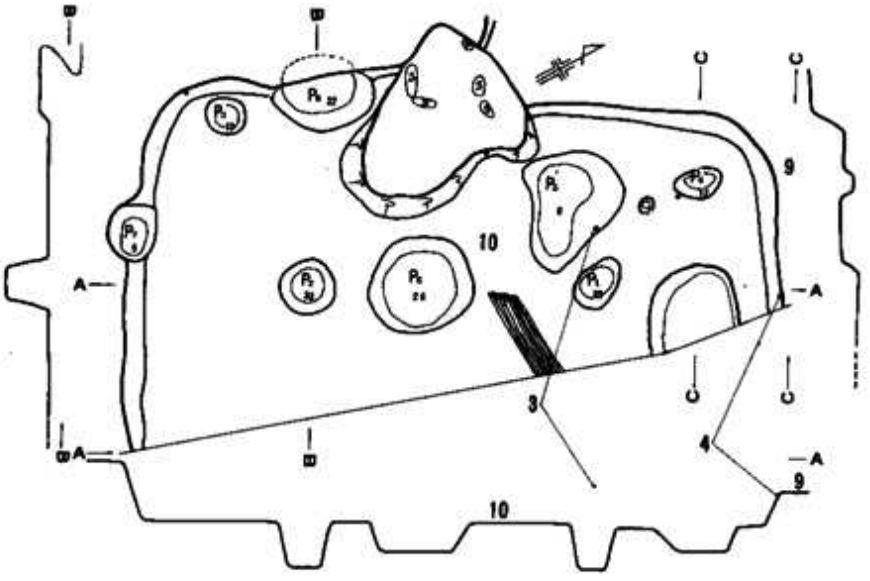
カマドは西壁中央にあり，わきに石を4個置くのみで，ローム粒・焼土・黒色土の混合土が堆積しているだけである。基底部はわずかにくぼみだけである。もともとこのように簡単なものであったと考えられる。

遺構（第37図）

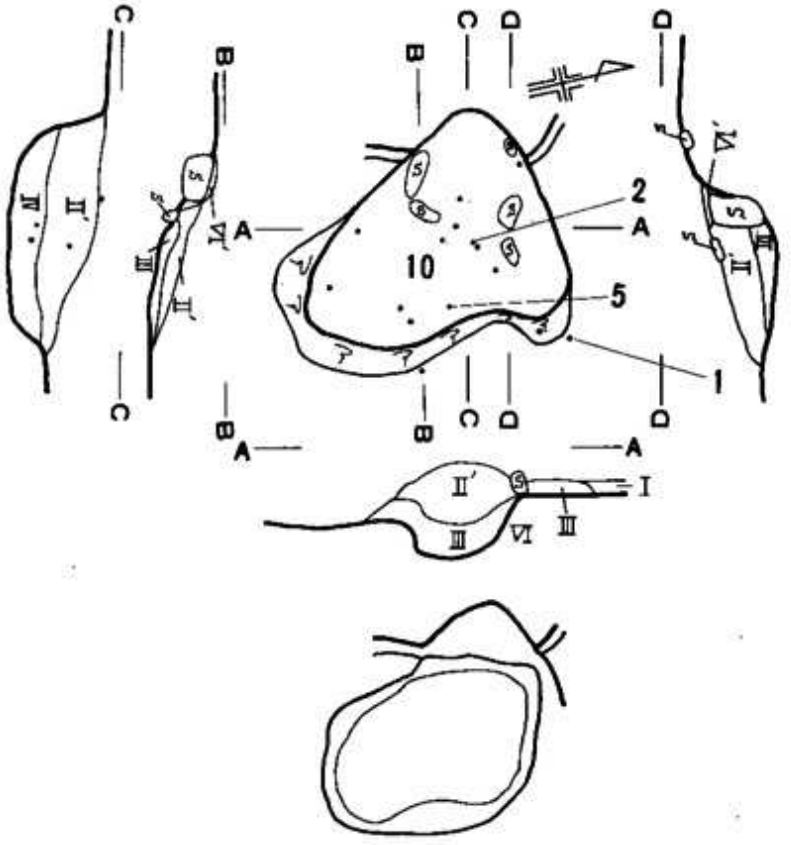
出土土器は残存部からすれば多いほうである。須恵器では高台坏・坏・坏蓋の破片があるが少なくやはり主体は土師器が占めている。土師器ではわずかに坏があるほかは甕である。

1は単孔の甑で胴央部はなく図上復元によるものである。2～4はすべて土師器の甕で2は小形のものである。

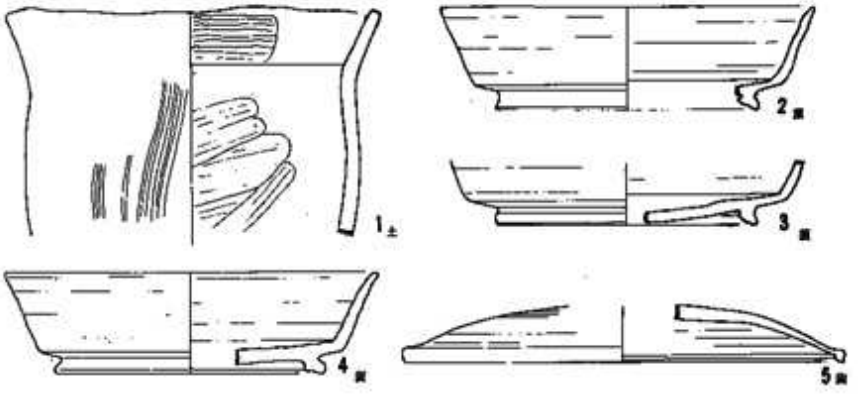
時代は奈良時代前半に位置づけられるであろう。　　（小原　晃一）



第38図　第10号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



第39図　第10号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{20}$）



第40図　第10号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

10　第10号住居址（第38～40図）

遺物（第38・39図）

当住居址は第９号住居址を北側にて切っており，南東部は第15号住居址と接している。東側

は第９号住居址同様遺跡で破壊されており全容はわからない。

プランは隅丸の方形もしくは長方形と想定されるが定かではない。南北5.1mを測る。壁の立ち上がりはややゆるやかで壁高は南側は深く45cm，西側は浅く25cm前後となる。

床面はほぼ平担で固く叩きしめられている。主柱穴はP_1・P_2と考えられ４本であろう。

カマドは西壁中央にあり袖石は第９号住居址同様少ない。壁を三角形状に抉り込んで煙道部としている。基底部は楕円形に掘られている。

遺物（第40図）

出土土器は少ないが，三分の二ほどが破壊されているため定かではない。土師器が多いが図示できたものに須恵器が多いことからすると須恵器がやや卓越しているかも知れない。

１は土師器の甕で土師器のうち図示できたものはこれだけである。２～４は須恵器の高台付坏，５は須恵器の坏蓋である。完形品はない。

時代は奈良時代後半に位置づけられるであろう。　（小原　晃一）

11　第11号住居址（第41～43図）

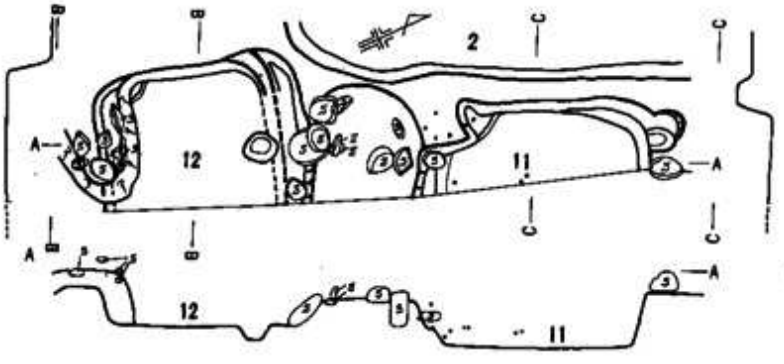
遺跡（第41・42図）

当住居址は第２号住居址の東にあり，南側は第12号住居址に切られ，東側は道路によって破壊されており西側が部分的に確認されたものである。南西コーナーは第12号住居址のカマド西にあるため南北の大きさは測ることができ，4.3mである。

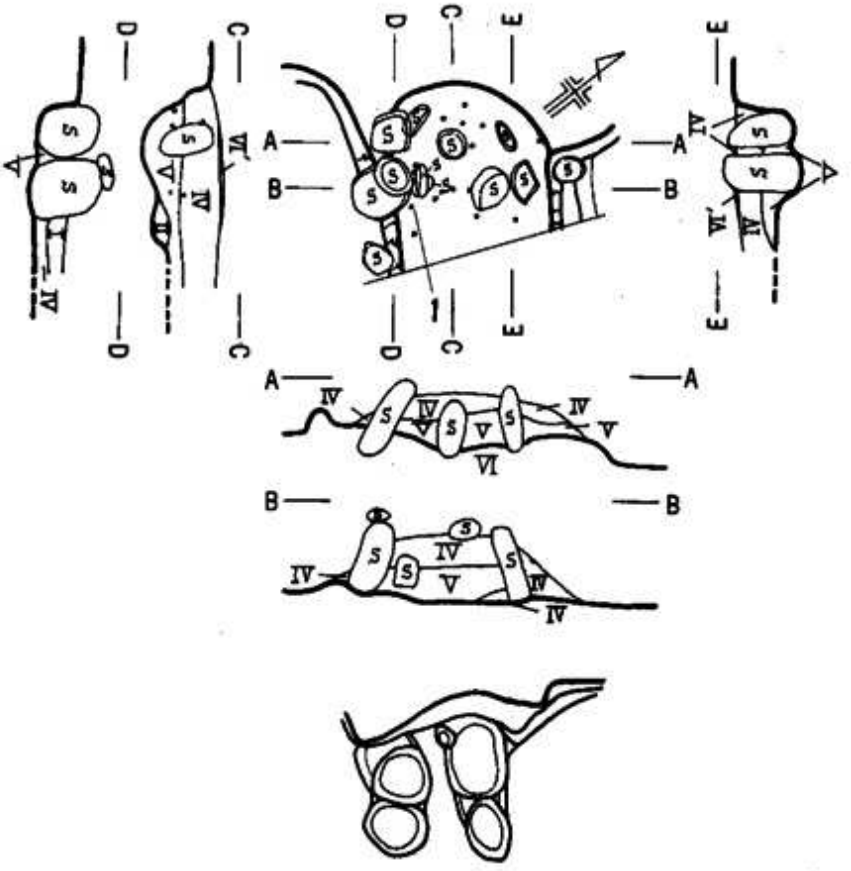
壁の立ち上がりは北側は直に近く，西側はややゆるやかである。部分的であるが床面は固く良好である。

柱穴は不明である。

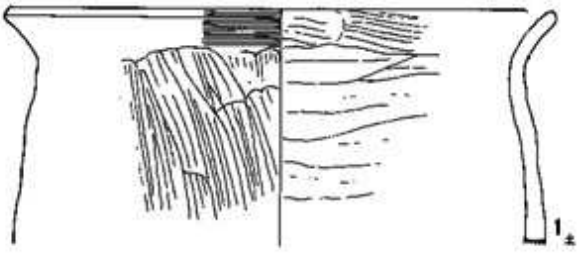
カマドは西壁中央にあり袖部の端は第12号住居址によって切られている。壁を大きく抉り込んで構築され小形ながら石心造りでしっかりしている。奥中央に支石がある。



第41図　第11号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第42図　第11号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{20}$）

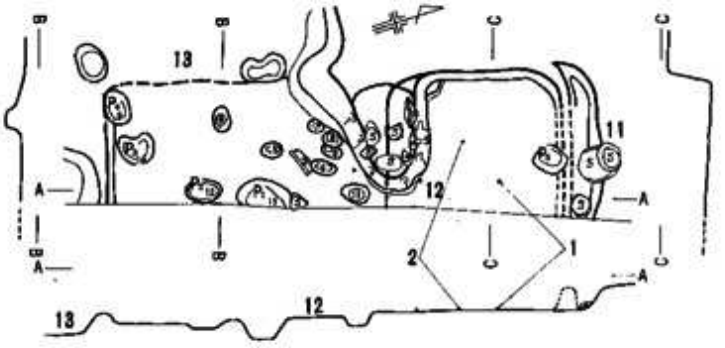


第43図　第11号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

遺物（第43図）

調査面積のわりには遺物は多いが，図示でき得たものはカマド内出土の甕（第43図）のみである。土師器では甕が多く，須恵器では坏・坏蓋・甕の破片のみで土師器が主体である

時代ははっきりしないが奈良時代と思われる。　（気賀沢　進）



第44図　第12号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$

12　第12号住居址（第44～46図）

遺構（第44・45図）

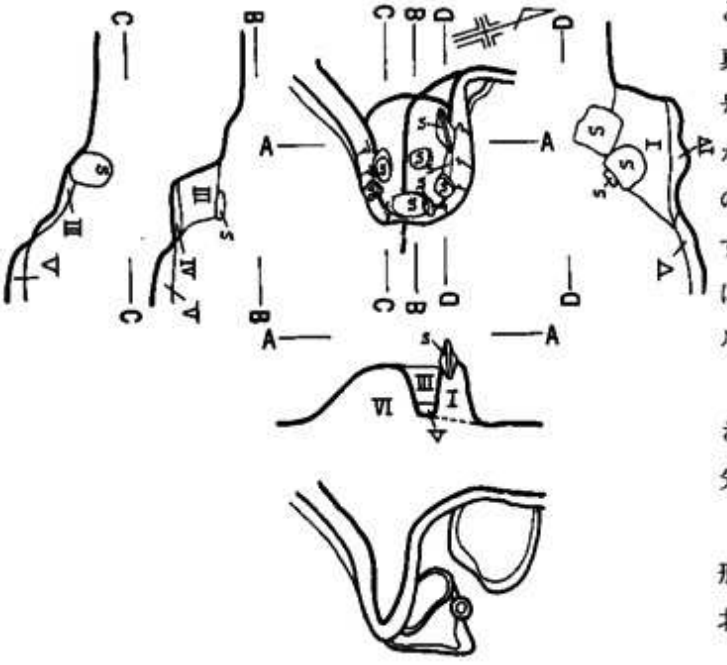
本住居址は第11号住居址の南部分を切って，南側は第13号住居址と重複する。本住居址のカマドの真ん中に段差があることから第11号住居址を切っていることは明らかである。しかし第13号住居址との重複関係は南壁らしきものがわずかに認められるが切っているとは断定できない。西側は同一レベルで続いている。

東側はやはり道路によって破壊されており調査できたのは西側部分のわずかであった。

プランは隅丸の方形ないし長方形と考えられるが定かでない。南北は3.5mを測るものと思われる。

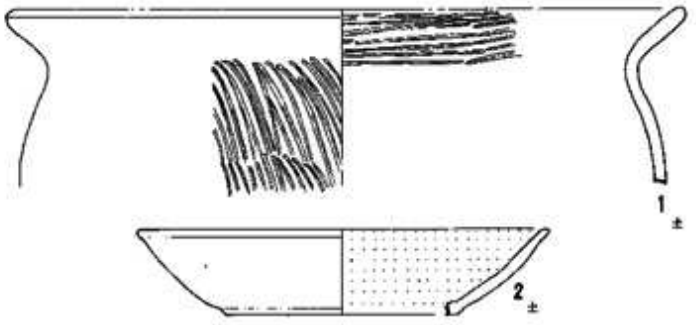
西壁の立ち上がりはややゆるやかで壁高は35cmである。

床面は部分的であるが，固く叩きしめられており良好である。



第45図　第12号住居址カマド実測図

主柱穴と思われるものは確認されていない。推測する規模から主柱穴を４本とすれば当然確認されると思われ４本の可能性はうすくなる。かなり内側に入るとすると別であるが２本であ



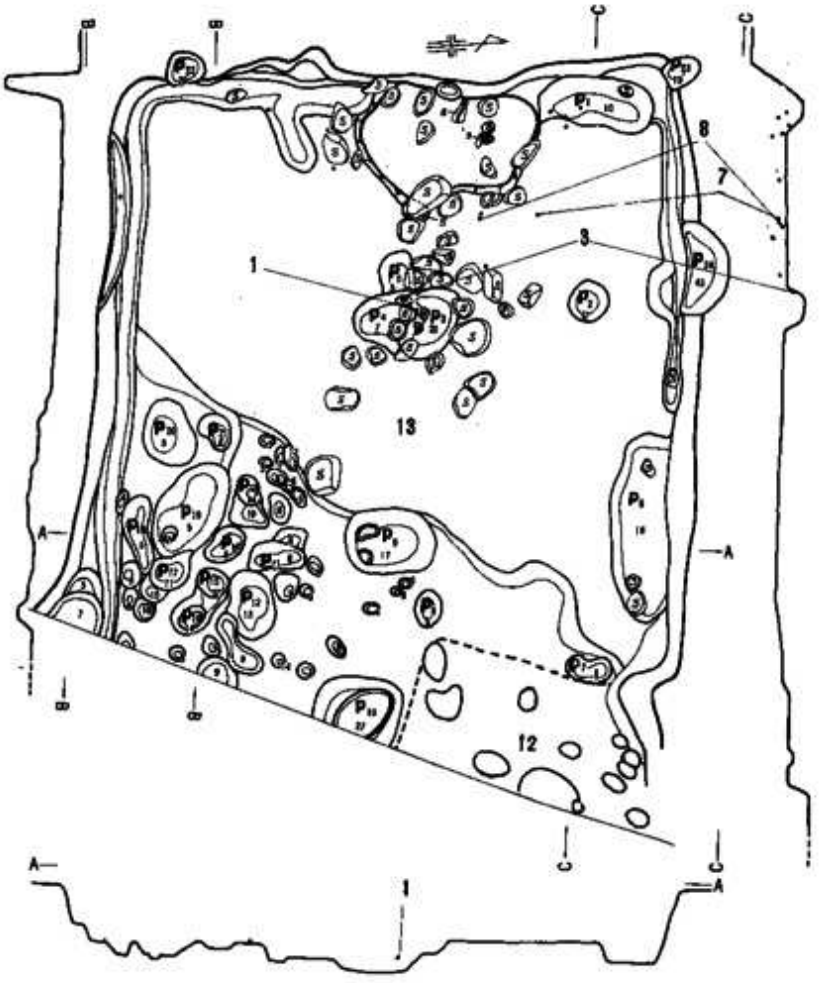
第46図　第12号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

ろうか。

カマドは西壁にあり，やや北寄りに位置すると思われる。石心造りであるが袖石は上面に置かれたものである。

遺物（第46図）

出土土器は少ないが調査面積からすれば当然であろうか。土師器が多く須恵器は甕の破片のみである。



第47図　第13号住居址実測図（S $\frac{1}{80}$）

図示できたものは土師器の甕（1）と内黒の坏（2）である。

時代は奈良時代であろうか。　　（気賀沢　進）

13　第13号住居址（第47～50図）

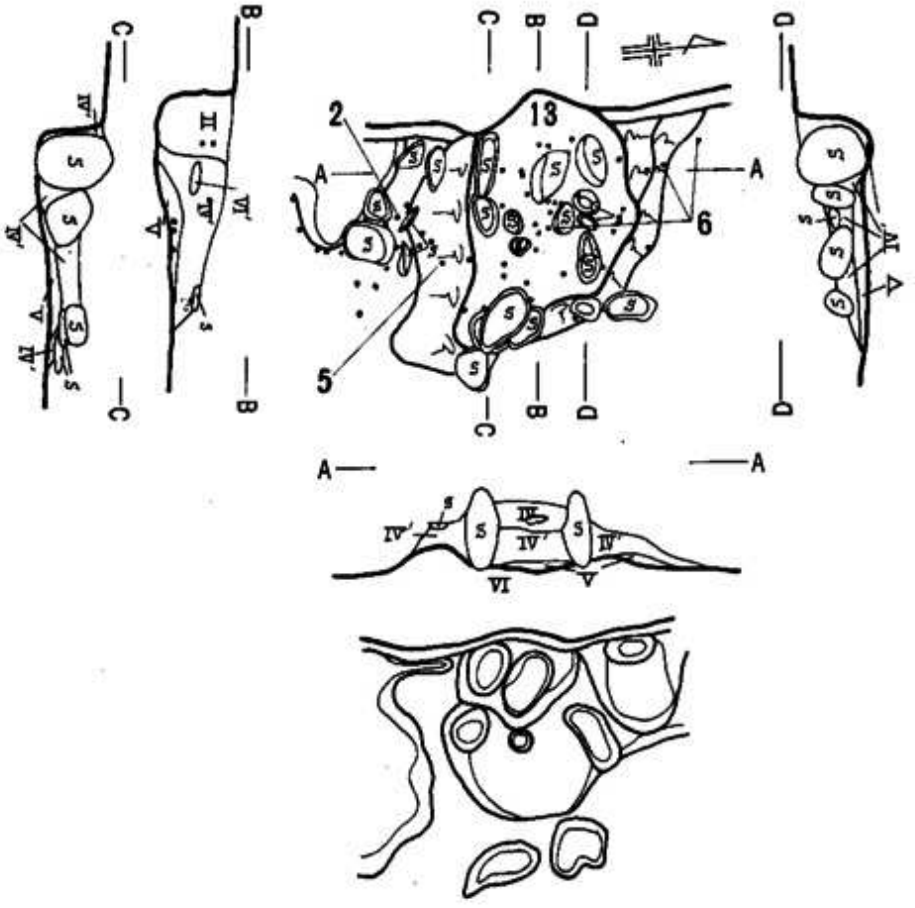
遺構（第47・48図）

本住居址は北東部にて第12号住居址と重複するが複合関係は不明である。P_6の東にて壁が内にくい込んでおり東壁と考えるとプランは隅丸方形を呈し，大きさは4.5×4.6mである。

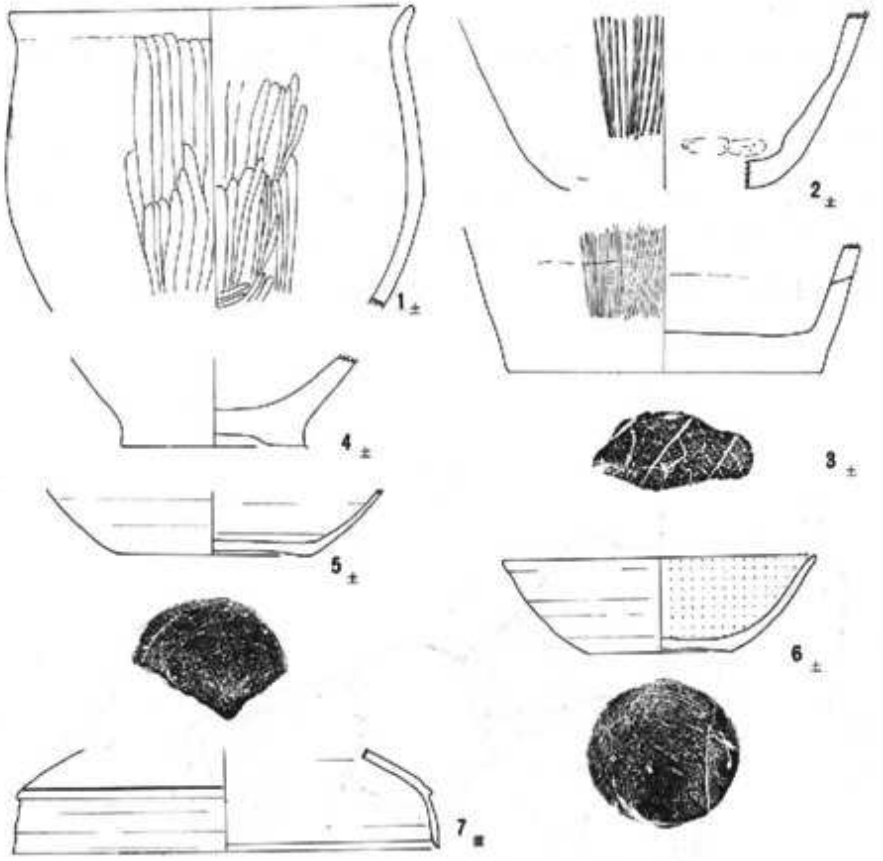
壁の立ち上がりは，ややゆるやかで壁高は南西部が低くなっている。

$P_2-P_9-P_{21}$を結んでわずかに床面が低くなっているが，別の住居址とは考えられない。西側部分の床面は平担で固く叩きしめられており良好である。東側部分に不規則な小ピットが数多くみられるが機能は不明である。

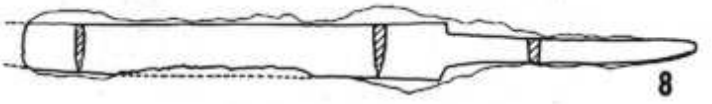
主柱と考えられるものはない。あえてあげればP_{17}であるが対となるものがなく不明である。



第48図　第13号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{20}$）



第49図　第13号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第50図　第13号住居址出土鉄製品（$\frac{1}{2}$）

カマドは西壁中央やや北寄りにあり，わずかに壁を抉っている。石心造りで基底部はわずかにくぼめているだけである。

カマドの手前に自然石がケルン状につまれていたが如何なるものかは不明である。

遺物（第49・50図）

出土土器は多いほうではない。須恵器は図示した坏蓋の外には，甕・坏の破片があるだけで土師器が主体を占めている。鉄製品として刃子（8）がある。

時代は平安時代中期と思われる。7は古い要素を持つもので混入であろう。（小原　晃一）

14　第14号住居址（第51～54図）

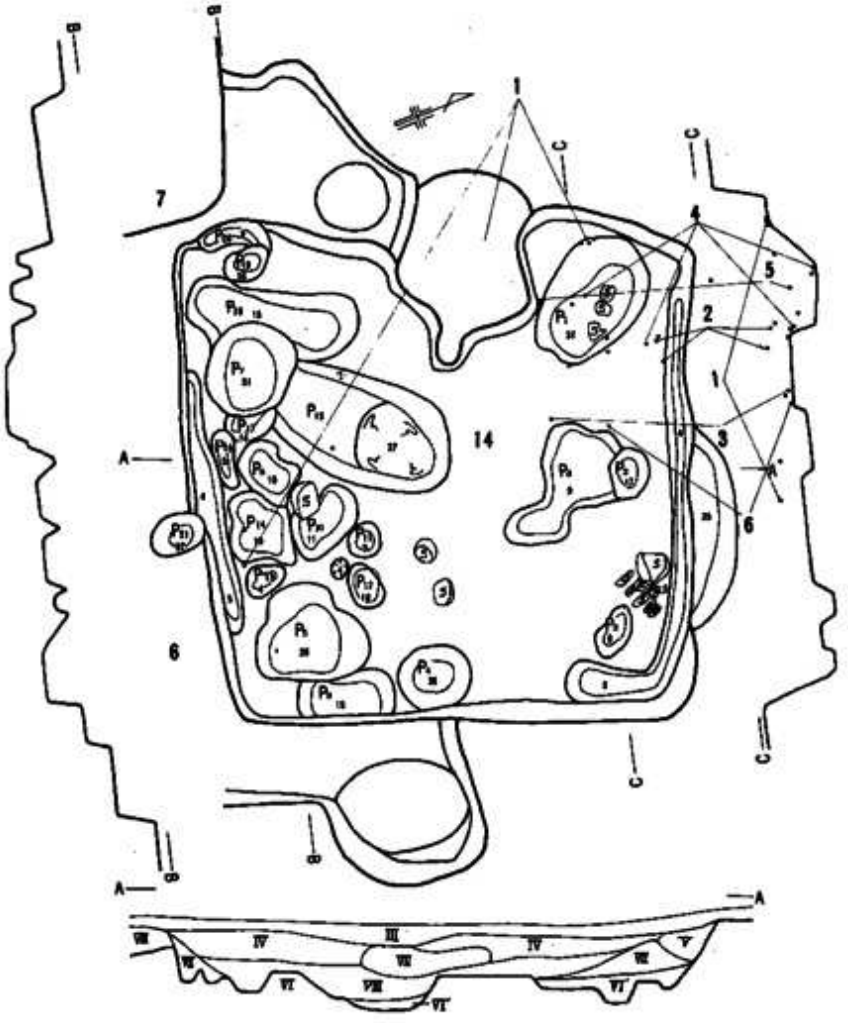
遺構（第51・52図）

本住居址は第6号住居址を切って北側にある。北西部には第7号住居址がやはり第6号住居址を切ってある。

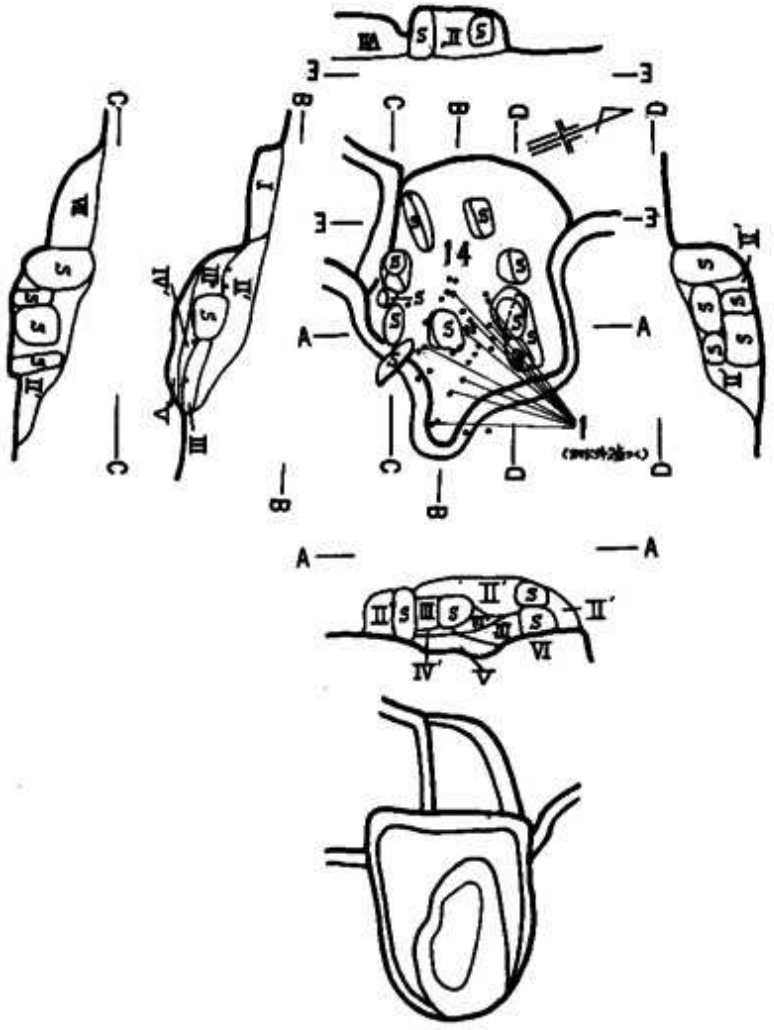
プランは隅丸方形でやや西壁が広くなっている。大きさは3.7×3.7(4.0) mを測ることができる。壁の立ち上がりは全体にゆるやかである。床面は固く叩きしめられており良好である。

主柱穴はP1, P5, P7と考えられ現存するものは3本である。

カマドは西壁中央にあり壁をわずかに抉って造り石心造りである。



第51図　第14号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）



第52図　第14号住居址カマド実測図

遺物（第53・54図）

出土土器は少ないほうである。須恵器は１の甕，４の高台付坏と坏蓋・甕の破片で主体は土師器が占めている。

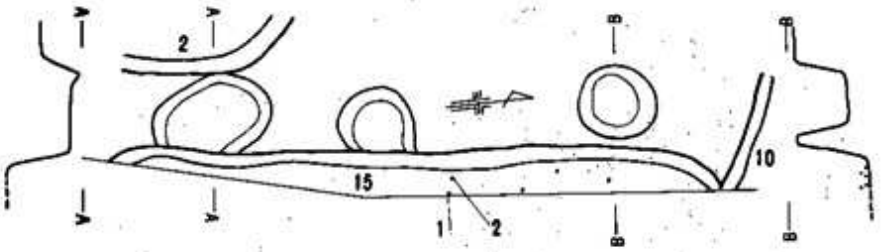
５は土師器の坏で焼成後底部を穿孔している。

鉄製品としては６があり鉄鏃と思われる。

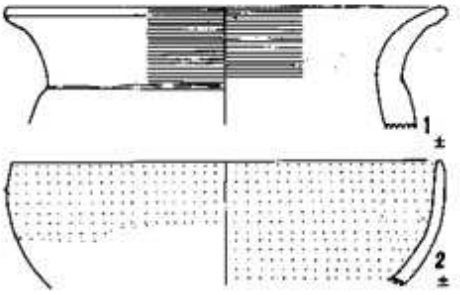
時代は奈良時代後半と思われる。　（小原　晃一）

第53図　第14号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

第54図
第14号
住居址
出　土
鉄製品
（$\frac{1}{2}$）



第55図　第15号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第56図　第15号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

15　第15号住居址（第55・56図）

遺構（第55図）

本住居址は第２号住居址の北東にあり，北側は第10号住居址と重複すると思われるが，住居址のほとんどが道路によって破壊されているため，はっきりしない。プランは定かでないが，南北の大きさは4.8ｍほどを測るであろう。

カマドは西壁にはない。

遺物（第56図）

出土土器は図示したものの外には土師器の甕があるのみである。調査面積が非常に狭いため性格は不明である。

少ない資料からであるが時期は６世紀前半と思われる。　（気賀沢　進）

16　第16号住居址（第57～60図）

遺物（第57・58図）

本住居址は北東部を第７号住居址に切られている。西側には一段高いテラスがあり住居址を壊っているものと思われる。（ただし住居址番号付けてない）

プランは，ややくずれるが隅丸方形をなし，大きさは3.4×3.4ｍを測る。床面は固く叩きしめられており良好である。壁の立ち上がりはゆるやかである。西側テラスとの床面差は15cm前後である。

主柱穴らしきものはみあたらない。

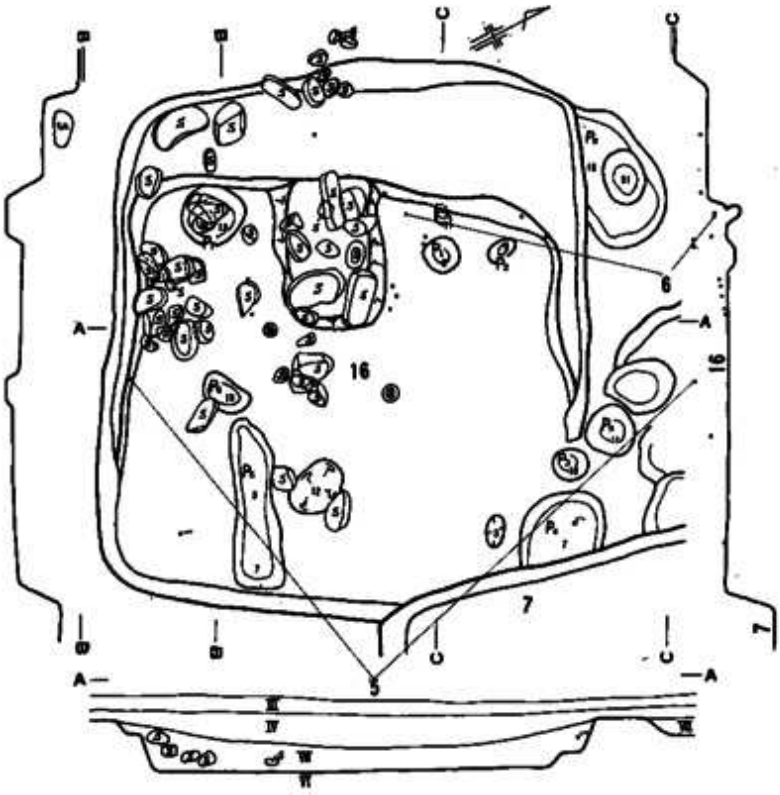
カマドは西壁やや南寄りにあり，石心造りである。

遺物（第59・60図）

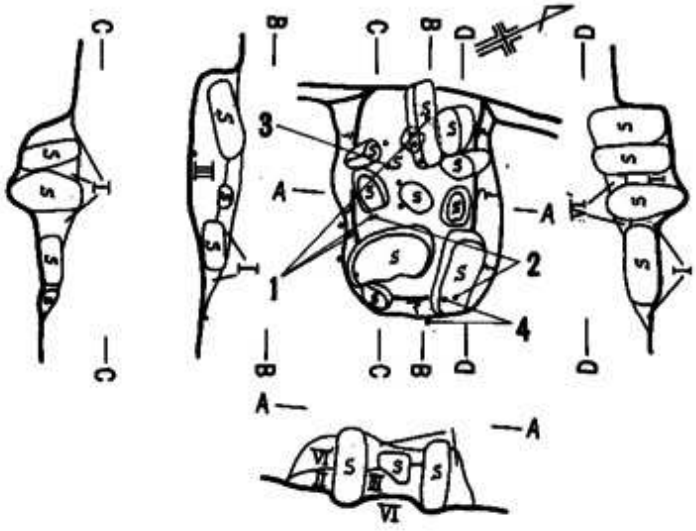
出土土器は少ない。須恵器の甕があるが，やはり土師器が主体を占めている。

１～４は土師器の甕で１～３は鳥帽子形と思われる。５は土師器の高坏の脚部である。

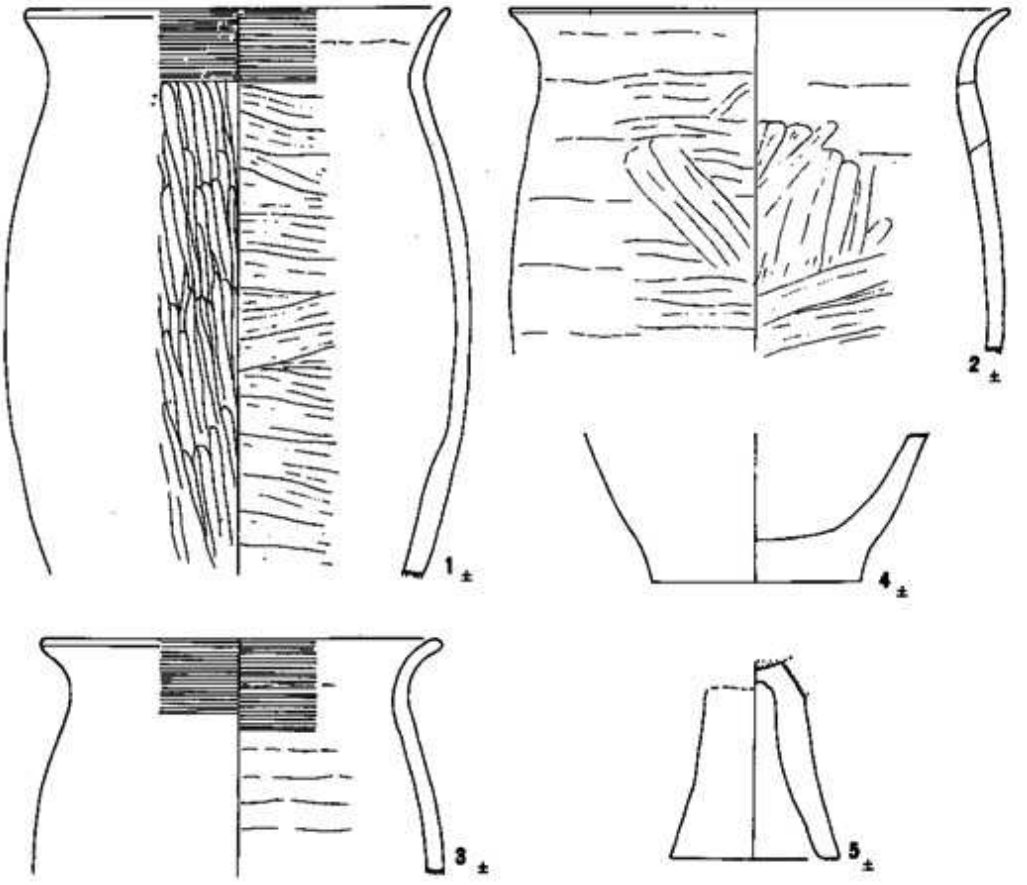
鉄製品として刃子（６）がある。



第57図　第16号住居址実測図（S－$\frac{1}{80}$）



第58図　第16号住居址カマド実測図（S－$\frac{1}{40}$）



第59図　第16号住居址出土土器（$\frac{1}{4}$）

第60図　第16号住居址出土鉄製品（$\frac{1}{4}$）

時期は７世紀前半から中葉と思われる。　（小原　晃一）

17　第17号住居址（第61図）

遺構（第61図）

本住居址は第16号住居址の南西にあり，南西コーナーを除いて西側は第18号住居址に切られている。

プランは隅丸方長形と思われ，大きさは4.6×5.0mを測るであろう。壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は低い。床面はやや凹凸あるも良く叩きしめられており良好である。

主柱穴はP_1・P_2と思われ４本と考えられる。

カマドは西壁にあったものが第18号住居址によって壊されたものであろう。

遺物

出土土器は非常に少ない。図示できたものはなく，内黒坏，ハケ調整の甕の土師器破片と須恵器の甕の破片のみである。

出土土器からでははっきりしないが，重複関係からして６世紀前半の時期に位置づけられるであろう。　　（小原　晃一）

第61図　第17・18号住居址出土土器（S＝$\frac{1}{20}$）

18　第18号住居址（第61・62図）

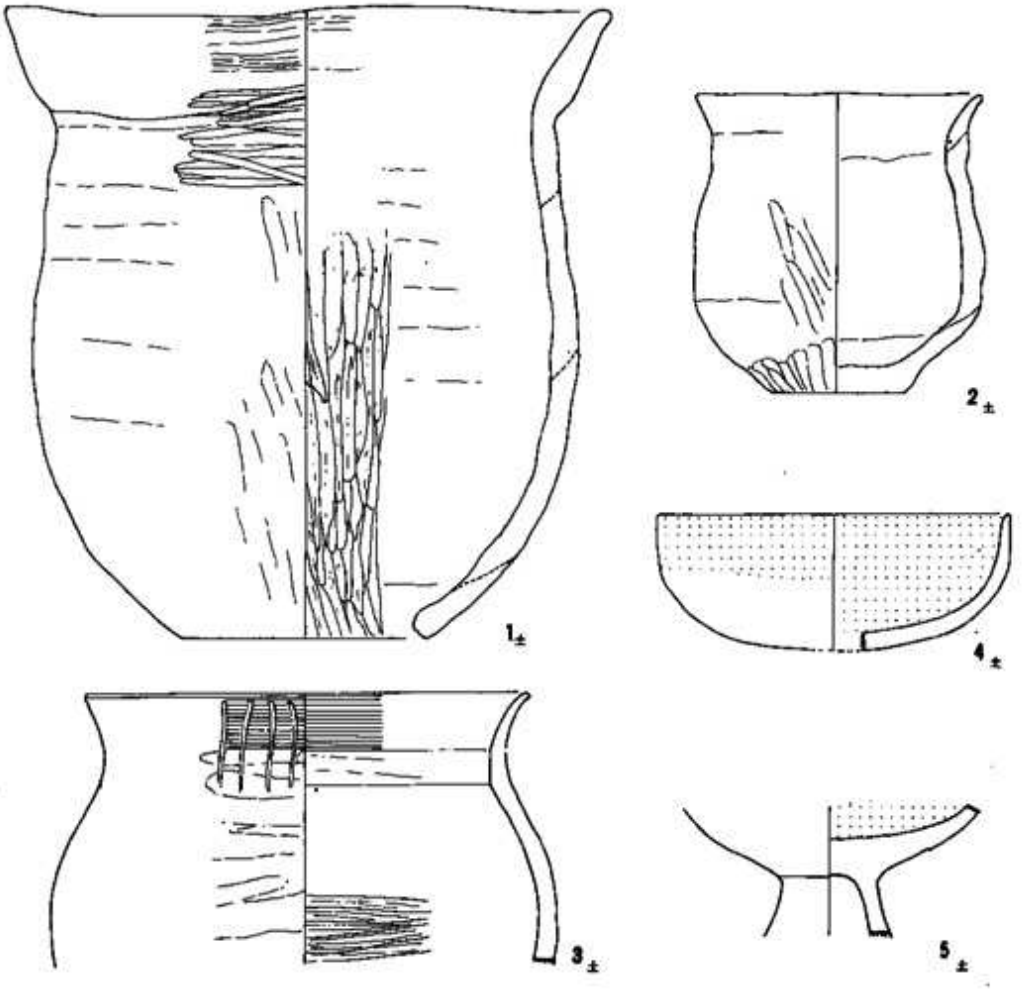
遺構（第61図）

本住居址は東側にて第17号住居址を切り，西側では第21号住居址と重複している。第21号住居址はカマドの向きからして２軒の住居址が想定されており，東側の第21号A住居址と重複するが，床面が低くなっていること第18号住居址が火災にあっているが第21号A住居址には焼土炭化物層がないことからして切られていることは確かであろう。

プランはほぼ隅丸方形で4.3×4.4mを測ることができる。壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は低い。

床面は固く叩きしめられ良好である。第17号住居址との床面差は10cm前後である。

覆土中には黒色土に混じって炭化物・焼土がみられ，床面上にはかなりしっかりした炭化材



第62図　第18号住居址出土土器（1/3）

が残っており，火災にあったことを物語っている。

主柱穴はP_1，P_2・P_6，P_4がそれと思われる。南東部はP_3ないしP_7と思われるがやや浅くはっきりしない。

カマドは西壁にあり第21号A住居址によって壊されたものと思われる。

遺物（第62図）

出土土器はあまり多くない。須恵器は甕の破片があるので主体は土師器である。

1は単孔の甑，2は小形甕，3は甕で胴下半部はない。4は内黒の坏，5は内黒の高坏である。すべて土師器である。

時期は6世紀前半に位置づけられるであろう。（小原　晃一）

19．第20号住居址（第63～65図）

遺構（第63，64図）

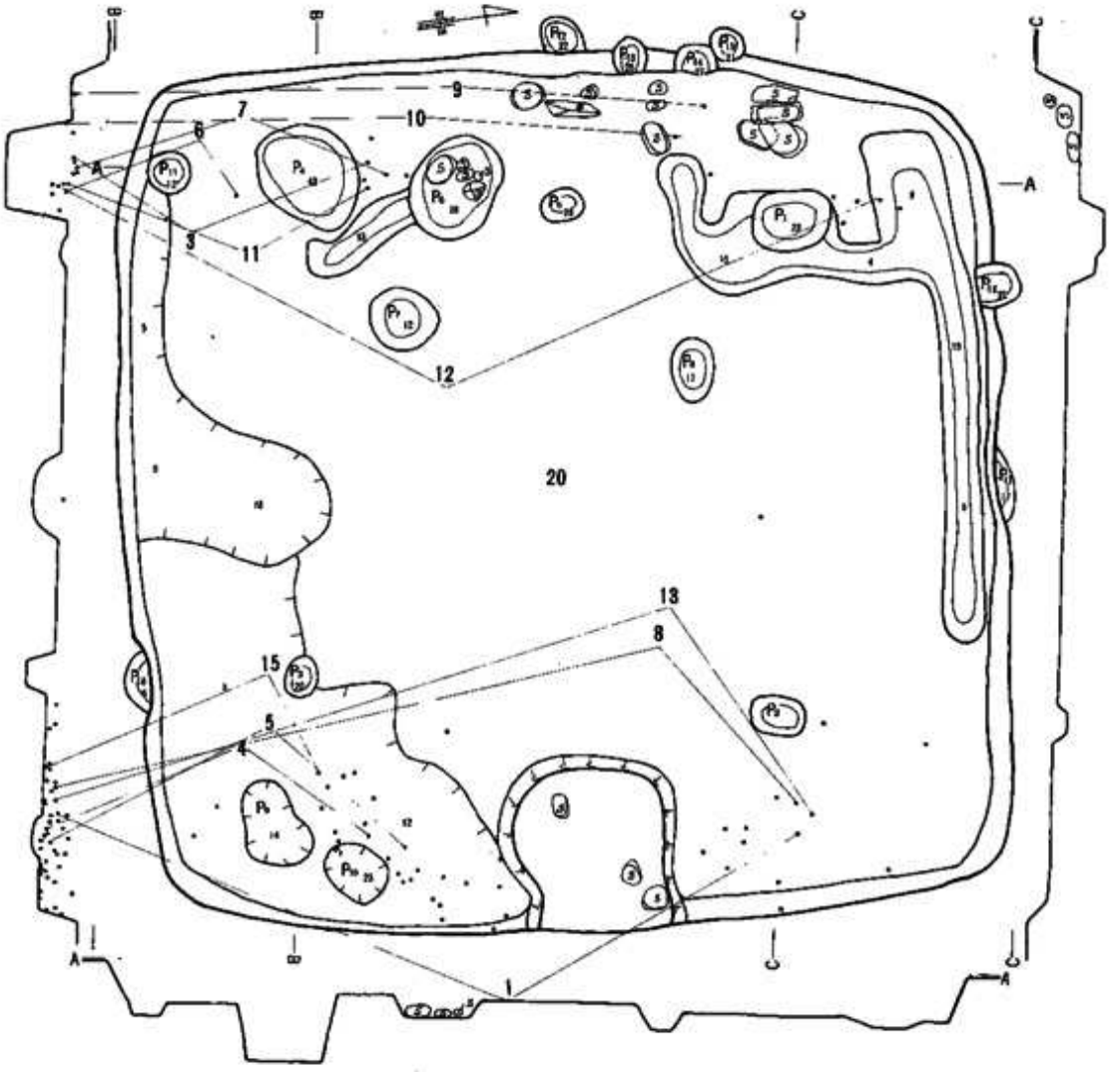
本住居址は第21号住居址の南にあり接している。南側は礫層で，床面上にも小礫が露出している。

プランは隅丸方形で6.8×6.8m を測る。壁の立ち上がりはややゆるやかである。カマドの南から南壁に沿って浅い大きな落ち込みがみられる。北壁には周溝があり内部まで続いている。

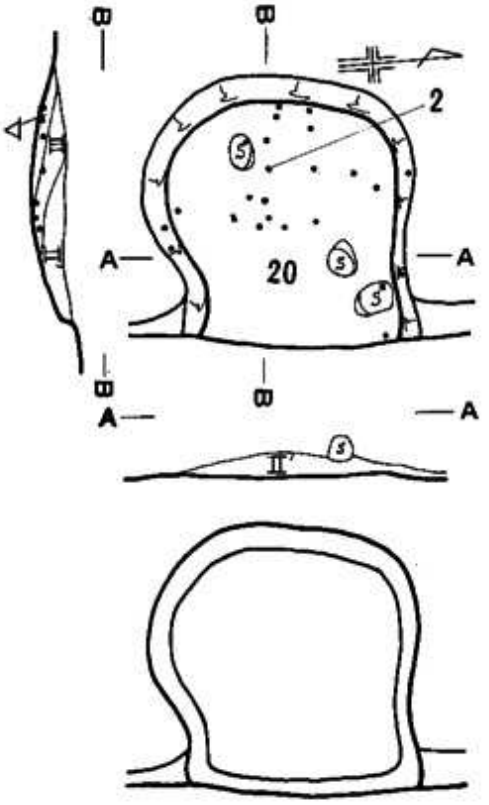
西側やや北に寄って自然石を並べた一種の石壇がある。機態は不明である。

主柱穴はP1，P2，P3，P4と考えられ，P5は支柱穴であろうか。P3の浅いのが若干問題である。

高坏が9個出土しており非常に珍しい。先に述べた石壇と何らかの関連を持つかも知れない。



第63図　第20号住居址出土土器（S＝$\frac{1}{60}$）



第64図　第20号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

また古墳との関連で祭祀場の可能性も考えられる。

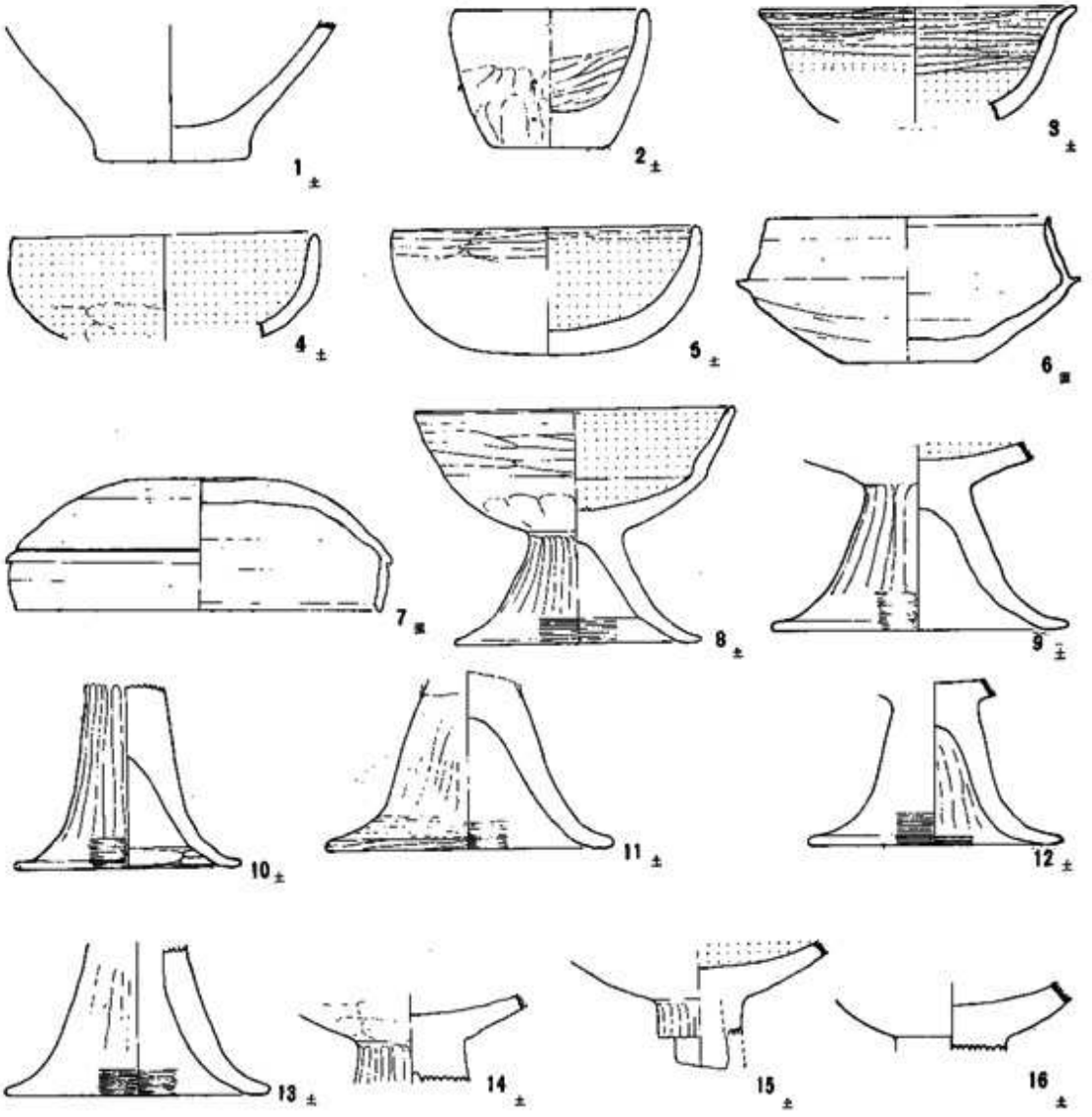
カマドは東壁ほぼ中央にあり，石は全くみられない。抜き去られたものかは不明である。

遺物（第64図）

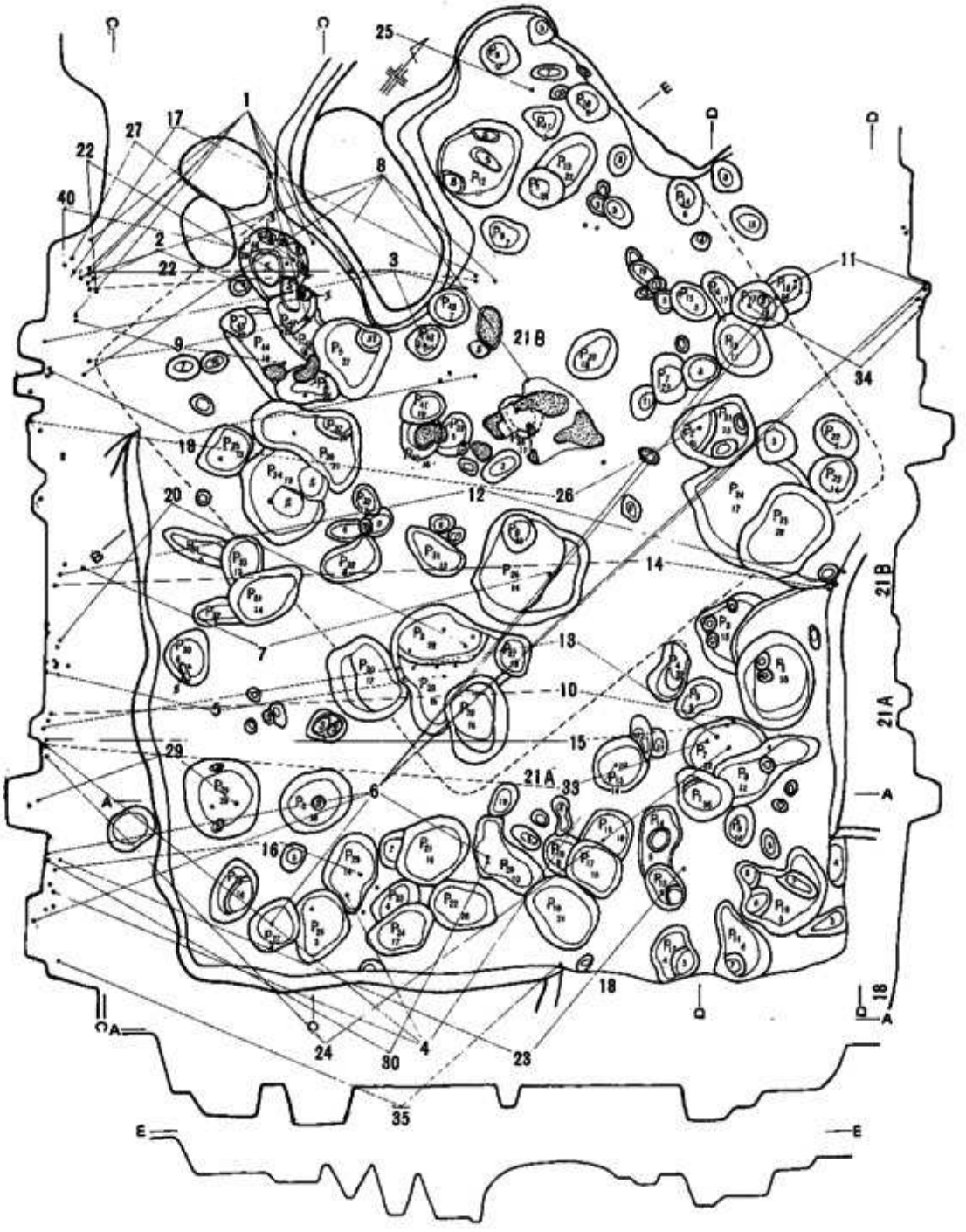
土器は多い。須恵器は6の蓋付坏と7の坏蓋と他に甕があるのみで土師器が主体を占めている。甕は少なく1と口縁部が2片あるのみである。

1は甕の底部である。2は特殊な器形を持つが坏であろう。3～5はともに丸底の坏である。6は須恵器の蓋付坏，7は坏蓋である。8～16は高坏でほぼ完形となるものは8のみである。3の坏は高坏の坏部の可能性もある。

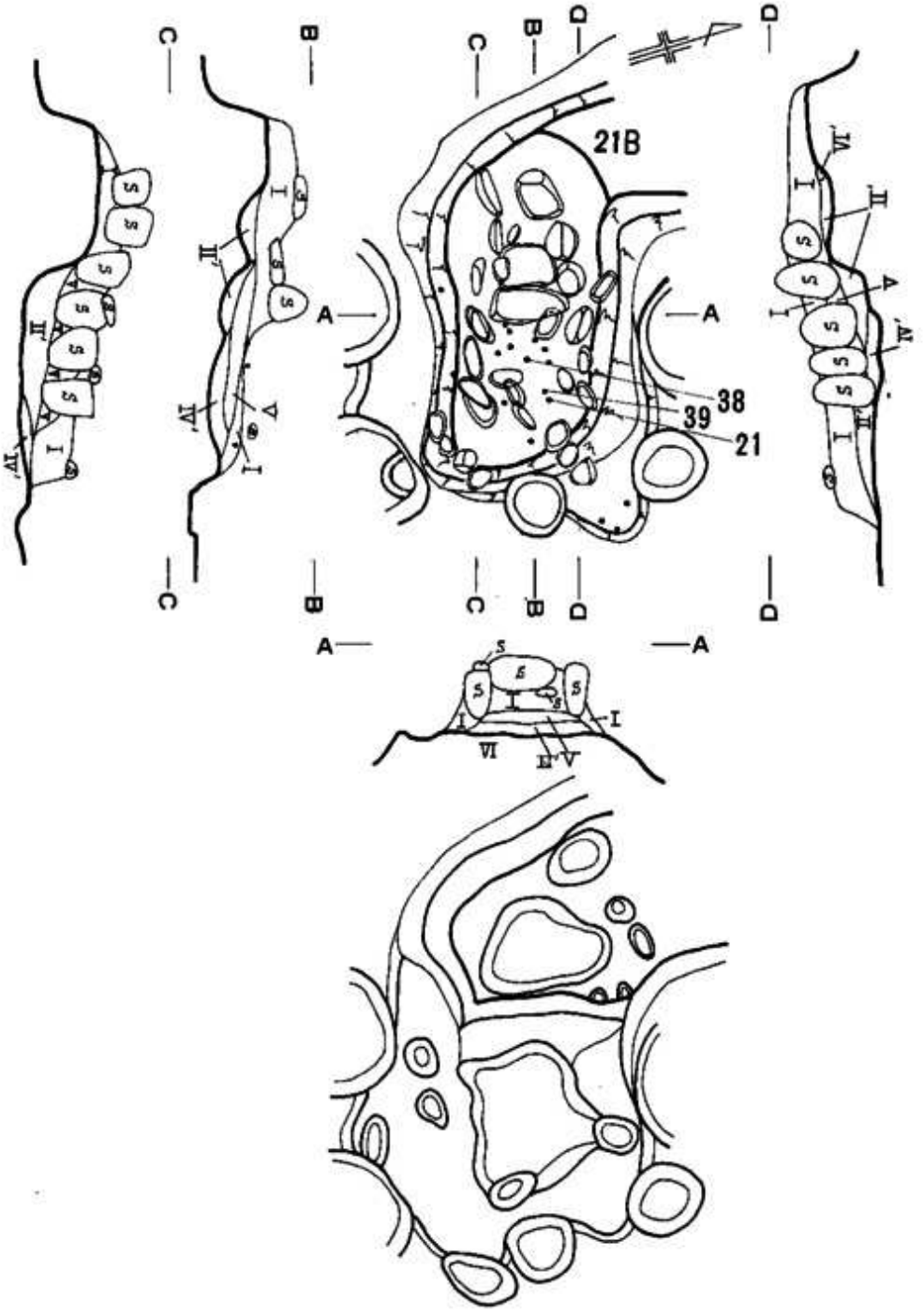
時代は6世紀前半に位置づけられるであろう。　（気賀沢　進）



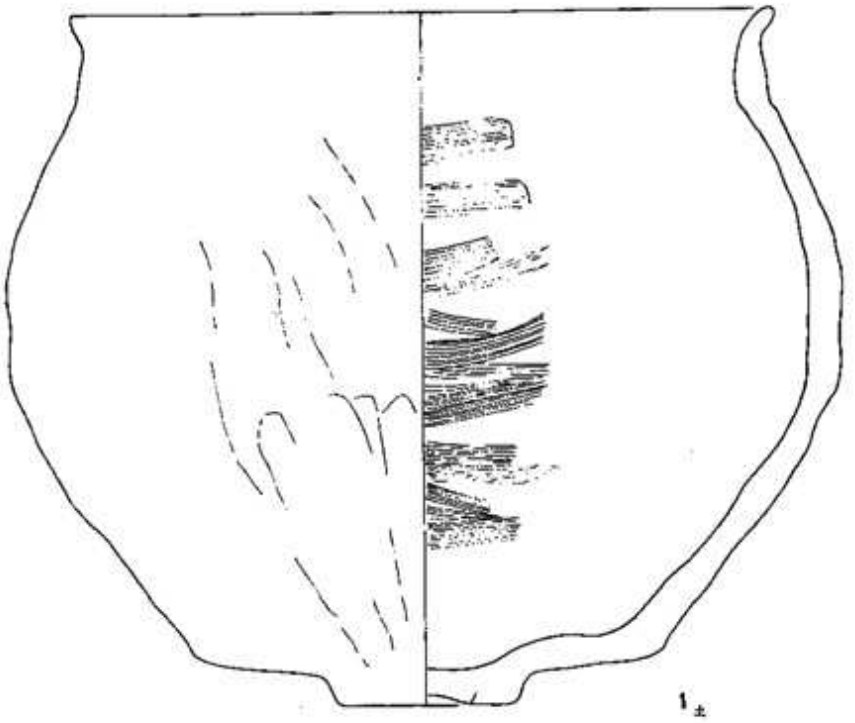
第65図　第20号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

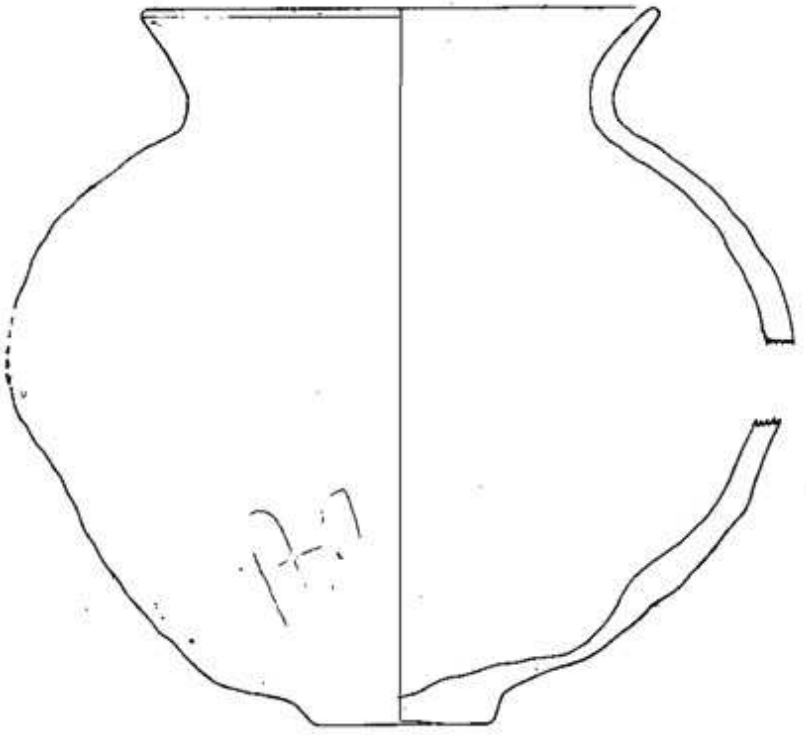


第66図　第21—A・B号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）

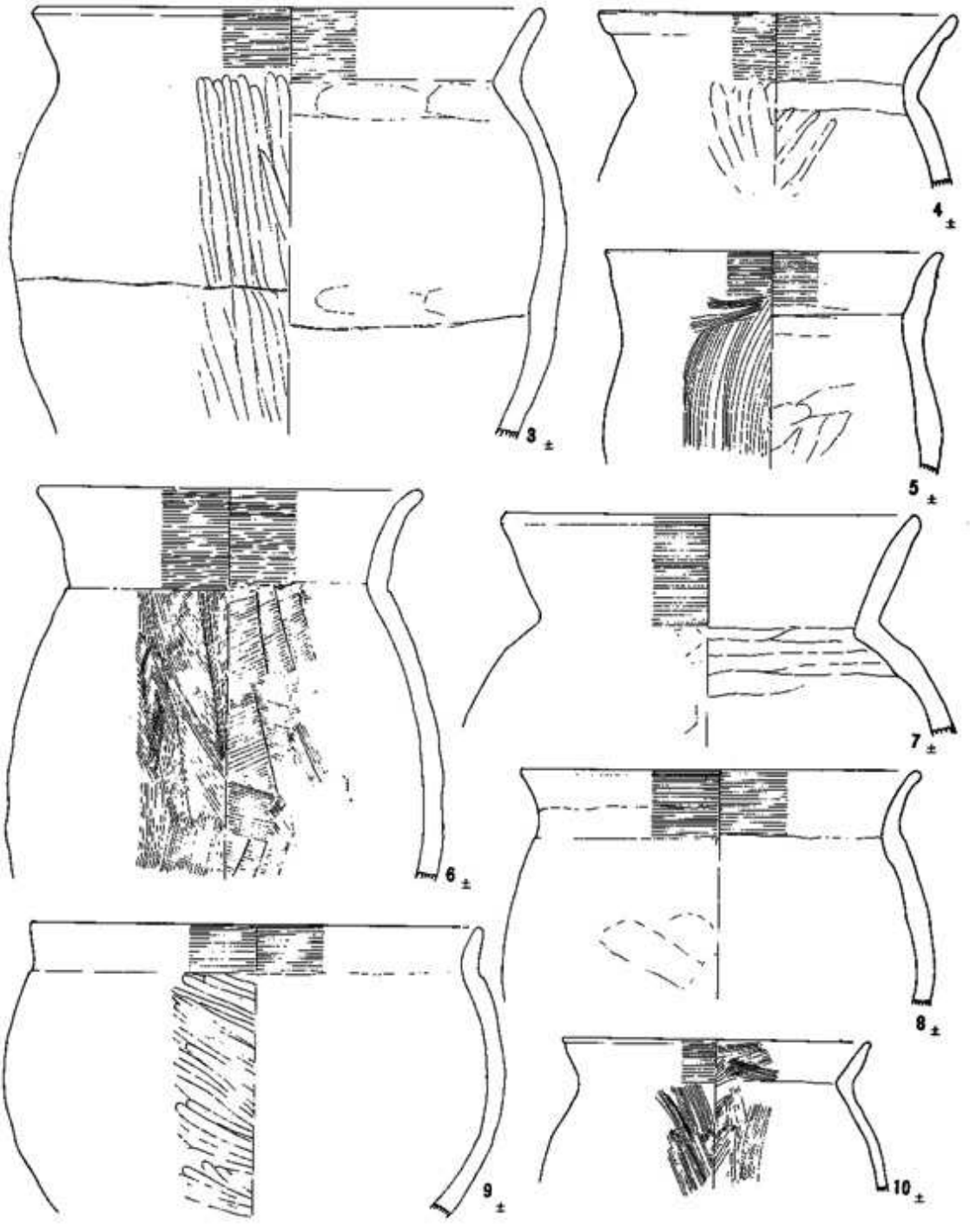


第67図　第21－A・B号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

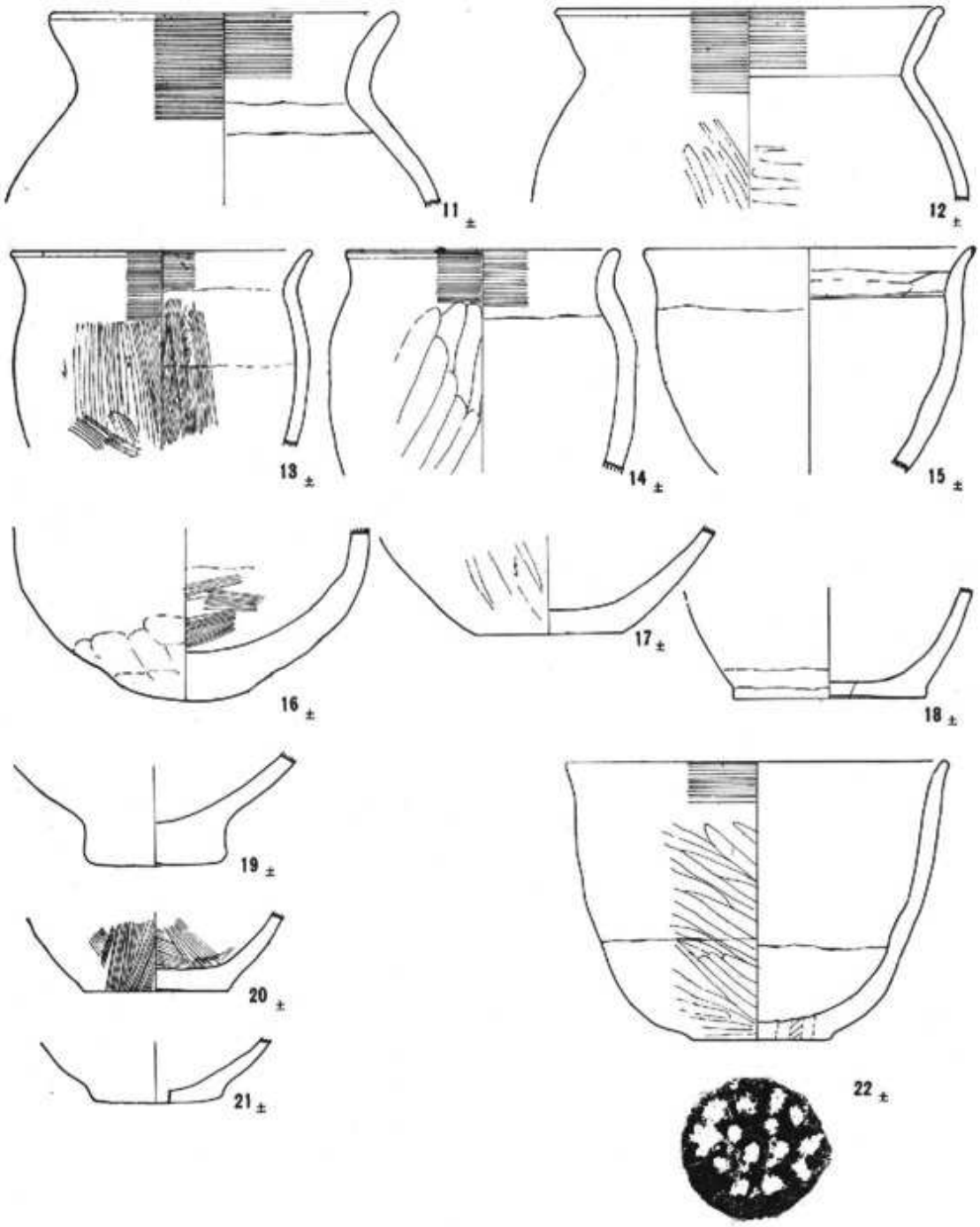




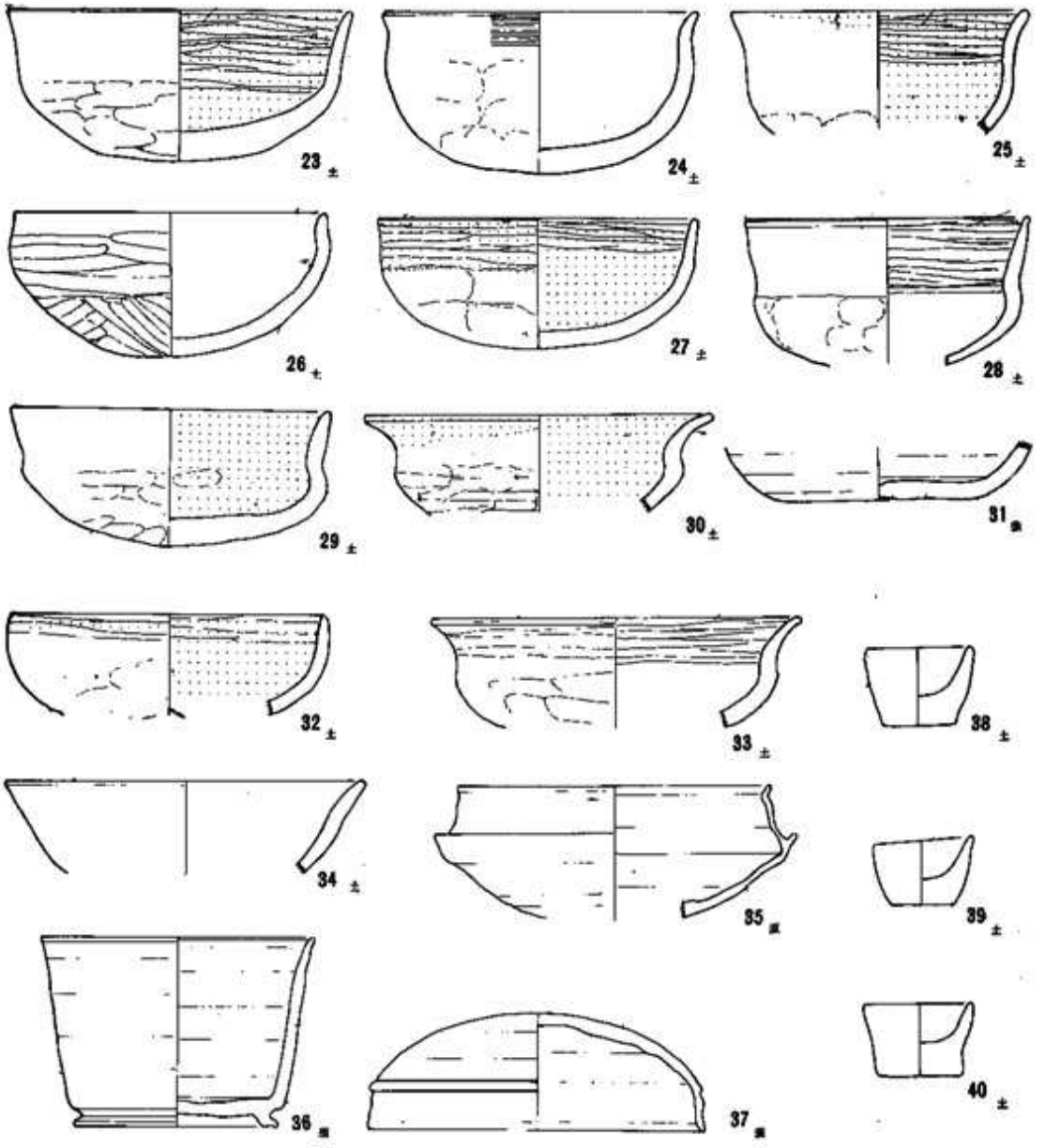
第68図　第21号ーA・B号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第69図　第21号－A・B号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第70図　第21－A・B号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第71図　第21号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

20　第21号住居址（第66～71図）

遺構（第66，67図）

本住居址は第18号住居址を北東部にて切っている。

発掘時においてはプランがやや不自然ながらかなり大きなものと考えていたわけであるが，図面上からカマドの位置を考慮してみると破線で図示した住居址(B)と第18号住居址と切り合う住居址(A)とがあると思われる。しかしながらプラン上からのことで床面に違いがみられるわけではない。

南西部は第22号住居址と重複すると思われるが，新旧関係はまったくわからない。

A・B住居址とも非常にピットが多く，主柱穴は定かでない。

壁はゆるやかで南側で50cm，北側で40cmと壁高は高い。

床面は固く叩きしめられている。B住居址カマドの手前を中心に焼土が堆積している。炭化材はみられないので，火災にあったものではないと思われる。

カマドは西壁にあり袖部南側は第22号住居址となっている。大きなプランからするとカマドが壁に対して斜めとなるところからB号住居址が設定されたわけである。煙道部まできちんと残した石心造りである。

遺物（第68～71図）

出土土器は非常に多い。須恵器は31，35，36，37のほかには坏の破片が若干あるのみで土師器が主体を占めている。実測図にみるとおり甕が多い。図示できなかったものにも甕が多い。

1・3～12はすべて土師器の甕である。整形上斉一性を持っており口縁内外に横なでを施すものが多い。胴部調整はヘラ削り，あるいはハケ調整のものが一般的である。

器形的には口縁が長目で頸部が非常にくびれるもの（4，7，11，12）があり2の壺形土器に類似する。また9，15のように鉢に近いものもみられる。底部からやや直立して立ち上がるものが目立つ。

2は土師器の壺である。前述した4，7，11，12もこれに類似するものである。

22は土師器の甑で多孔製，無把手である。

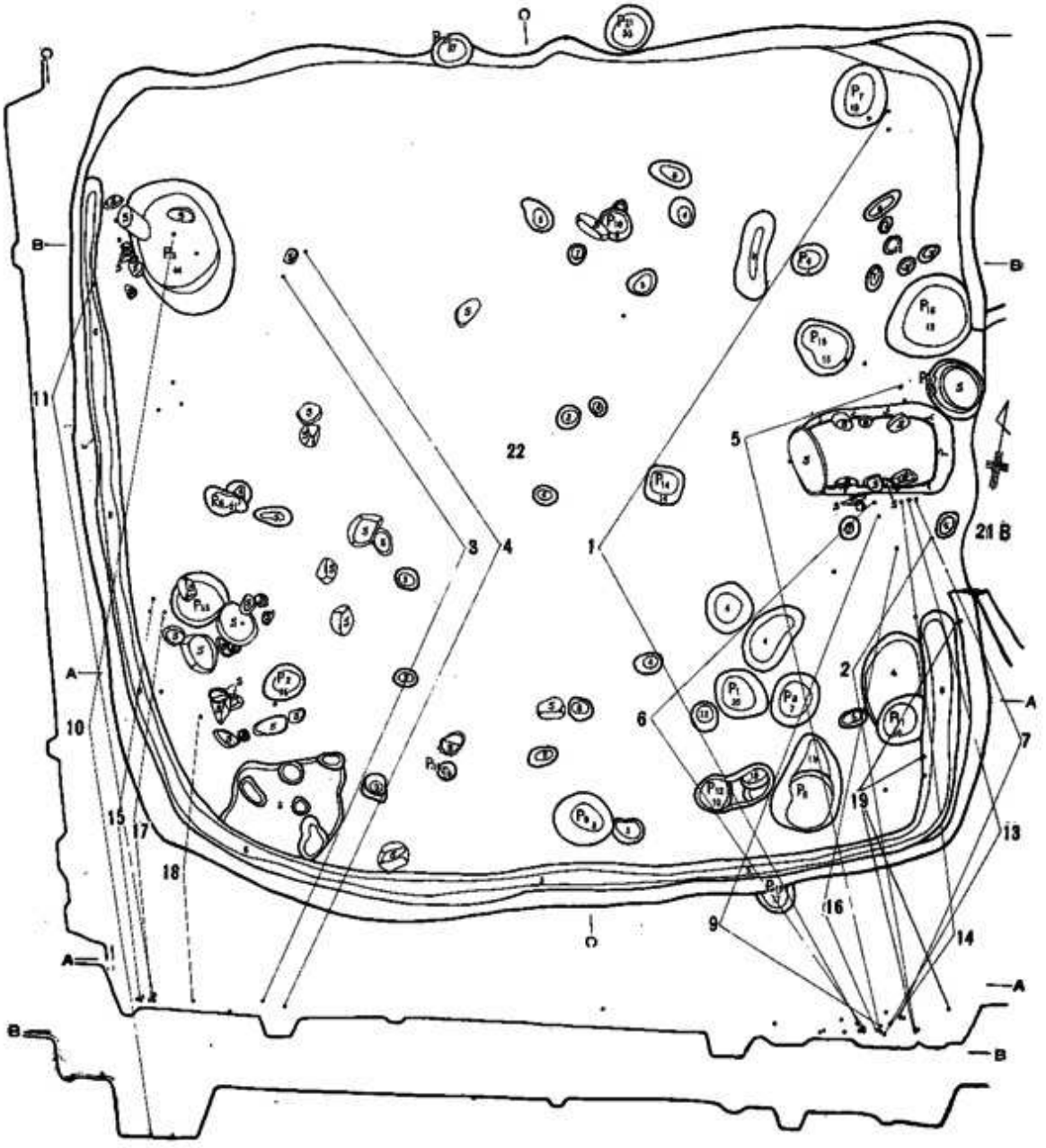
23～30，32～34は土師器の坏で内黒研磨のものが目立つ。中には高坏の坏部もあると思われる。

31は須恵器の坏，35は須恵器の蓋付坏である。36は須恵器でかわった器形を持つものであるが坏とした。

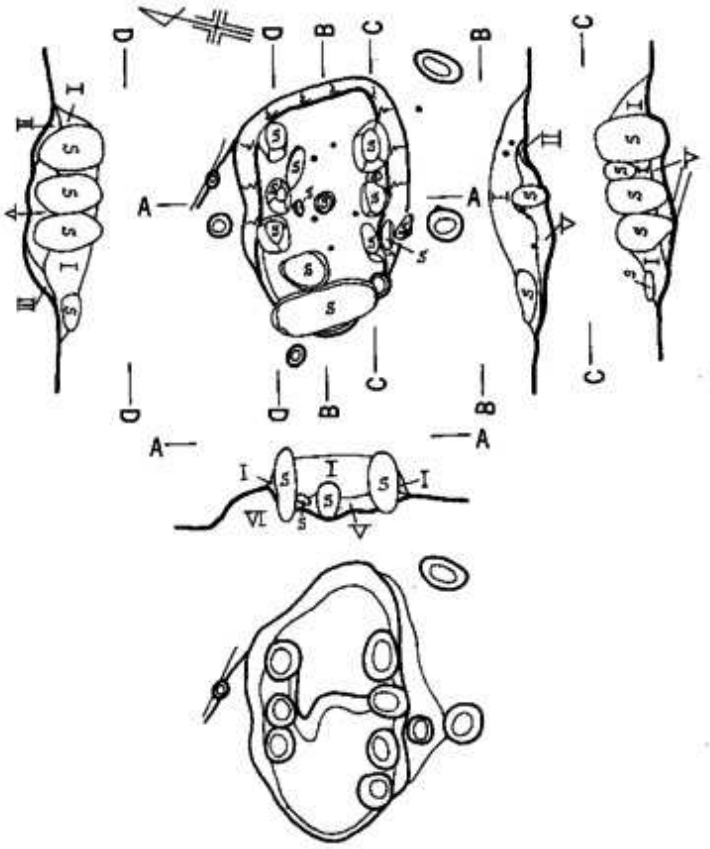
37は須恵器坏蓋である。

38～40は手づくね土器である。

時期は6世紀前半に位置づけられるであろう。　（気賀沢　進）



第72図　第22号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第73図　第22号住居址カマド実測図（S $=\frac{1}{40}$）

21　第22号住居址（第72～75図）

遺構（第72・73図）

本住居址は第21号住居址の西にあり，一部重複するが新旧関係はプランからだけでははっきりしない。

プランはほぼ隅丸方形を呈し7.6×7.3m を測る大形の住居址である。壁の立ち上がりはややゆるやかで壁高は35cm前後である。

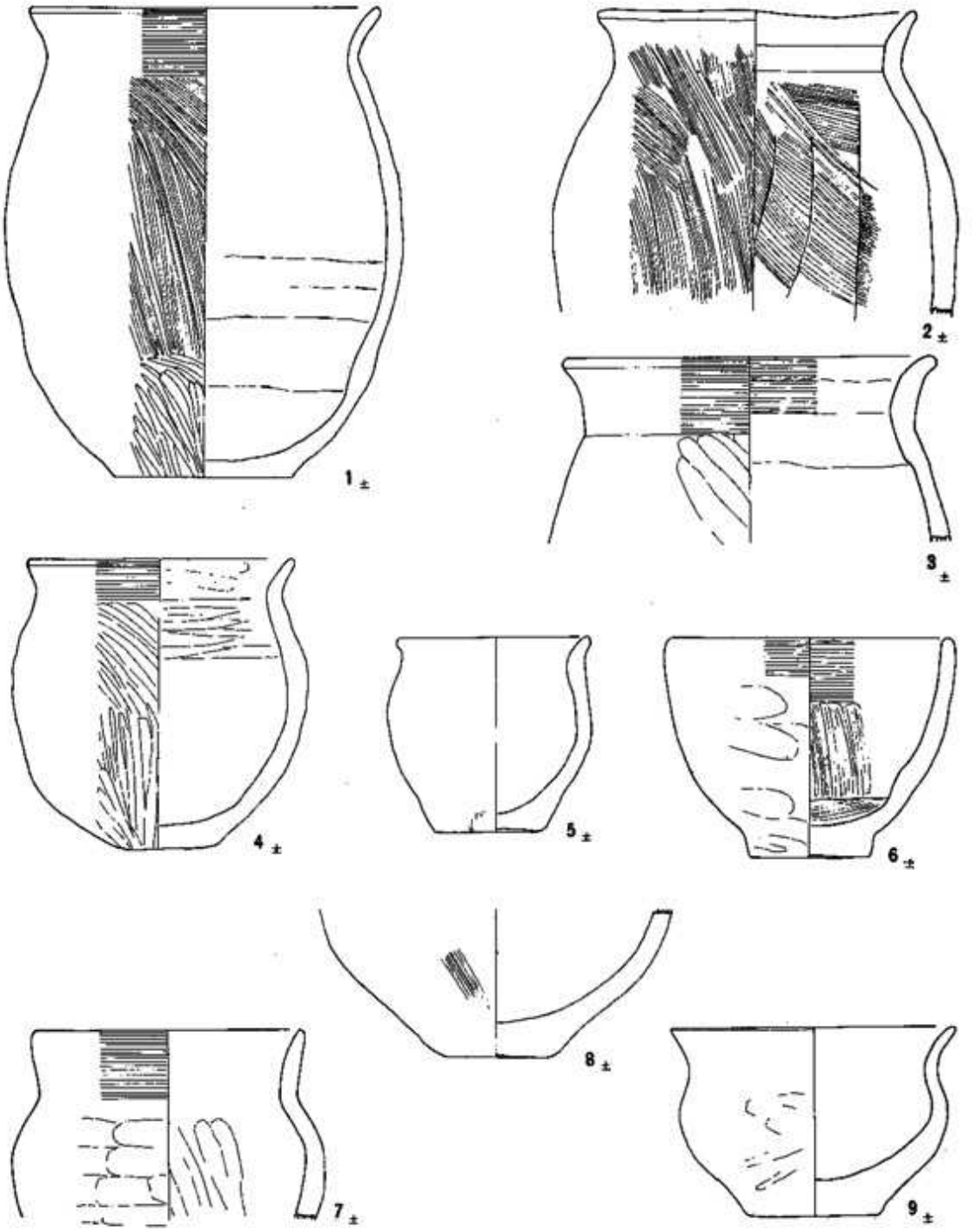
床面はほぼ平扣でロームを固く叩きしめて良好である。

主柱穴は不明である。P_3は深いが端によりすぎるきらいがある。あえてあげれば P_1，P_2 であろうか。

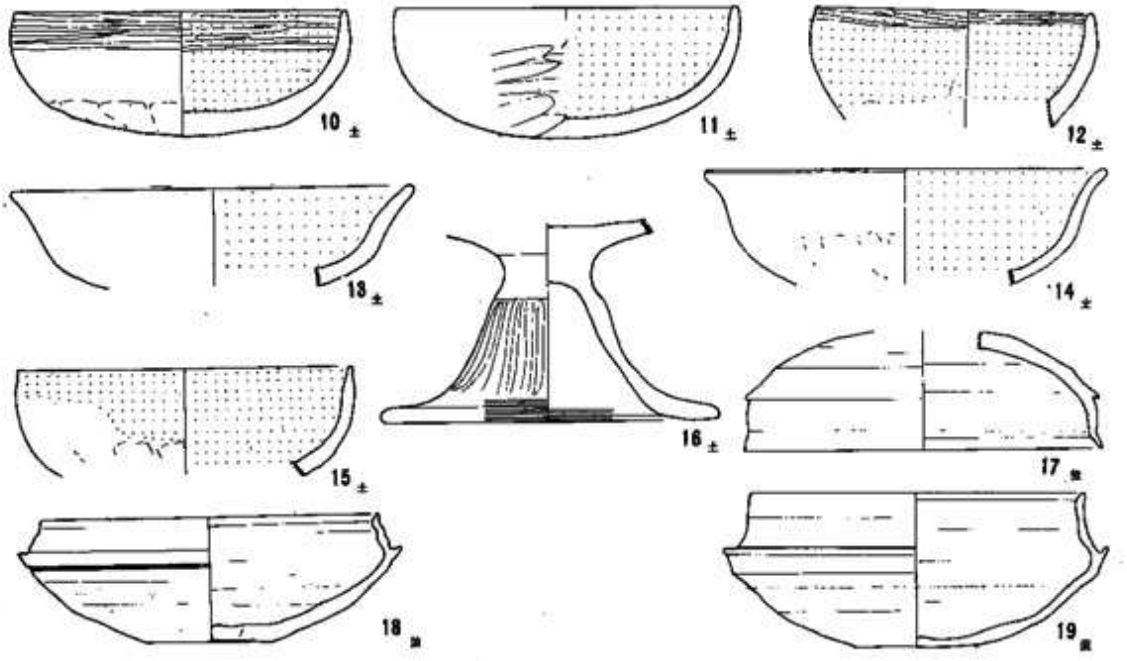
カマドは東壁ほぼ中央にあり，石心造りの小形のものである。

遺物（第74・75図）

出土土器は多いほうである。17～19の外には須恵器は甕の胴部があるのみで土師器が主体



第74図　第22号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第75図　第22号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

を占めている。

21号住居址同様甕が多い。

1～5，7，8は土師器の甕である。口縁部に横なでを施すものが多い。胴部調整はハケ調整ないしヘラ削りのものが一般的である。

6は土師器の鉢であろう。9は口縁がかなり強く外反するものである。小形甕であろうか。

10～15は土師器の坏である。すべて内黒研磨土器で口縁が直立するもの（10～12，15）と外反するもの（13，14）がある。13，14は高坏部とも考えられる。

16は土師器の高坏である。

17～19は須恵で17は坏蓋，18，19蓋は坏蓋付坏である。

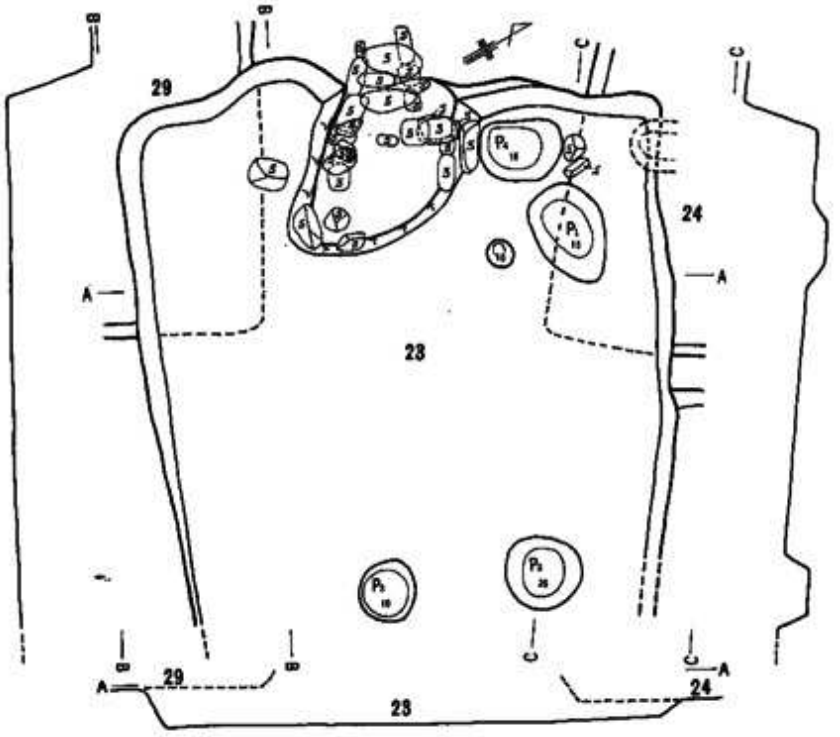
須恵器は陶邑のＴＫ47窯期に比定されるもので住居址は６世紀初頭に位置づけられるのであろう。　（気賀沢　進）

22　第23号住居址（第76～77図）

遺構（第76，77図）

本住居址は北西部にて第24号住居址を南西部で第29号住居址を切っている。東側は開田のさいに破壊されており不明である。

プランは東側が不明のためはっきりしないが，一応隅丸長方形と考えられるが東側はやや内



第76図　第23号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）

側にせばまっておる。西側で4.1m，東側現存部3.6m を測る。

壁の立ち上がりは全体にゆるやかである。壁高は西側で60cmほどと深くなっている。

床面はほぼ平らでロームを固く叩きしめてあり良好である。

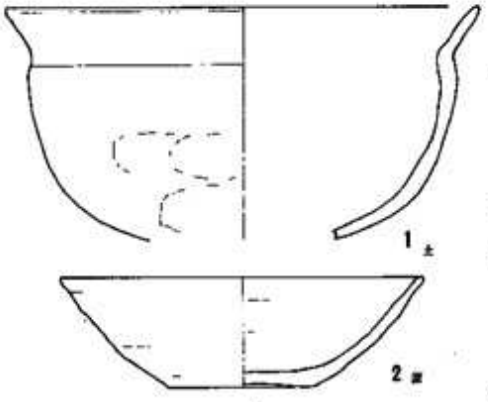
ピットは４個みられるが主柱穴ははっきりしない。

カマドは西壁ほぼ中央にあり，住居址の規模のわりには大きく壁外に煙道部を出したもので非常に残存状態は良いものである。

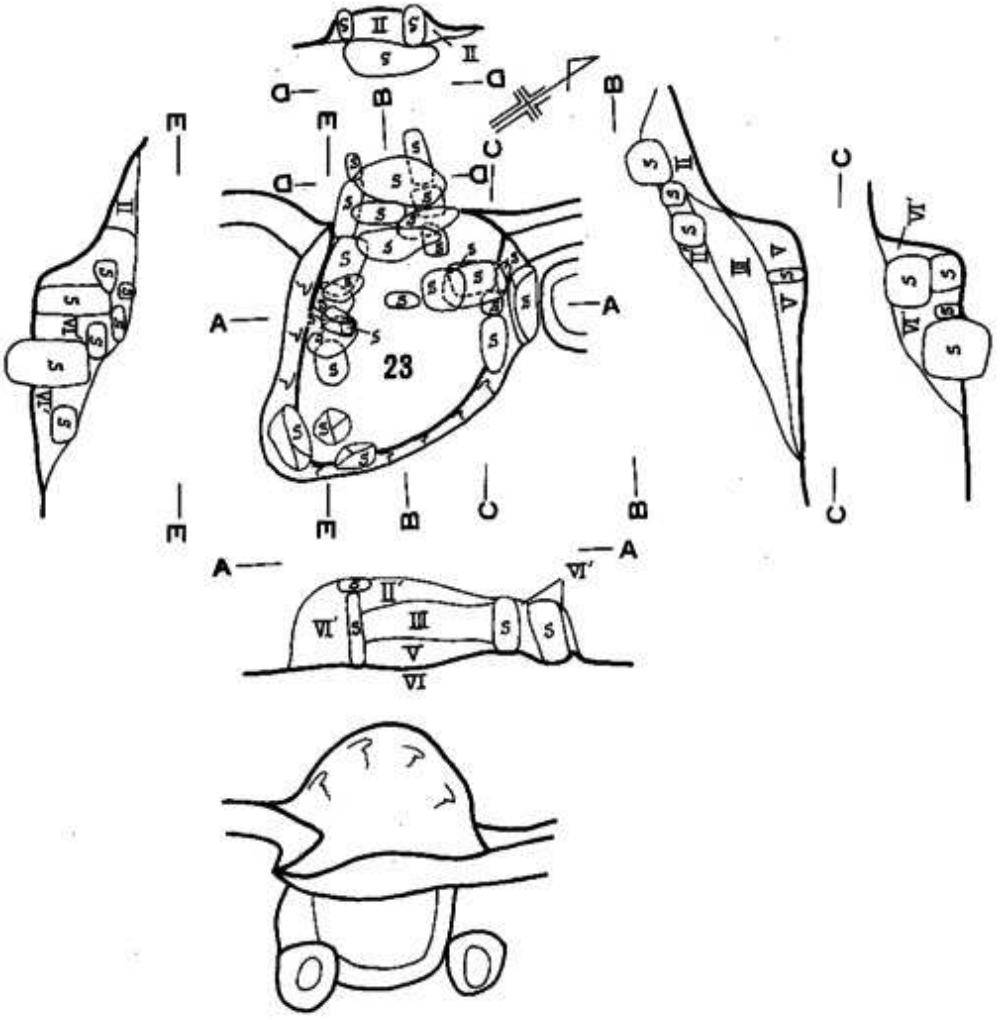
遺物（第78図）

山土土器は比較的多く出土しているが，図示できたもの第78図の２点だけである。須恵器もあるが土師器が主体を占め甕が多い。

１は土師器で甕というより鉢に属するものと思われる。



第78図　第22号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第77図　第22号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

2は須恵器の坏である。

時代は平安時代前半に位置づけられるであろう。1の鉢は住居址の時期より古いものである。

（小原　晃一）

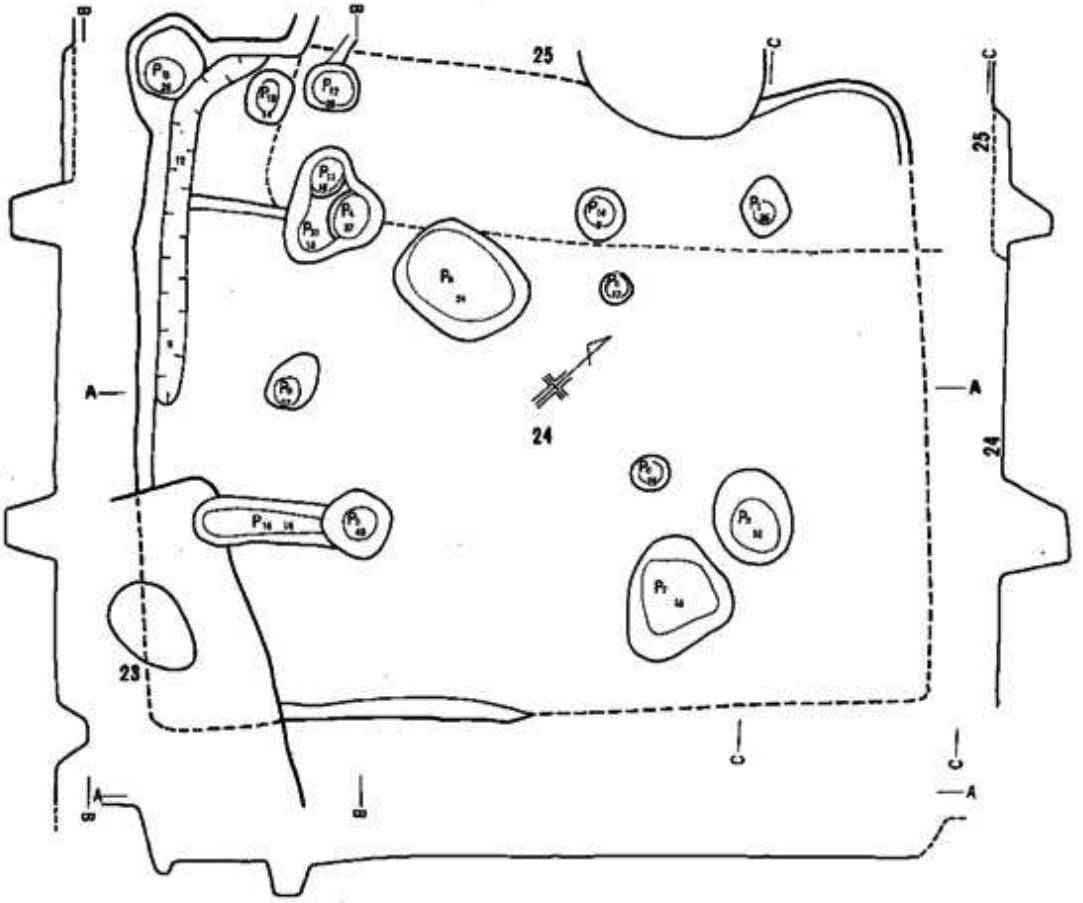
23　第24号住居址（79～81図）

遺構（第79図）

本住居址は南東部を第23号住居址に切られ，西側は第25号住居址に貼り床されている。北側は攪乱され東側は一部を残して開田のさいに壊されている。

残存部から推定するに5×6mの隅丸方形と思われる。

第25号住居址貼り床面との比高は15cm前後である。壁高は南側で40cmと比較的高い。立ち上



第79図　第24号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）

がりはややゆるやかである。

床面はほぼ平らであるが，ロームはあまり叩きしめられておらない。

主柱穴はP_1，P_2，P_3，P_4の４本と考えられる。西壁から南壁にかけてわずかに周溝がみられる。

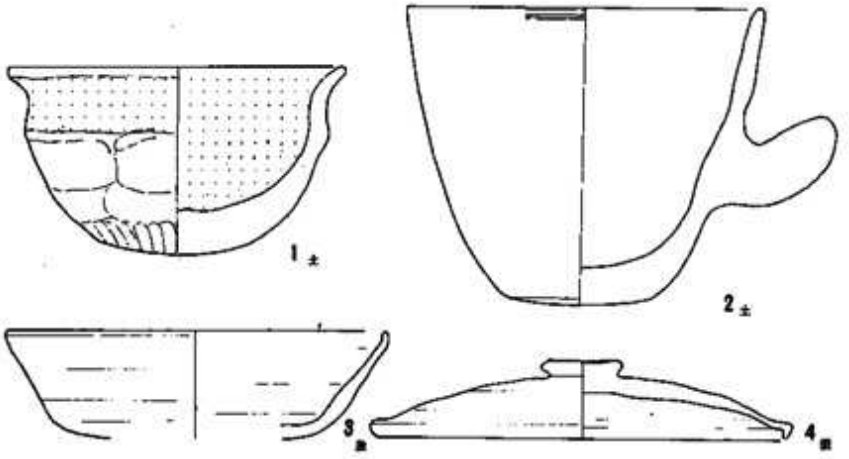
カマドは焼土等が東にも西にもなく，北側にあったとすれば壊されたとも考えられるが，他の住居址例からすると北側にあるとは考えにくく，カマドの存在の可能性は薄い。

遺物（第80，81図）

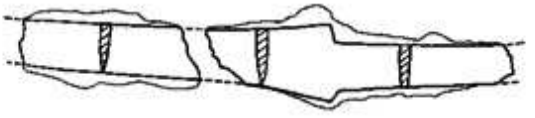
出土土器は多い。須恵器では３，４の外に高台坏，甕，蓋があるが主体は土師器が占めており，甕が多い。

土器の外には第81図の刀子がある。

１は土師器の鉢で坏とも言えそうなものである。



第80図　第24号住居址出土土器（$\frac{1}{5}$）



第81図　第24号住居址出土鉄製品（$\frac{1}{2}$）

2は特殊な器形で正式名称を知らないので一応把手付鉢とした。剝落激しくはっきりしないが，全面朱彩の可能性ある。内黒研磨ではあるが第29号住居址にも一点出土している。県下でも多くの文献にあたれば出土例はかなりあると思われるが，若干器形は違うが把手付のものは佐久市岩村田上の城遺跡（平安時代―把手付埦形土器）※1の2例を知るのみである。

3は須恵器の坏，4はやはり須恵器で坏蓋である。

時代は奈良時代後半に位置づけられるであろう。　（気賀沢　進）

※1　佐久考古学会編―「図録佐久の古代を知ろう」―佐久市教育委員会　昭和53年

24　第25号住居址（第82～84図）

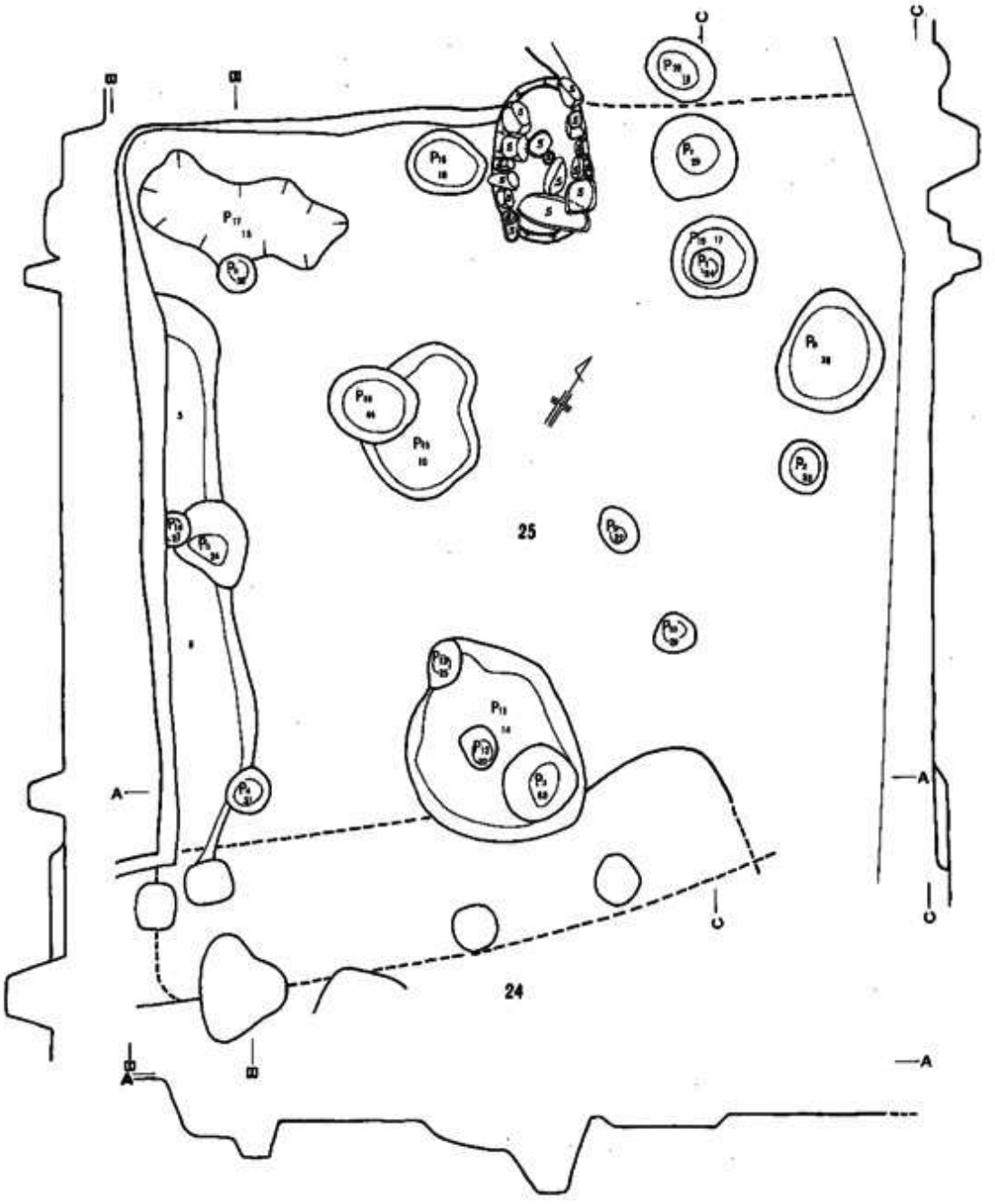
遺構（第82，83図）

本住居址は東側部分を第24号住居址に貼り床しており，北側は攪乱のためはっきりしていない。カマドの北側壁も攪乱のためはっきりしない。

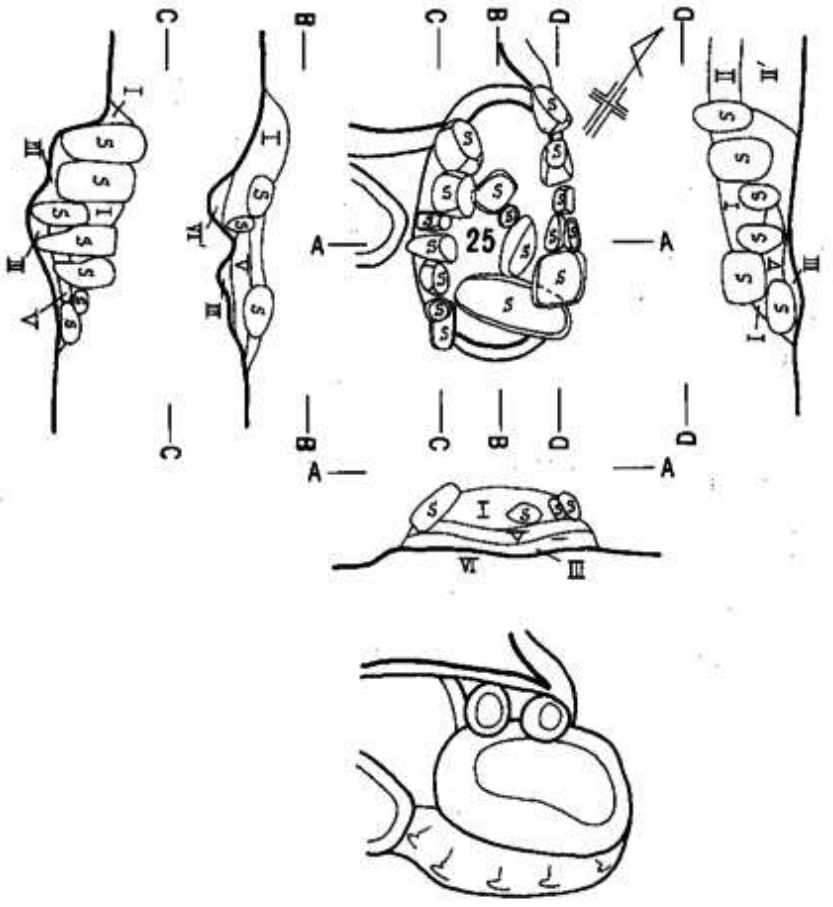
プランはカマドの位置からして隅丸方形と思われ，7×7mを測ると思われる。

壁の立ち上がりはゆるやかで，壁高は30cm前後である。

床面はロームを固き叩きしめており良好である。貼り床はロームブロックからなりかなり，はっきりしている。



第82図　第25号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第83図　第25号住居址カマド実測図（（S＝$\frac{1}{40}$）

主柱穴はP_1，P_4，P_6がそれと考えられ，北東部の１本を入れて４本である。これら以外にもP_2，P_3，P_5，P_8，P_{16}など深いものもある。

カマドは西壁中央にあり，石心造りで残存状態は非常に良く，天井石，支石も残っている。

遺物（第84図）

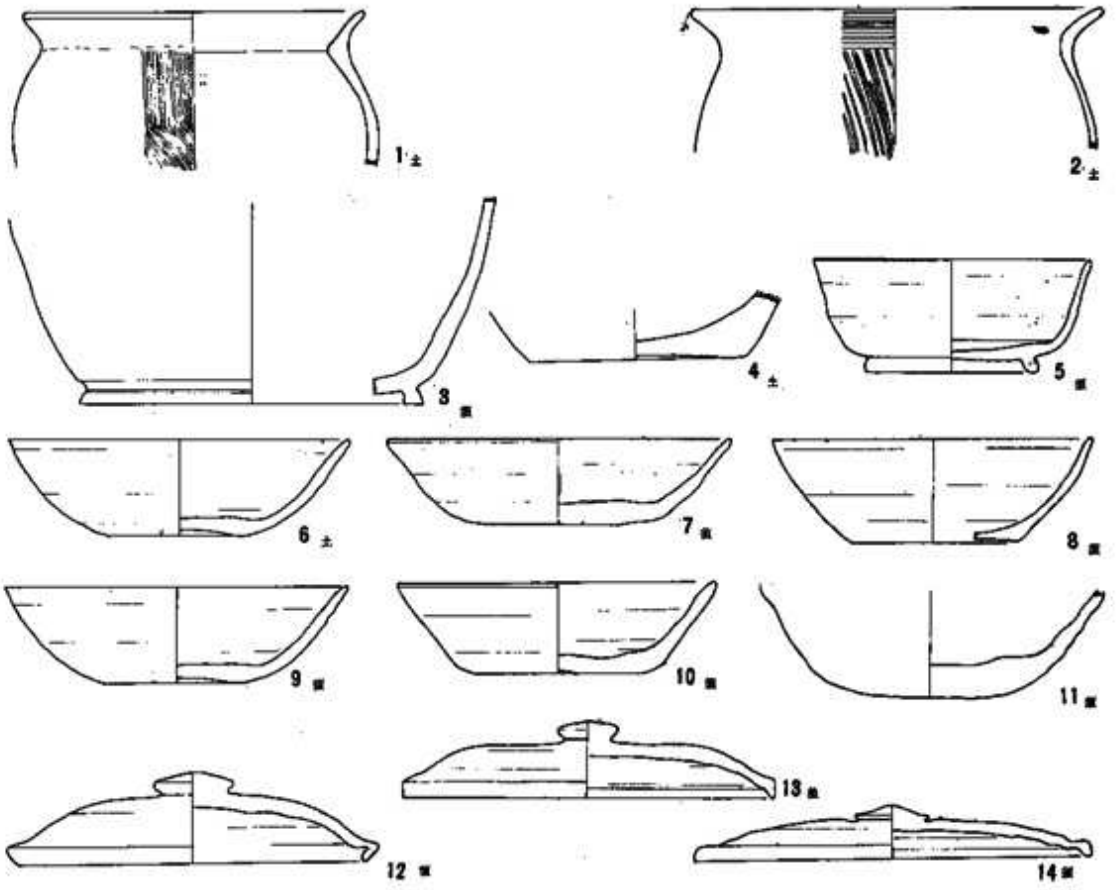
出土土器は多い。量的には土師器が多いが，図示した如く須恵器の坏が多くみられ，個数にすれば半々位と思われる。土師器では甕が多い。

１，２はともに土師器の甕である。３は須恵器の高台付甕の底部と思われる。４はやはり甕の底部で土師器である。

５は須恵器の高台坏，６は土師器の坏，７～11は須恵器の坏である。

12～14は須恵器の坏蓋である。

時代は奈良時代後半と思われる。　（小原　晃一）



第84図　第25号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

25　第26号住居址（第85，86図）

遺物（第85図）

本住居址は第25号住居址の西にあり，南西部にて第27号住居址を切っている。

長方形プランと考えられるが，東側の壁はくずれており，北東部は溝状に伸びている。大きさは5×3.7m を測る。

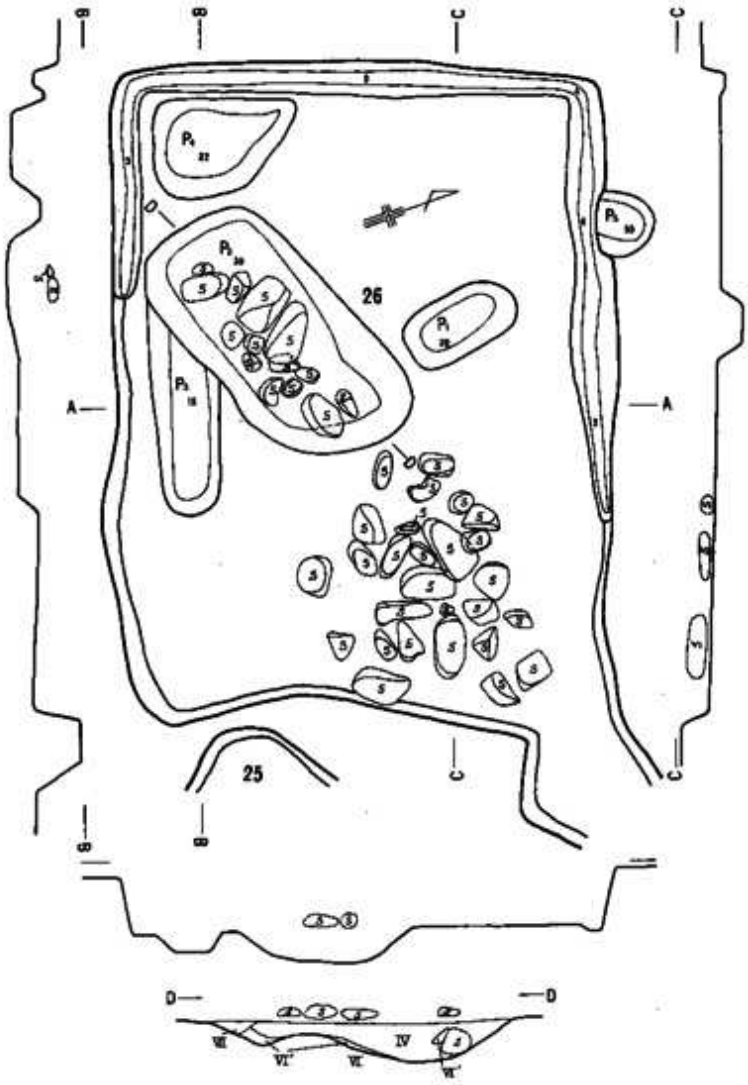
ロームの床面は固く叩きしめられており良好である。第27号住居址との床面差は30cmである。

主柱穴と考えられるもの，またカマドもなく特殊な遺構であろうか。東側床面上に自然石がおかれ，また長方プランのピット内に一部と上部に自然石がおかれている。性格は不明である。P_2は土坑であろうか。

北壁から南壁西側にかけて深さの一定しない周溝がみられる。

遺物（第86図）

出土土器はあまり多くない。図示したものは須恵器のみであるが，土師器もかなり出土して



第85図　第26号住居址実測図（S ＝$\frac{1}{60}$）

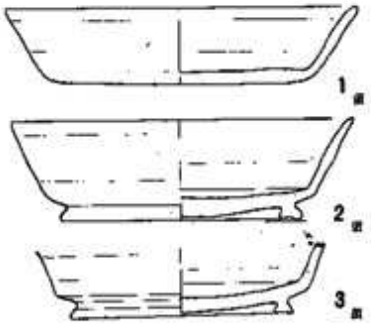
おり，比率は半々である。

時代は９世紀平安時代前期と思われる。

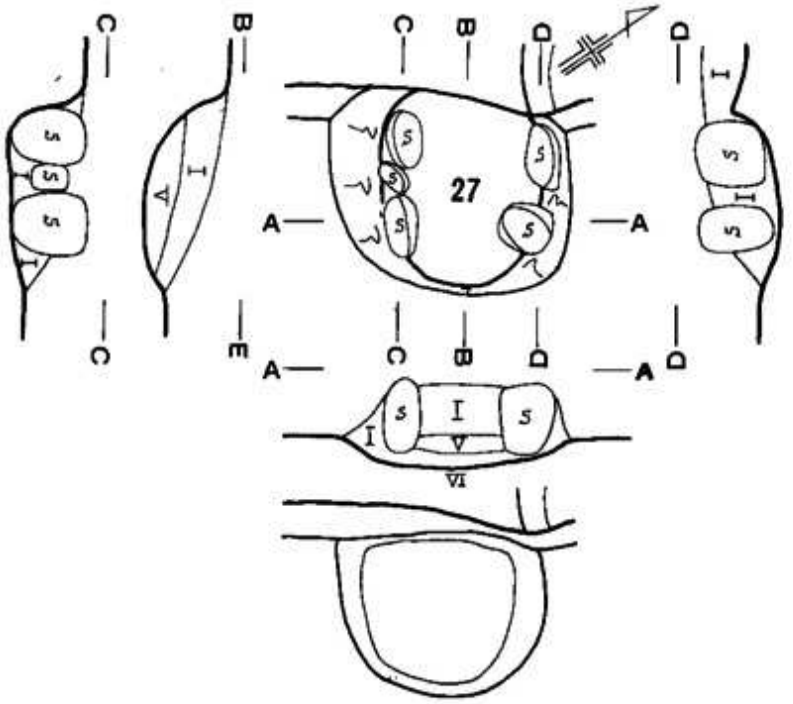
１～３はともに須恵器である。

１は坏，２・３は高台付坏である。

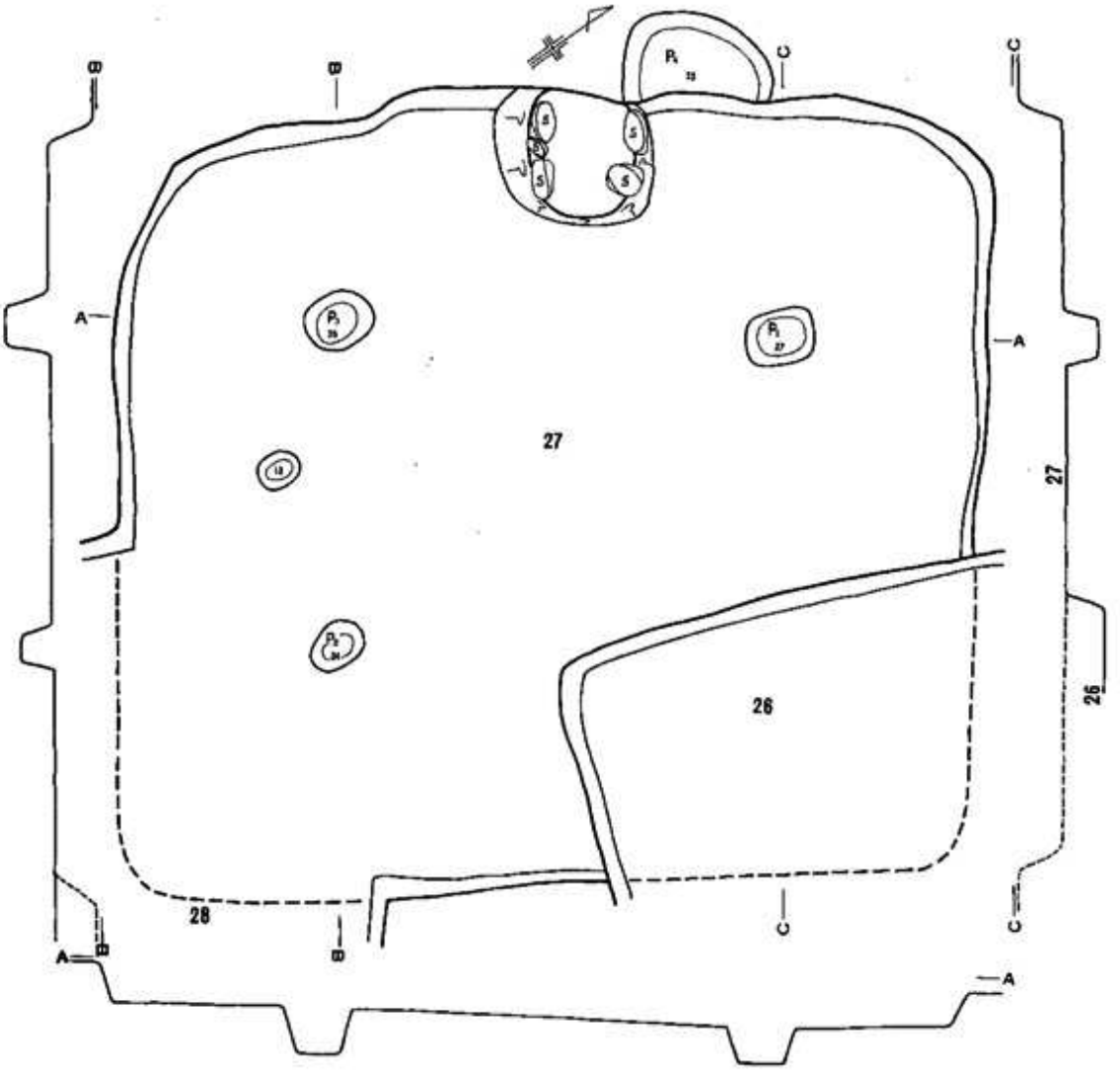
（気賀沢　進）



第86図　第26号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第88図　第27号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第87図　第27号住居址実測図（S ＝$\frac{1}{60}$）

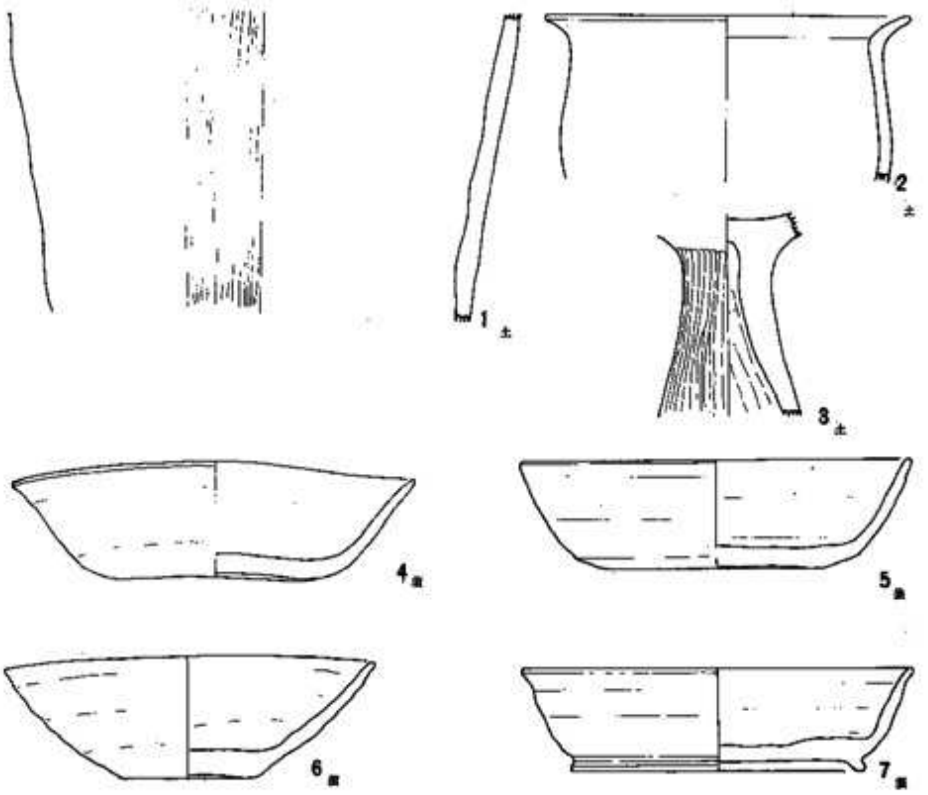
26　第27号住居址（第87～89図）

遺構（87図）

本住居址は南東部を第26号住居址に切られ，南西部は第28号住居址と重複している。第28号住居址と新旧関係は同一床面での重複でありプランからのみでははっきりしない。

プランは隅丸方形で6.2×6.6m と大きなものである。

壁の立ち上がりはゆるやかで，壁高は30cm前後である。床面はほぼ平らで幾分砂まじりのローム を固く叩きしめてあり良好である。



第89図　第27号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

主柱穴はP_1，P_2，P_3と破壊された南東部の１本を入れて４本と思われる。

カマドは小形の石心造りである。

遺物（第89図）

出土土器は多い。須恵器と土師器との比率は半々位と思われる。土師器はやはり甕が多い。須恵器は図示したもののほかに甕と坏の破片がある。

１～３は土師器で１は甕の胴部，２は甕の上半部，３は高坏の一部である。

４～７は須恵器の坏で７は高台付である。

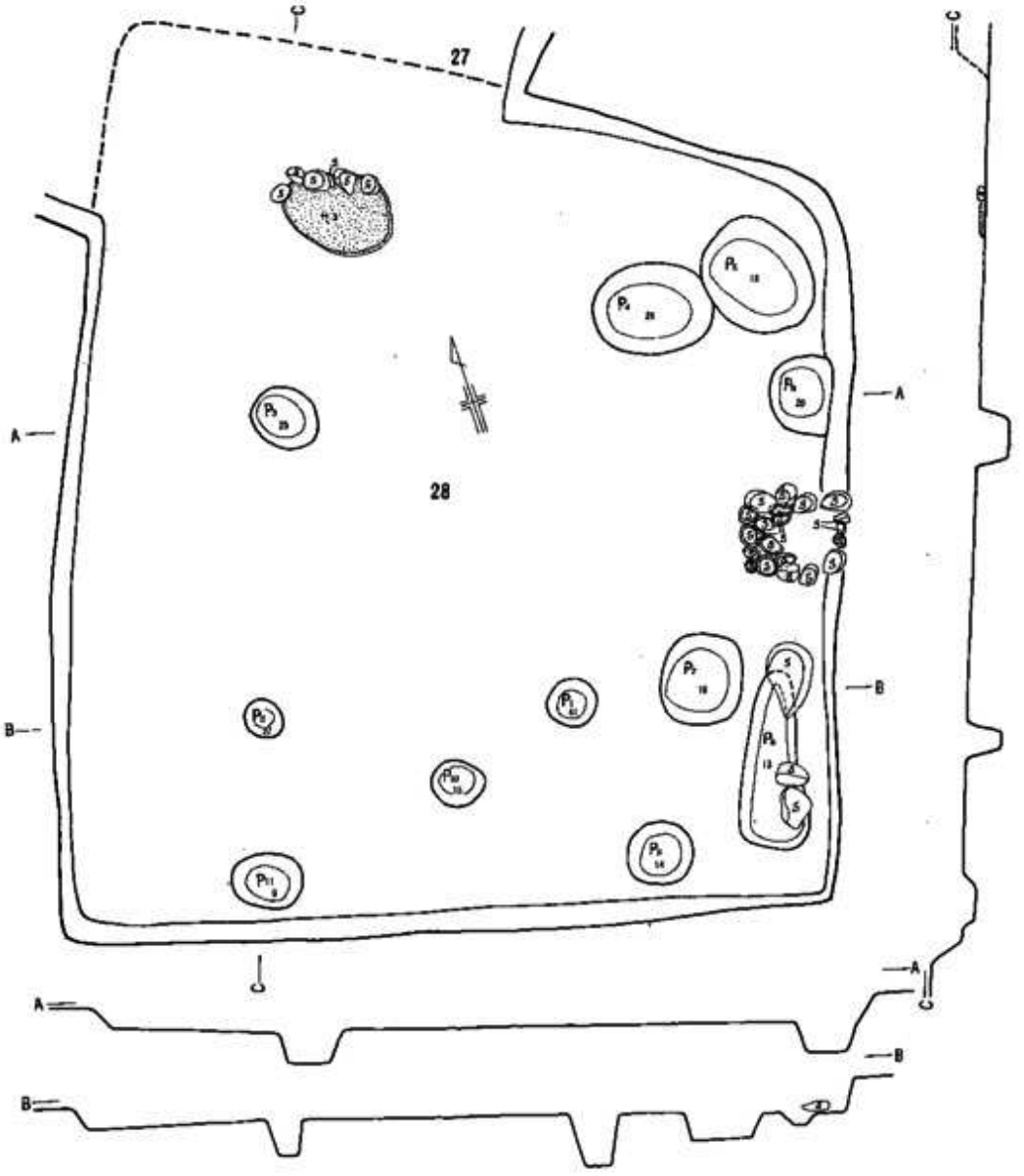
時代は奈良時代中葉と思われる。　（小原　晃一）

27　第28号住居址（第90～92図）

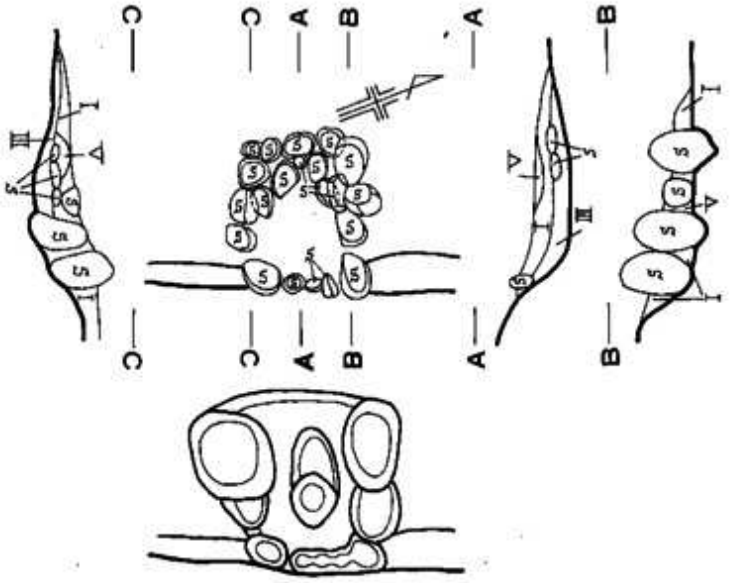
遺構（第90，91図）

本住居址は第27号住居址と北側の一部が重複するが同一床面のためプランからでは新旧関係ははっきりしない。プランは隅丸の台形を呈し東西6.1m，南北5.7(東側)m，西側で7.2m を測る。

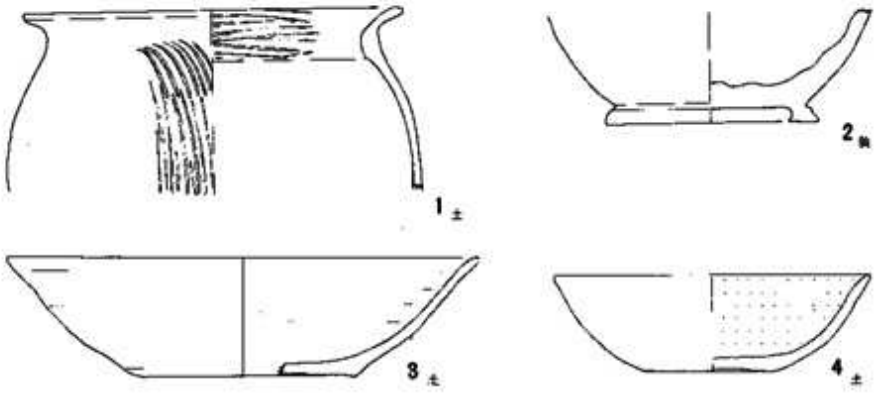
壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は15～25cmと低い。



第90図　第28号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第91図　第28号住居址カマド実測図（S $\frac{1}{40}$）



第92図　第28号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

床面は砂質まじりのロームを良く叩きしめてあり良好である。

主柱穴はP_1，P_2，P_3の３本は確実と思われるが，北東部ははっきりしない。

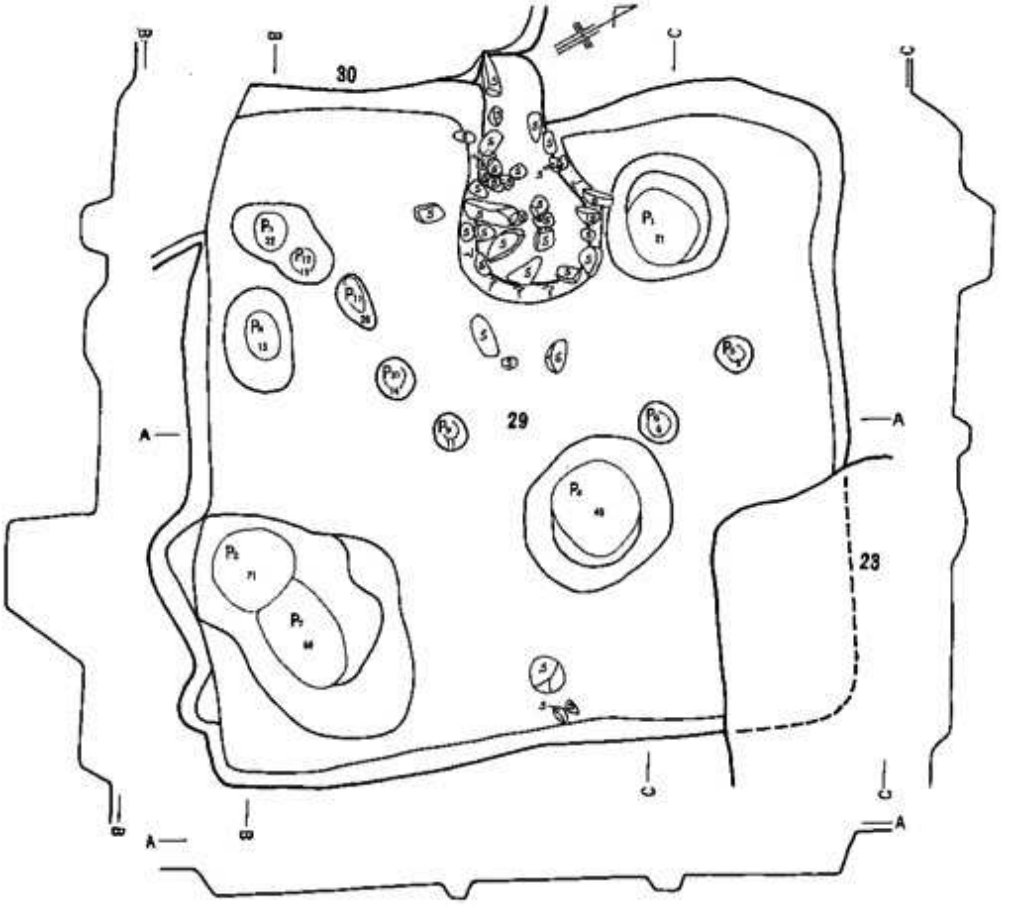
カマドは東壁ほぼ中央にあり小形の石心造りである。

遺物（第92図）

出土遺物は比較的多いが，図示でき得るものは以外と少ない。土師器と須恵器の比率は半々である。

１は土師器の甕である。２は須恵器の高台付甕である。３・４は土師器の坏で４は内黒であ

る。時代は9世紀後半に位置づけられるであろう。　　（小原　晃一）



第93図　第29号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）

28　第29号住居址（第93～95図）

遺構（第93，94図）

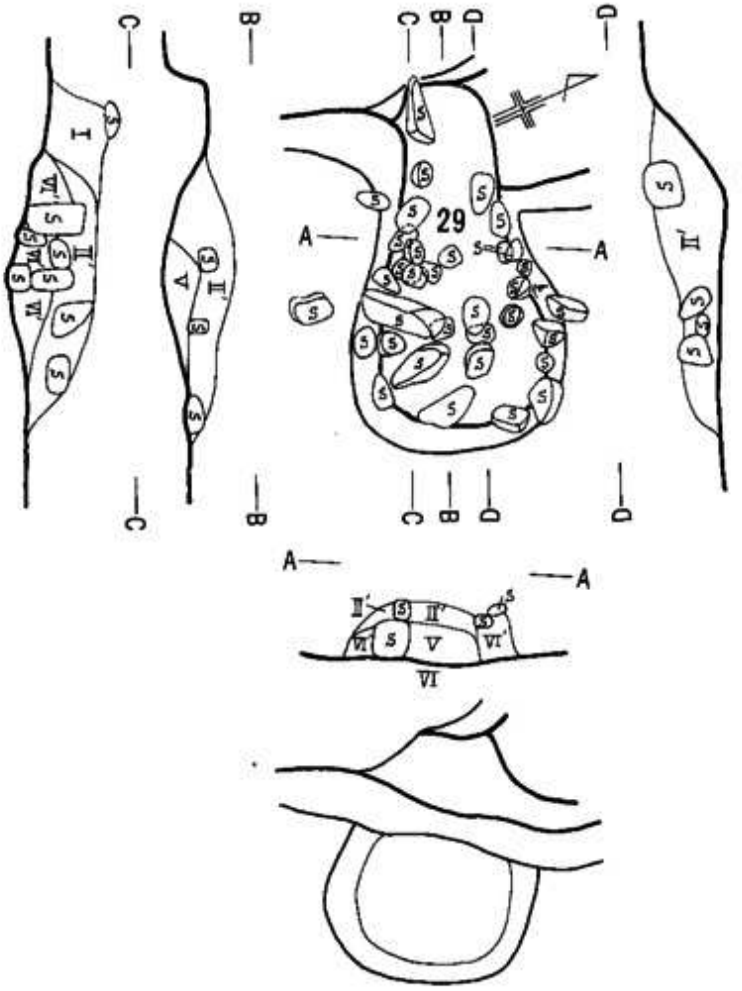
本住居址は北東部を第23号住居址によって切られ南西部は第30号住居址を切っている。

壁の立ち上がりはゆるやかで北側は高く30～40cm，南側は20cm前後である。第30号住居址との床面差は10cmほどである。

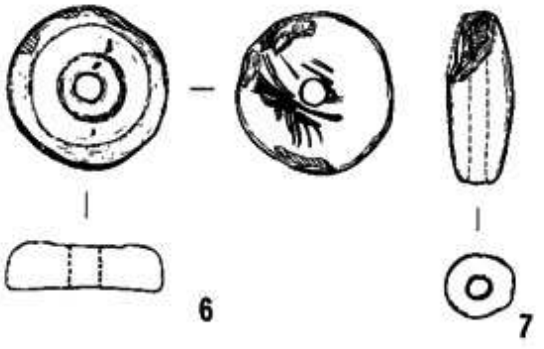
プランは隅丸で南壁が広くなっている。南北5.1m，東西は北壁で5.1m，南壁5.4mを測ることができる。

床面はほぼ平らでロームが固く叩きしめられており良好である。ピットはかなりみられるが主柱穴は定かでない。

カマドは西壁ほぼ中央にあり石心造りで残存状態は良い。



第94図　第29号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第96図　第29号住居址出土石製紡錘車・土錘

遺物（第95，96図）

出土土器は少ない。須恵器は坏と甕の破片があるのみで土師器が主体を占めている。

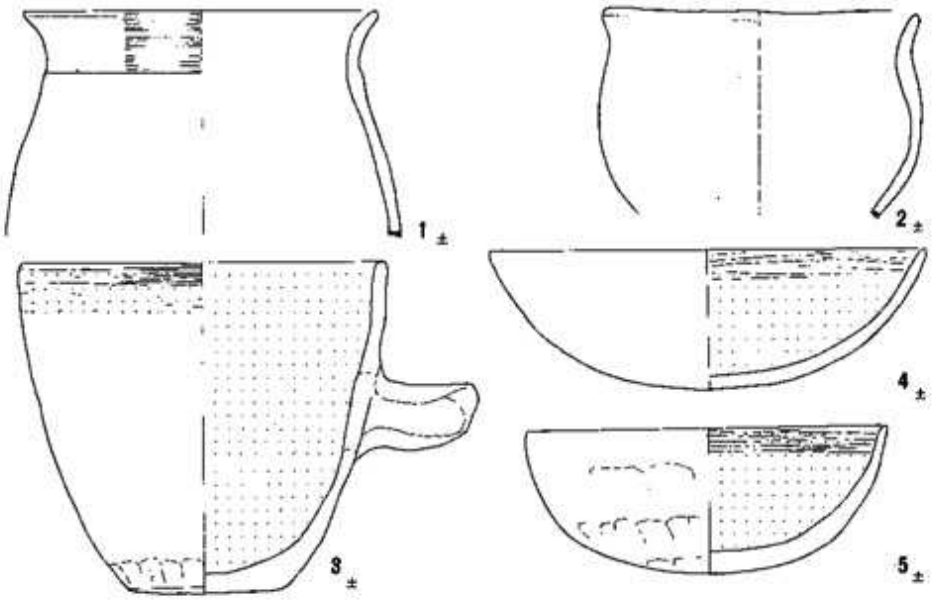
土器の外には石製の紡錘車（6）と土錘（7）がある。

1・2は土師器の甕である。

3は第24号住居址出土のものと同種のもので把手付鉢で内黒である。

4・5はともに内黒の坏である。

時代は7世紀前半に位置づけられる。（気賀沢　進）



第95図　第29号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

29　第30号住居址（第97，98図）

遺構（第97図）

本住居址は北東部を第29号住居址に切られ，西側は第31号住居址に貼り床されその上にカマドが構築されている。

壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は20cm前後である。

床面はほぼ平らで固く叩きしめられており良好である。プランは隅丸方形で7.7×7.6m と大きなものである。

主柱穴はP_1，P_2，P_3がそれと思われ，P_4は若干外ににげるが柱穴と考えると４本である。

西壁貼床下には焼土はみられずカマドらしきものはない。カマドは元来なかったものであろうか。

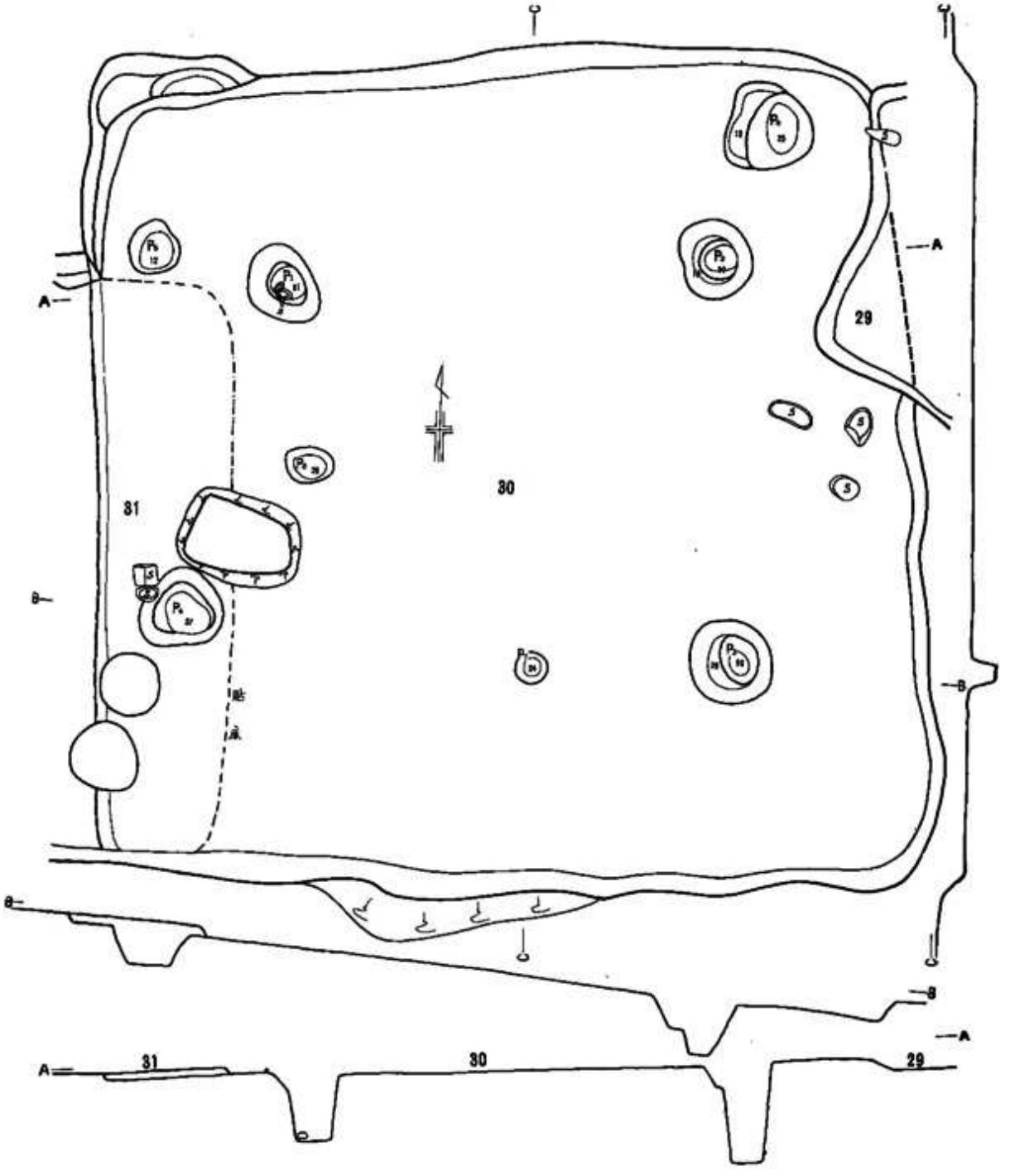
遺物（第98図）

出土土器は多いが図示でき得たものは２点のみである。土師器が主体を占め甕が多い。

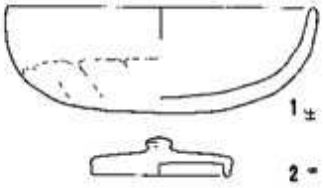
１は土師器の坏である。

２は須恵器の蓋で壺のものと思われる。

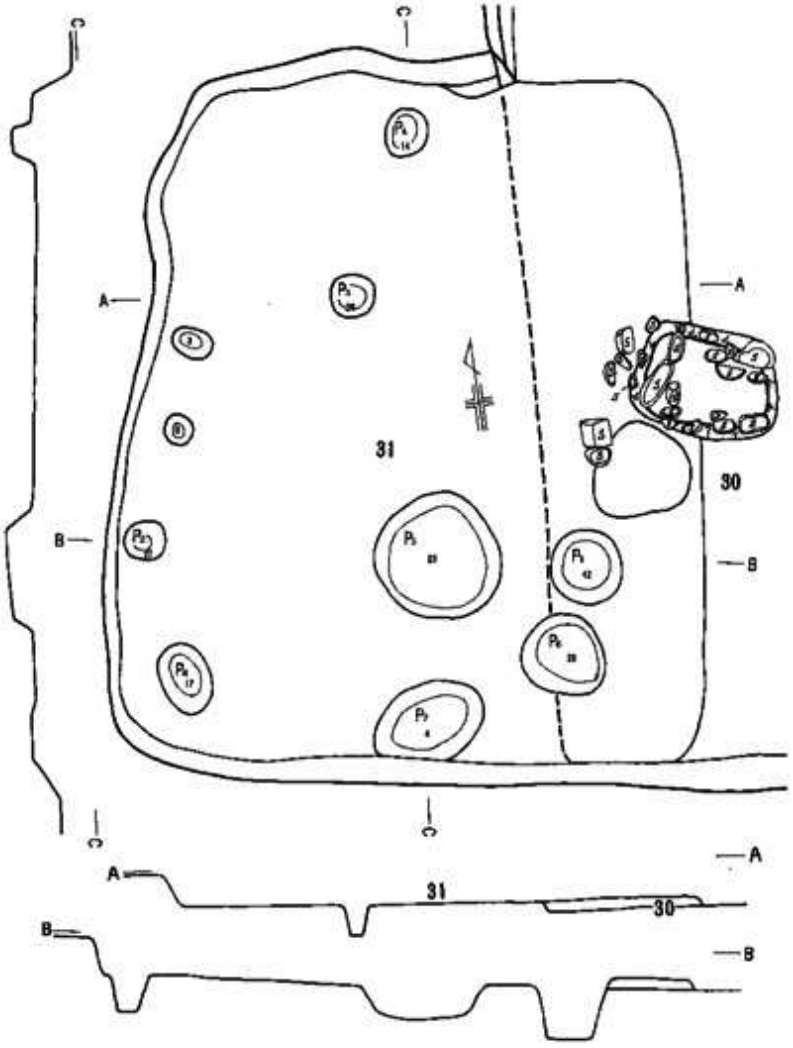
時代は７世紀前半と考えられる。　　（気賀沢　進）



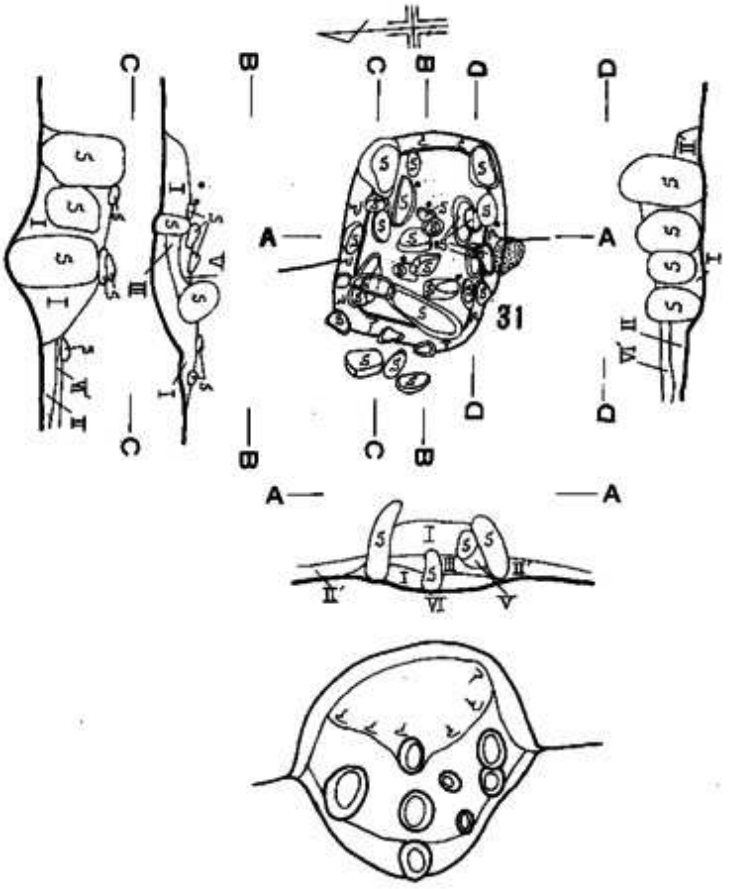
第96図　第30号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第98図　第30号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）



第99図　第31号住居址実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第100図　第31号住居址カマド実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

30　第31号住居址（第99，100図）

遺構（第99，100図）

本住居址は東側を第30号住居址に貼り床している。

プランは隅丸長方形で4.5×5.5m を測る。北壁がやや短くなっている。

壁の立ち上がりはゆるやかで壁高20～30cmほどである。床面はほぼ平らでロームを固く叩きしめてあり良好である。

主柱穴は定かでない。

カマドは東壁中央にあり石心造りで残存状態は良い。

出土土器はあまり多くない。図示できたものは全くない。土師器が主体を占め甕が多い。

（小原　晃一）

第4節　その他の遺構

第4図遺構図にみるとおり多くのピットが検出されているが，柱穴址としてとらえれたものが2基，その外小竪穴が2基確認されている。土坑と考えられるものもあるが今回は省略した。

1　柱穴址（第101図）

柱穴址と確認されたものは2基である。他にあると思われるがはっきりしない。

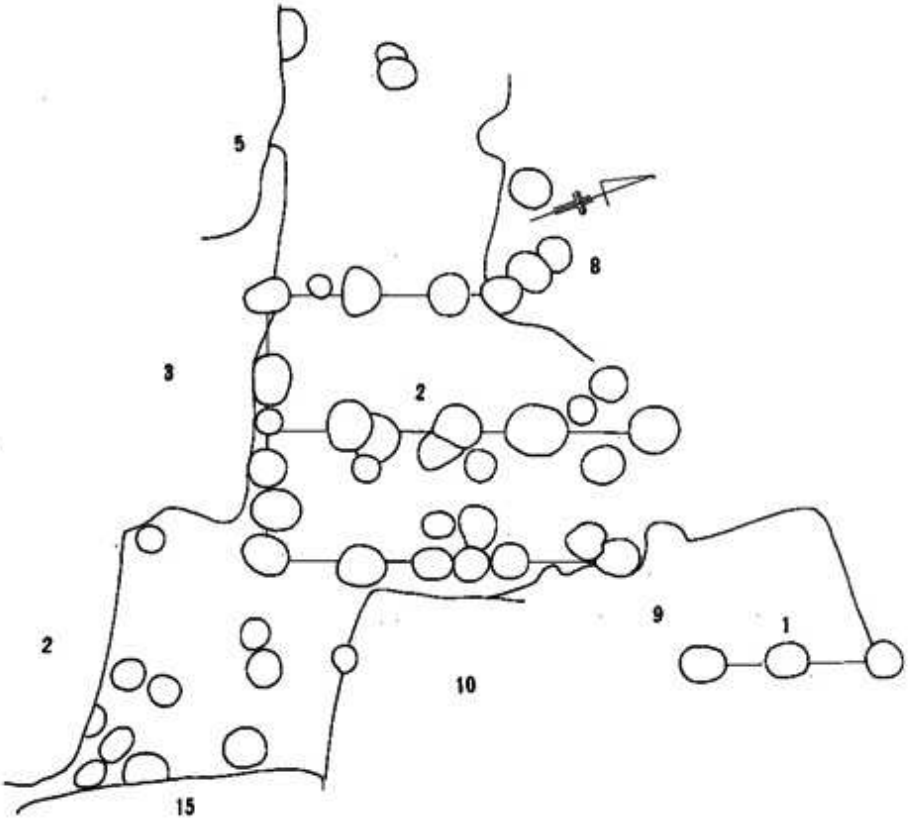
柱穴址1は第9号住居址内と壁外の3本が現存するもので，東側に続くものと思われる。

柱穴址2は第2，3，5，8，9，10号住居址にはさまれた所にあり，あまりはっきりしていない。

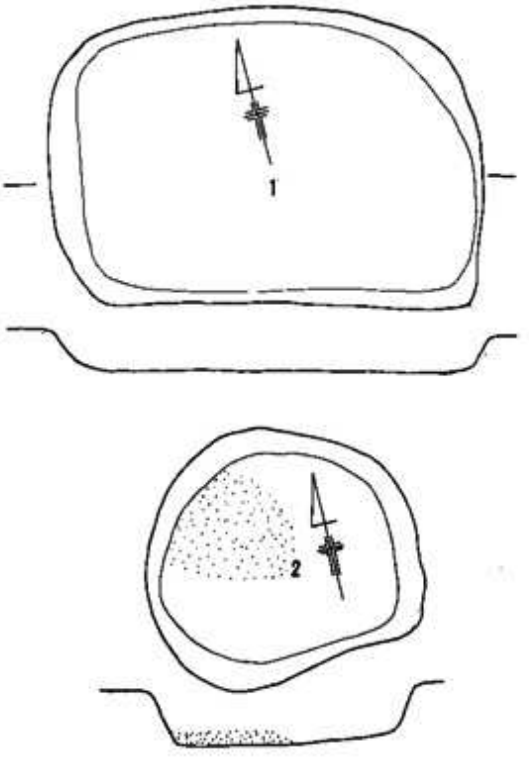
2　特殊竪穴（第102図）

1　特殊竪穴1

古墳の南東に発見されたもので北側は胴が張るが，ほぼ隅丸方形で3.3×2.3m を測る。底は平らで叩きなどはない。柱穴，カマドなど特別の施設はない。土師器が若干出土したのみで，



第101図　柱穴址実測図（S＝$\frac{1}{120}$）



第102図　特殊竪穴実測図（S＝$\frac{1}{80}$）

時代は不明である。

2　特殊竪穴2

第20号住居址の南にあり，ややくずれた円形を呈している。大きさは2.2×2.1m である。底はほぼ平らで叩きはない。西側部分に厚い焼土がみられる。覆土中には炭化物など全くみられなかった。

（気賀沢　進）

第Ⅳ章　おわりに

今回の発掘によって得られたものは非常に大きなものがあるが，ここでは簡単にふれて結語としたい。

発掘調査の内容は前章で詳しく述べてある。今回の調査における最も大きな発見は古墳の発見である。

土の中のことはわからないと良く言われるが，全くそのとおりである。伝世されずにあったため最初は全くの驚きであった。先にも述べたが，立地的にも低地にあり上伊那における古墳立地からすると非常に珍しい。残念ながら開田のため主体部が破壊され，正確な時期を知り得ないわけであるが，周溝内の土器からして6世紀初頭を下らないことは確かで，上伊那においては最も古い古墳に位置づけられると思われる。

次に住居址であるが全部で30軒確認されている。道路をはさんで東側に続くものと思われるが，市内においては初めて上伊那においても大集落址の内に入るであろう。

発見された住居址を時代別にみてみると次のとおりである。

古墳時代後期13軒（4，5，6，8，15，16，17，18，20，21，22，29，30）

奈良時代　　11軒（1，2，7，9，10，11，12，14，24，25，27）

平安時代　　4軒（13，23，26，28）

不明　　2軒（3，31）

このようにみてくると古墳時代後期から平安時代中頃まで続く集落である。しかし遺跡は東西に続くもので，道路改良中には平安時代後半の灰釉が出土していることからすると今回確認された時代以降も集落が営まれた可能性は強いわけである。

出土土器であるが，土師器が主体を占めているが，須恵器にも量は少ないが見るべきものがある。古墳出土の甕，水瓶，各住居址から出土している蓋付坏，坏蓋など優品である。

今回詳細な編年は組み立てられなかったが，非常に良好な資料を持ち，また各住居址の複合関係も明確となっているので伊那谷における編年がある程度確立できるものと思われる。

出土土器中須恵器について若干ふれておく。多くの須恵器の中には陶邑産，美濃須衛産を初めとするものがあるが，それらに混じって伊那谷で焼かれたと思われるものがある。胎土に石英，長石をかなり含んで暗青色，黒青色に焼かれた一群で他の須恵器とは明確な相異をみせている。今までの所，上伊那においては窯の発見はみられないが，これらのことを考えると窯の存在をまた窯の発見に真剣に取り組む必要を強く感じるものである。

多くの諸問題があるが，今後の研究に残して簡単に所感を述べておわりとする。

本報告書をまとめるにあたって多くの方々からご教示をいただいたが，笹沢浩氏には土器についてとりわけご面倒をおかけしました。ここに記して謝したい。　　（気賀沢　進）

出土土器表（単位はcm，（　）は現存値）

出土地所	掲図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
古墳	8－1	甕	土師	22.4		(25.2)	大きな長石 石英	外白黄褐色　下部すす付着 内灰白色	約半分で底部欠く	短い口縁はやや外反し，口唇上端は外傾する。胴部は上半部に最大径を持ちかなりの張りをみせる。	口縁内外横なで 胴外面ハケ調整 胴内面ヘラ削り
〃	－2	〃	〃		8.3	(3.3)	長石・雲母	外淡黄褐色　内黄褐色	底部のみ	外に張り出した底部から屈曲して立ち上がる胴部は内湾しながら外に張る。	底部は同方向のヘラ削り 胴外面は縦のヘラ削り 胴内面はナデ
〃	－3	〃	〃		5.5	(2.9)	大きな長石 石英	赤褐色	底部のみ	平坦でないぶ厚い底部からわずかに屈曲して外に開く。	底部ヘラ削り 胴部内外ともなで
〃	－4	〃	〃		4.7	(2.8)	大きな長石	外褐色 内黒褐色	〃	〃	底部ヘラ削り 胴外面斜位のヘラ削り 胴内面斜位のヘラなで
〃	－5	〃	〃	25.4		(8.8)	長石多	白黄褐色	口縁と胴上半部で約半分	短い口縁は直立し口唇は薄くなり上端は水平である。	口縁外面なで 胴部外面は縦のヘラなで 内面横のヘラなで
〃	－6	〃	〃	20.4		(11.3)	長石 石英わずか	外褐色 内白黄褐色	〃	口縁は外反し口唇は内そぎとなり上端は外傾する	内面胴央部に横のヘラ削りみられる。他はヘラなでである
〃	－7	〃	〃		4.9	(6.5)	長石多（大きいもの含む）	外褐色 内白黄褐色	底部から胴下半部下半部は⅓のみ	平坦な小さな底部から一旦屈曲したのち直線的に外に強く開く。	底部はヘラ磨き 他はなで
〃	9－8	壺	〃	21.1		(18.0)	ち密	黄褐色（光沢あり）	胴下半部穿孔	口縁は外反し，央部に稜を持つ。胴部は球状にふくらむ。口唇上端は外傾する。	口縁外面は横なでののち小きざみな横のヘラ磨き，口縁内面は縦のこきざみなヘラ磨き。胴部は内外とも小きざみなヘラ磨き、外面下部はヘラ削りの痕跡ある。
〃	－9	〃	〃	21.0		(17.3)	〃	〃	〃	口唇はややうすくなる他は8に同じ	口縁外面は横なでののち縦のヘラ磨きを暗文状に行う。内面は小きざみなヘラ磨き。 胴部外面頸部下に横のヘラ磨きを施しその下は縦の長いヘラ磨き内面頸部下には横なでがあり胴部は横のヘラなで
〃	－10	〃	〃	22.0		17.0	〃	〃	〃	〃	口縁内外とも小きざみな横ヘラ磨き，外面は横なで痕あり， 胴部外面は上部は横ないし斜の下部は縦に近い長いヘラ磨き内面頸部は横のヘラ削り 胴部は横・縦の長いヘラ磨き
〃	－11	坏（壺？）	〃	15.3	丸底	6.4	細かい長石，石英わずか	赤褐色	ほぼ完形	丸底から器厚を減じて立ち上がり口縁は直立したのち口唇にて外反する。低部はやや肥厚する。口唇は内傾する。	口唇外面横なで，内面横のヘラ磨き，体部外面は波状の内面は斜のヘラ磨き，底部はヘラ削りののち小きざみなヘラ磨き。
〃	－12	〃	〃	13.0	〃	5.8	長石わずか	内黒色光沢なし 外黄褐色	十強あり	厚い底部から器厚を減じて内湾して立ち上がり口縁はやや内傾する，口縁はやや肥厚する。	外面小きざみな横ヘラ磨き， 内面横のヘラ磨き底部内面は縦底部外面にはたてのヘラ削り痕残る。
〃	－13	坏	〃	15.8	丸底？	(15.0)	細かい長石と石英	内黒 外面上部黒色 下部赤褐色 内外光沢なし	十強	平底ぎみの底部から内湾して立ち上がり直立して口唇は外反する。器厚は底部から除々に減じていく。	内外とも小きざみなヘラ磨き，底部ははっきりしない。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
古墳	9—14	坏	土師	12.0		(4.4)	細かい長石わずか	外赤褐色 内白黄褐色	底部欠 ⅓	内湾して立ち上がる体部は外に開き口唇外面に屈曲を持たせ外反する。口唇はうすい。	外面小きざみなヘラ磨きを行う。口唇には横なで痕，体部には縦のヘラ削り痕残す。口唇内面細い横のヘラ磨き，体部内面は縦の細いヘラ磨きを施すが，体部上半部まで横なで痕あり。
〃	—15	〃	〃	15.7		(4.6)	ち密	黄褐色	底部欠 ⅓強	〃	外面及び口唇内面は小きざみな横ヘラ磨き，体部内面は縦のヘラ磨き。口唇内外に横なで痕，体部下部に縦のヘラ削り痕あり。
〃	—16	〃	〃	14.0		(4.3)	〃	黄褐色	⅓	器厚を減じて立ち上がる体部は直立し，内面にはっきりした稜を持って外反する。口唇は外傾する。	外面小きざみなヘラ磨き 内面体部は縦のヘラ磨きが暗文状に施される。口唇から体上部内外とも横なで痕あり，底部には縦のヘラ削り痕あり。
〃	—17	〃			3.5	(4.0)	〃	褐色 (光沢強い)	下半部 ⅓強あり	厚い底部から急に器厚を減じて外に張った胴部はやや内につぼむ。底部ははっきりしない。	外面小きざみな横のヘラ磨き 内面斜，横の細いヘラ磨きが暗文状に施される。底部同方向のヘラ磨き。
〃	10—18	蓋付坏	須恵	12.4	7.4	4.7	大き長石ときどき	暗青色	⅓	内湾して立ち上がる体部は内面に稜を持つ。口縁は内面にて屈曲したのち内傾し，口唇は内傾して内面に凹線を持つ	左回転のロクロ利用 切り離しは不明で回転ヘラ削りを行う。体部⅓ほど回転ヘラ削りある。
〃	—19	〃	〃	11.3	4.3	4.2	細かい長石，石英わずか	暗灰色 自然釉外面あり	体部⅓	厚い底部から器厚を減じて外に開く底部は央部にて屈曲しそのまま受部に至る。口縁は内ぞりぎみで内傾する。受部下に一条の沈線を持つ。	右回転のロクロ利用するも自然釉のため底部の切り離し及び調整は不明。
〃	—20	坏蓋	〃	12.7		2.9	ち密	暗青色	⅓	縁は偏平 天井部は直線をなして央部に稜をもち屈曲のち端部を折曲げて口縁としている。口縁外面は内湾する。端部はやや尖る。天井部央部内面は平担である。	ロクロ回転不明，天井部2回にわたる回転ヘラ削り。縁貼付後回転横ナデを行う。そのきいの粘土くずが天井部にはみ出ている。
〃	—21	甑 (単孔)	土師	15.4	6.5	10.8	長石，石英含む	淡黄褐色	完形	丸底ぎみのお厚い底部から除々に器厚を減じて内湾して立ち上がる胴部は口縁にて直に近くなる。口唇上端は水平である。	口縁内外横なで 胴部外面縦のヘラ削りののち簡単なヘラ磨き 底部横のヘラ削りのちヘラ磨き 内面胴上部横ヘラ磨き 下部斜，横のハケ調整
〃	—22	壺	須恵	10.8	丸底	9.5	ち密	暗青色 自然釉あり	〃	丸底の底部から強くはった胴部は角度を強めて内傾し頸部に至る。外反ぎみに立ち上がった口縁は凸帯を持ち直線的に外に開く，口唇上端は凹む。	底部はオサエ胴下半部は手持ちの横ヘラ削りがみられる。頸部に節描文，胴部は楕円文が一周する。
〃	—23	高坏	土師	14.5	10.4	9.3	〃	明黒褐色 内黒	坏部口縁 ⅓脚部 柚部⅓欠	内湾して外に開く坏体部は口唇にて外反する。脚部はややふくらみを持って直線的に開き柚部はかなり明瞭に屈曲して外に開く。	坏部は小きざみなヘラ磨き 外面体下部にはヘラ削り痕あり 内面下部は縦のヘラ磨き 脚部外面は縦のヘラ磨き 内面は横のヘラなで 柚部は内外とも横なで

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
古墳	10—24	高坏	土師	14.8	11.5	9.8	ち密	白黄褐色 外面一部 赤褐色	口縁一部欠く 脚柚部十欠く	厚い坏底体部はほぼ直線をなし，内湾して立ち上がる口縁は直立して口唇は外反する。内面に明瞭な稜を持つ。	口唇内外とも横なで 外面体部は上部に横のヘラ磨き 矣下部は小きざみな横のヘラ磨き，矣部に横のヘラ削り痕あり，内面縦のヘラ磨き 脚部外面縦のヘラ磨き，内面ヘラなで，柚部には横なで。
〃	—25	〃	〃	15.5	11.2	9.5	〃	内黒 外黄褐色	柚部十欠く	立ち上がり部にて一旦肥厚して口縁は内面に曲面を持たせて外に開き口唇にて外反する脚は直線的に開いてやや開きを大きくして柚部を作り，底部は水平である。	坏部外面及び口唇内面は横の小きざみなヘラ磨き，内面体部は縦の小きざみなヘラ磨き，脚部外面縦のヘラ磨き内面ナデ柚部内外とも横ナデ
〃	—26	〃	〃		10.7	(6.5)	大きな長石所々	淡黄褐色 内黒	脚部と坏一部	直線的に外に開く脚部は内面に明瞭な稜を持って水平に柚部となる。柚部内面は内傾する。	外面縦のヘラ磨き 内面なで
〃	—27	〃	〃		10.5	(6.8)	長石 石英	淡黄褐色	脚部と坏部の下半部	脚部は矣部にてふくらみを持ち短い柚部は内面水平となる	坏部外面横の小きざみなヘラ磨き，内面やや斜のヘラ磨き，脚部外面縦のヘラ磨き，内面なで柚部内外横なで。
〃	—28	〃	〃		14.5	(5.2)	長石かなりと石英	明黄褐色	脚部十	柚部は長く端面は上がっている。	内外ともなで
〃	—29	〃	〃		10.3	(4.4)	ち密	赤褐色	脚部	脚部は短く柚部は薄くなっている。	外面縦のヘラ磨き 内面ヘラなで 柚部内外横なで
〃	—30	〃	〃			(4.4)	長石	内黒 脚外褐色 内黒褐色	脚の一部と坏の一部		外面縦のヘラ磨き 内面なで
〃	—31	〃	〃		5.9	(6.8)	長石多	内黒 黄褐色	脚部と坏の一部	脚部はあまり開かない，わずかに外に開かして柚部としている。	内外面ともなで
〃	—32	〃	〃			(7.4)	長石・石英	内黒 淡黄色	〃	〃	外面縦のヘラ磨き 内面なで
〃	—33	水瓶	須恵	24.0		(35.4)	ち密	外暗青色 内淡青色 自然釉	多量の破片あるも図上復元	口縁は短く強く口唇は外反し上端は外に面をつくる。胴部は上半部に最大径を持つ。	胴外面叩き目 内面一部青海波残してなでを行う。
〃	—34	〃	〃	28.0		(11.5)	〃	灰白色 自然釉あり	十	内屈ぎみに外に張る口縁は強く外反して口唇に至る。頸部に明瞭な接合痕残す。	ロクロ整形ののち頸部内外に横のヘラなでを行う。 胴部の内面には青海波あり。
1号住	15—1	甕	土師	31		(20)	雲母わずか ち密	黒褐色	上半部十ほど	大形の甕で胴上半部に最大径をつくる，口縁は短く外反する，口唇上端はやや外傾する	口縁内外とも横なで 胴部外面上部斜位，下部縦の細かいヘラ削り。 内面上部は横のヘラ削り下部はヘラなで。
〃	—2	〃 (鳥帽子)	〃				雲母と長石大きなものわずか	黄褐色	胴部十	器厚は上部に行くに従い減じる。外面凹凸はげしい。	外面ハケ調整 内面ヘラ削りのち横なで
〃	—3	〃	〃	17		(11)	大きな長石	〃	上半部十	口縁は短く口唇は肥厚する胴部はわずかに外に開く	口唇内外とも横なで 外面縦の内面横のハケ調整

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
1号住	15—4	坏	土師		7	(1.7)	長石	赤褐色	＋	上げ底の底部からやや内湾して立ち上がり強く外に張る。	右回転のロクロ利用で回転糸切りの切り離し技法。内外とも整美な凹凸持つ。
〃	—5	高台付坏	須恵	19.0	14.0	6.3	〃	灰白色	＋強	やや下がる底部から屈曲して立ち上がる体部は央部でやや内弯し口唇は肥厚する。 高台は高くほぼ直立し端面は内傾する。	左回転のロクロを用いて切り離し後底部は回転ヘラ削りされる。高台貼付後側面に横なでを施すなでは体部下部，底部にまで及ぶ。
2号住	16—1	甕（鳥帽子）	土師	26.0		(28.0)	長石，石英わずか	赤褐色	＋	長胴形の胴部はゆるやかな凹凸をみせ口縁は外反する。	口縁内外横なで 体部は細い縦のヘラ削り 内面は上半部ヘラなで，下半部横ないし斜のハケ調整。
〃	—2	坏	〃	12.8	6.2	4.6	砂粒多くザラザラ	白黄褐色	完形	平担な底部から屈曲して立ち上がる体部は央部でやや内弯するがほぼ直線的に外に開く。	左回転のロクロによる回転ヘラ切りの切り離し後底部縁辺を手持ちのヘラで削る。体部下端は回転ヘラ削り。
〃	—3	高台付坏	須恵	14.6	11.3	3.6	長石かなり	暗灰色	底部＋体部半分	高台は薄くて低い。強い外反をみせ内面に稜を持つ。 下げ底の底部はやや厚く，立ち上がりは丸味を持ちやや内湾ぎみに外に開く。	左回転のロクロ利用をして底部回転ヘラ切りで切り離される。その後周囲を回転ヘラ削りしている。 高台貼付後側面に横なで施す。
4号住	21—1	甕（鳥帽子）	土師	20.8	9.5	32.3	長石，石英わずか	白黄褐色	底部欠＋約＋	鳥帽子形のカメで口縁部に最大径。外反する口縁部は肥厚して，肩はゆるやかな張りをみせ底部付近にて急激に収束する。	口縁内外横ナデ 胴部外面縦のヘラ削り 胴部内面は上部にては縦下部は横のハケ調整。
〃	—2	〃	〃	14.8		(14.5)	砂粒多し	赤褐色 口縁部黄褐色	上半部＋	鳥帽子形のカメと思われ最大径は口縁にくる。口縁は外反し，胴上部に稜を持つ。器厚はほぼ一定。	口縁内外横ナデ 胴部外面縦（上→下）のヘラ削り。内面なで
〃	—3	〃	〃	15.4		(15.7)	長石多し	赤褐色	口縁わずかに欠下位＋	口縁はゆるやかに外反する。頸部からゆるやかに張る胴部は胴央やや上部にて最大径となる。	口縁内外横なで 胴部外面縦（上→下）の短いヘラ削り。内面は斜のハケ調整
〃	—4	〃	〃	16.3		(10.2)	ち密雲母わずか	外赤褐色 内褐色	上半部＋	頸部から内屈ぎみに外反する口縁は口唇外面に丸味を持つ。稜を持つ頸部からゆるやかに張る胴部は央部に最大径を持つ。器厚はほぼ均一。	口縁内外横なで 胴部内外面なであるも内面は接合痕消しきってない。
〃	—5	甕	〃	18.1		(10.8)	砂粒わずか	白黄褐色	上半部＋強	かなり急に外反する口縁は肥厚し，口唇外面に丸味を持つ。胴部上半部に最大径を持つ。	口縁内外横なで 胴部内外面なで
〃	—6	蓋付坏	須恵	9.8	3.5	3.7	長石，石英わずか	暗灰色	完形	平担な底部は厚く，ゆるやかに内湾して立ち上がり，器厚は徐々に減じる。受部下に沈線を持つ。 口縁はかなり内傾し，やや内弯する。	右回転ロクロを用い，回転ヘラ切りで切り離されたのち底部回転ヘラ削り。 体下部回転ヘラ削り
5号住	25—1	甕	土師			(12.3)	長石わずか 雲母	外面褐色 内面黄褐色	胴部＋	底部に近いものと思われる，器厚は一定していない。	外面は縦のヘラ削り。 内面は横ないし，斜位のヘラなで。上部はなで
〃	—2	〃	〃			(14.0)	大きな長石多し	白黄褐色	胴部＋	器厚一定していない。	内外面ともなで 接合痕消し切ってない。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
5号住	25－3	甕	須恵		10.8	(9.8)	ち密	灰白色内面下部に自然釉あり	胴下半部 $\frac{1}{2}$	平担な底部から立ち上がった胴部はやや内湾しながら外に張る。内面に凹凸あり。	紐積整形のあと，叩き目を施し，下部はなでで消している。内面青海波あり。
〃	－4	蓋付坏	〃	11.2	4.1	4.0	〃	暗青色	$\frac{1}{4}$	平担な底部から内湾して立ち上がる体部は央部にて稜を持つ。内面に幅広なロクロ痕あり，内傾する口縁は央部にて反りやや直に近くなる。	左回転ロクロ利用，回転ヘラ切りりののち底部回転ヘラ削り。体部下部回転ヘラ削り。
6号住	27－1	甕	土師	13.5		(8.7)	長石わずか雲母多し	赤褐色	上半部 $\frac{1}{4}$ 強	ゆるやかに外反する口縁は内面に丸味を持つ，胴上半部にわずかな肩を持つ胴部は急激に収束すると思われる。	口縁内外横なで 胴部外面は縦の内面は横のハケ調整。
〃	－2	〃	〃		6.5	4.0	長石多し	白黄褐色	底部と下半部 $\frac{1}{2}$	平担な底部から内湾して立ち上がる。立ち上がり部の器厚は厚い。	内外ともなで。 底部内面にはヘラ磨き 。 底部は一定方向の小きざみなヘラ磨き。
〃	－3	坏	〃		8.0	(3.2)	細かい長石，石英わずか	赤褐色	底 $\frac{3}{4}$ 体 $\frac{1}{2}$	平担な底部から内屈して，立ち上がる体部は除々に器厚を減じる。	底部はヘラ削りののちヘラ磨き体部内外面は小きざみなヘラ磨き。
〃	－4	〃	〃	15.8	丸底	5.1	長石	内黒。一部赤褐色なすも黒褐色	$\frac{3}{4}$	丸底の底部からゆるやかに内湾して立ち上がり，ほぼ直線的に外に開き口唇はわずか外反する。	口唇内外とも小きざみなヘラ磨き，体部外面横ないし斜の細いヘラ削り。内面横主体のヘラ磨き。
7号住	30－1	甕 (鳥帽子)	土師	23.4		(12.8)	雲母・長石わずか	黄褐色	上半部から口縁	肥厚する口唇はやや強く外反し上端は外傾する。	口縁内外横なで。 内面頸部横のヘラ削り。 他は内外ともなで行うも接合痕消し切っていない。
〃	－2	甕	〃	14.2		(7.2)	細かい長石，石英	赤褐色	〃 $\frac{3}{4}$	口唇は極端に薄くなり，強く外反する。最大径は胴上半部に持つ。	口縁内外横なで。 胴部外面なで，内面横のヘラなで。
〃	－3	〃	〃	11.7		(6.4)	長石わずか	外褐色 内黄褐色	〃 $\frac{1}{4}$	やや肥厚する頸部から口縁は外反し，口唇はやや内そぎとなる胴部は直線的に強く外に張り最大径に至る。	口縁内外なで。 胴部は外面縦ないし斜位の内面横のハケ調整。
〃	－4	〃 (鳥帽子)	〃		9.0	(14.3)	雲母・長石わずか	赤褐色	底部から胴央部 $\frac{1}{2}$	上げ底の底部から内湾して立ち上がる胴部は凹凸あるもほぼ直線的に外に開く。器厚は一定せず立ち上がり部薄い。立ち上がりは明瞭でない。	底部は手持ちのヘラで削るも中央部まで達しない。胴部は縦のヘラ削りで底部付近は斜位となる。内面はなで接合痕消し切っていない。
〃	－5	甕	〃		6.5	(2.0)	大きな長石多し	黄褐色	底部	お厚い底部から急に器厚を減じ強く外に張る。	内外面ともなで
〃	－6	〃	〃		8.1	(4.0)	長石	外黒褐色 内赤褐色	〃	木ノ葉底 わずかに内屈して立ち上がる胴部やや内湾して外に開く。	内外面なで
〃	－7	〃	〃		6.9	(3.4)	長石多石英わずか	外赤褐色 内黒褐色	〃	ほぼ一定した器厚を保ち，内湾して立ち上がる。	底部は4回で1周するヘラ削り行うも中央まで達しない。胴部外面斜位のヘラ削り，内面横のヘラなで。
〃	－8	〃	〃		8.8	(8.1)	長石，石英わずか	赤褐色	底部から胴下半部 $\frac{1}{4}$	器厚は一定せず，立ち上がり部はお厚く内面に丸味を持つ。	内外面ともなで。 下端には指頭あり。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
7号住	30－9	甕	土師		6.9	(3.8)	雲母・長石	外黒褐色 内白黄褐色	底部	木ノ葉底でヘラ削り 体部下端は直立したのち内湾しながら外に開く。	内外面ともなで 底部はヘラ削りするも上げ底のため中央部まで達しない。 粘土くずが体部にはみ出る。
〃	－10	高台付坏	須恵	12.4	18.7	3.4	ち密	暗青色	＋	高台は内傾して，端面も内傾する。やや厚い底部は下げ底となる。立ち上がりは外面に稜をもち直線的に開く。	右回転のロクロ用いる。底部切り離し技法は不明，回転ヘラ削り行う。高台貼付後横なで，底部，体下部にまで及ぶ。
〃	－11	坏蓋	〃	15.8		3.7	長石わずか	灰白色	完形	丸味を持つ天井部は端にてやや外反した後内傾する口縁は内横の端面を持つ。	右回転のロクロ， 天井部回転ヘラ削り， 縁貼付後，端面を横なで。
〃	－12	短頸壺	〃	9.5		(6.4)	ち密	外黒緑色 (自然釉) 内暗灰色	下半部を欠＋	ロクロ回転不明	頸部から直線的に開く胴部は上半部に最大張を持つ。短い口縁は強く外反し上端は外傾する。
〃	31－13	長頸壺	〃			12.1	〃	灰白色	口唇を欠く口頸部	ロクロ回転不明	口縁立ち上がり部に段を持ち，器厚を減じながら内屈しながら外に開く。二段整形である。
8号住	34－1	甕 (鳥帽子)	土師	19.7		(14.2)	長石多し	赤褐色	口縁から胴上半部＋	なで肩の胴部からやや肥厚する頸部をへて短い口縁は器厚を減じて外反する，頸部下に稜を持つ。	口縁外面横なで，胴部外面は斜位のヘラ削り。 内面はなで行う。
〃	－2	甕	〃		5.9	(7.1)	〃	黄褐色	底部から胴下半部	平担な底部から直線的に立ち上がる胴部は内面に曲面を持つ。矣部にてやや直に近くなる。	内外面ともなで
〃	－3	〃	〃		6.5	(4.0)	大きな長石多し	赤褐色	〃	強く外に張る胴部は下端にてやや外反する。	内外面ともなで
〃	－4	坏	〃	14.9	9.6	4.0	ち密	外赤褐色 内黒	底部＋ 体部＋	丸底ぎみ底部から直線的に外に張る体部は矣部から外反して口唇に至る体部は肥厚し外湾する。外面立ち上がりは明瞭でないが内面ははっきりしている。	外面なで 内面横の小きざみなヘラ磨き。
〃	－5	〃	〃	13.2	丸底	3.8	細かい長石，石英わずか	外面底部赤褐色 他は黒色研磨	＋	丸底の底部から内湾して立ち上がる口縁は内屈して直線的に外に開く。	底部細いヘラ削り，屈曲上部外面には横のヘラ磨き，他は横の小きざみなヘラ磨き。
9号住	37－1	甑 (単孔)	土師	23.6	8.5	34.8 (推定)	長石 石英	黄褐色	十	内湾して立ち上がる胴部はほぼ直線的にわずかに外に開き把手上部より直立して内屈ののち外反する。把手は上部が内屈する。 器厚は一定していない。	口縁内外横ナデ 胴上半部は斜位，下部は縦のヘラ削りののちかるいヘラ磨きを行う。 内面も同様である。 孔の内側はヘラ削り。
〃	－2	小形甕	〃	11.0	7.2	13.2 (推定)	大きな長石含む	黄褐色	底部欠＋	頸部からゆるやかに外反する口縁は口唇上端は水平となる胴はあまり張らない。	全体になで調整 内面頸部は横のヘラ削り，胴下部外面は縦のヘラ削り痕あり。
〃	－3	甕	〃	15.0		(10.4)	長石・雲母	黒褐色	口縁から胴上半部	器形はゆがんでいる。口縁は波打っている。なで肩である。	口縁内外横なで 胴内外面はなで調整 内面胴央は横のヘラ削り。
〃	－4	〃 ?	〃	14.7		(5.5)	〃	赤褐色	口頸部＋	直立する口縁は口唇部にて外反する。口縁は波打つ。	外面に一部縦のヘラなであるも全体になで

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
10号住	40—1	甕	土師	14.6		(8.8)	雲母・細かい長石	外赤褐色 内黒褐色 内外とも炭化物付着	L縁から胴央部十	ほぼ一定した器厚を保つ。口縁は直線的に開き内面に接を持つ。胴は張らない。	口縁外面なで内面横のヘラなで 胴部外面は縦の内面は横ないし斜のハケ調整。
〃	—2	高台付坏	須恵	14.4	10.2	4.0	細かい長石，石英	暗灰色	底部欠十	高台は端部にて張りを持ち内傾している。接合部はかなりくい込む。下げ底ぎみの底部からやや屈曲して立ち上がる体部は内湾し口唇に至る。口唇は内そぎとなる。	ロクロ回転方向は不明，高台貼付後側面横なで。
〃	—3	〃	〃		10.0	(2.5)	ち密	灰色	口縁欠十	やや厚めの底部は央部が下がる。体部は明瞭に屈曲する。高台は外に張り底部は内傾する。	ロクロ回転方向切り離し技法不明底部回転ヘラ削り行う。高台貼付後横なで。
〃	—4	〃	〃	14.4	10.5	4.0	細かい長石	暗青色	底部央部欠十	やや下げ底の底部から明瞭な屈曲を持って立ち上がる体部はやや内湾しながら開く。高台は厚く外に強く張り底部はやや内傾してわずかにくぼむ。	ロクロ回転方向，切り離し技法は不明，底部回転ヘラ削り，高台貼付後側面横なで。
〃	—5	坏蓋	〃	16.9		(2.3)	ち密	灰白色	十	厚い天井部から除々に器厚を減じ，端部にて外反し口縁は直立する。端部は丸い。	ロクロ回転方向不明 天井部回転ヘラ削り。
11号住	43—1	甕	土師	11.2		(9.2)	雲母・細かい長石	赤褐色	口縁から胴上半部十	器厚はほぼ一定し，口縁は外反する。胴部はなで肩である	口縁外面は横なで，胴内面はハケ調整。胴外面は斜位のハケ目内面は横のヘラなで。
12号住	46—1	甕	土師	26.1		(6.8)	大きな長石多し	外黄褐色 内赤褐色	口縁から胴上半部十	胴部はほぼ一定した器厚を保つ。口縁は肥厚して直線的に強く外に開く。	口縁外面なで，内面横のハケ調整胴部外面斜位のハケ調整，内面なで。
〃	—2	坏	〃	15.9	8.9	3.4	細かい長石	内黒 外褐色	底部欠十	平坦と思われる底部から屈曲して立ち上がる体部は内湾ぎみに開き，口唇はわずかに外反する。	内外面小きざみな横のヘラ磨き。
13号住	49—1	甕	土師	15.5		(11.5)	長石わずか	外褐色 炭化物付着 内白黄褐色	胴下半部欠十	器厚はほぼ一定し，短い口縁はわずかに外反する。頸部からゆるやかにふくらむ胴部は央部にて最大径となり急速に内傾する。	口縁内外なで 頸胴部内外は縦のヘラ削り。
〃	—2	〃	〃		7.7	6.8	長石多し雲母わずか	外黄褐色 内白黄褐色	胴下半部十	胴部の立ち上がりははっきりしない。胴部は直線的に開く器厚は一定せず内面に凹凸いちじるしい。	外面縦のハケ調整 内面なで 内面立ち上がり部指頭痕あり。
〃	—3	〃	〃		12.0	(5.8)	大きな長多し	外黒褐色 内黄褐色	底部から胴下部一部十	平坦な底部から器厚を半減して立ち上がる胴部は直線的に開く。立ち上がりは内外とも明瞭である。木ノ葉底。	外面ハケ調整 内面なで
〃	—4	〃	〃		7.1	(3.5)	長石・雲母わずか	黄褐色	底部胴下部十	央部が極端にくぼむ底部から直立する胴部は外に開く。	内外ともなで
〃	—5	〃 坏	〃		7.4	(2.4)	ち密	明黄褐色	口縁欠十強	上げ底の底部から内湾して立ち上がる体部は器厚を除々に減じて外に張る。	ロクロ回転方向不明 回転糸切技法の切り離し。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
13号住	49—6	坏	土師	12.2	5.5	3.7	ち密	内黒 外黄褐色 一部黒褐色	全	上げ底の底部から内湾して立ち上がる体部は外に開き口唇は外反する。	ロクロ回転方向は右。 切り離しは回転糸切り。
〃	—7	坏蓋	須恵	16.4		4.0	〃	灰青色 外自然釉あり	全	器高は高く口縁部も長い。 天井部は丸く口縁立ち上がり部に回線と稜を持ち，口縁は直線的にやや外に開く底端部は角度の強い内傾を示す。器厚はほぼ一定する。	ロクロ回転方向不明
14号住	53—1	水瓶	須恵			(17.5)	ち密	灰白色 外面自然釉あり	口唇欠 胴上半部まで 全	大形の水瓶と思われ，胴下半部あるも接合しない。 頸部から直線的に開く口縁は上部にて外反する。	口縁ロクロなで 外面叩き目施す，内面は青海波あり。
〃	—2	〃 (鳥帽子)	土師		12.2	(16.4)	長石石英多し	外黒褐色 内白黄褐色	底部全 胴 全	厚い平坦な底部からやや内弯して立ち上がる胴部回凸あるも直線的に開く。外面立ち上がり直角となる。 木ノ葉底。	胴外面ハケ調整，下端は縦のヘラ削り。 内面なで。
〃	—3	高台付坏	〃	15.3	10.3	4.0	長石多し (大きものあり)	赤褐色	口縁わずかに欠く	非常に雑な作りである。 高台ずれて貼付されており，高台はつぶれ込んでいる。 口唇はわずかに外反する。	右回転のロクロ利用。静糸の糸切りによって切り離されたのち縁辺部回転ヘラ削行う。 高台側面横なであり。
〃	—4	〃	須恵	15.2	11.6	3.8	ち密	灰白色	底部全 体部 全	底部中央部は外面が厚くなり下げ底となる内面はわずか内湾する。体部は内面に明瞭な立ち上がりをみせ内湾しやや直に向きをかえて口唇に至る。高台は厚く台形を呈し，底部は丸味をもって内形する。	右回転のロクロ利用，底部周辺には回転ヘラ削りが行われる，切り離しは回転ヘラ切りと思われるがはっきりしない。 高台側面横なで。
〃	—5	坏 (底部穿孔)	土師	12.5	7.1	3.7	ち密	内外灰色 体部底部 内外黒灰色 底部内面 炭化物付着	口縁一部欠く	やや上げ底の底部から直線的に外に開く体部は央部上に強いシメある。 焼成後底部に楕円形の穿孔。	ロクロ回転方向不明 底部はヘラ削り
15号住	56—1	甕	土師	16.8		(4.5)	長石多し (大きなものあり)	白黄褐色	口頸部全	口縁は短く強く外反する，口唇下に稜を持ち口唇はかなり外傾する。 稜を持って胴部は開く。	口縁横なで 胴部なで
〃	—2	坏	〃	16.5		(4.7)	細かい長石，石英	赤褐色 口縁外と内面黒色研磨	底部欠全	内湾する体部は央部から直立し，口唇はやや内傾する。	内外とも小きざみな横ヘラ磨き
16号住	59—1	甕 (鳥帽子)	土師	16.2		(16.9)	細かい長石，石英	褐色	胴下半部欠 全	直線的に開く口縁は口唇がわずかに外反し，上端は外傾する。ほぼ一定の器厚を保つ胴部はゆるやかに内湾し，央部最大径を経て器厚を増して底部に至る。	口縁内外横なで 胴部外面縦のヘラ削り 内面ハケ調整
〃	—2	〃	〃	19.4		(13.2)	〃	外赤褐色 内黒褐色 一部黄褐色	胴下半部欠 全	胴部はゆるやかにふくらみ頸部にてやや肥厚して口縁は除々に器厚を減じて口唇は外反し，上端は外傾する。	口縁なで 胴部ハケ調整
〃	—3	〃	〃	15.4		(9.2)	細かい長石と雲母	口縁と上半部完	口縁内外黄褐色 胴内外黒褐色	ほぼ一定した器厚を保つ。 口縁は強く外反し，上端は外傾する。	口縁横なで 胴部なで

出土場所	掛図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
16号住	59－4	甕	土師		8.2	(5.7)	長石わずか・雲母	外褐色 内黄褐色	底部と胴下部	厚い底部からほぼ直立したのち内湾して外に開く。器厚は除々に減ずる。内面立ち上がり部は曲線を描く。	内外ともなで。
〃	－5	高坏	〃		6.7	7.4	長石	外黄褐色 内白黄褐色 内黒	脚と坏部の一部	柚は広がらず外湾する。	内外ともなで。
18号住	62－1	甕(単孔)	土師	23.2	9.5	24.3	細かい長石わずか	外褐色 内黒褐色 内面炭化物付着	口縁を半分欠く	口縁は肥厚し口唇は外反する。口縁は波状である。凹凸のある胴部はゆるやかに内湾して胴下半部が内傾する。口縁は平坦でない。	口縁内外ハケ調整 外面頸部は横のヘラ磨き，胴外面は縦の小きざみなかるいヘラ磨き，内面は縦のヘラ削り 孔内側は丹念なヘラ削り
〃	－2	小形甕	〃	11.0	5.2	11.5	細かい長石，石英	黒褐色	完形	口縁は短く所によって口唇が外反するところもある。口縁は平坦でない。胴部は凹凸激しく，胴下半部に最大径を持ち，立ち上がり部は内屈している。	粗雑な作りである。全体に指頭痕を残し簡単ななであり，胴央部外面の一部に斜位のヘラ削りあり。外面胴下部には縦のヘラ削り，内面には部分的に横のヘラ削りあり。底部同方向の数回のヘラ削り
〃	－3	甕	〃	17.0		(10.5)	細かい長石わずか	黄褐色	口縁 1/4 胴上半 1/4	口縁は内面に稜を持つ頸部からかなり外反する。器厚は口唇に行くに従いうすくなる。口唇上端は外傾する。胴部は一定した器厚を保ち内湾しながらゆるやかに開き上半部に最大径を持つ。	口縁内外には横なでが行われ，外面には嘴文状の縦のヘラ削りあり，胴部外面は横のかるいヘラ磨き，内面頸部と央部には横のヘラ削りある。
〃	－4	坏	〃	13.5	丸底	5.3	ち密	底部外面赤褐色他は黒色研磨	1/4	内湾する体部は外面にわずかな稜を持ち，口縁は直立する。口唇はやや内そぎで端部は水平である。	内外とも小きざみヘラ磨き底部外面にはヘラ削り痕あり。
〃	－5	高坏(内黒)	〃			4.8	長石	外面赤褐色・内黒研磨	脚柚部欠 坏口縁欠	口縁形態，柚部形態不明	坏内面小きざみヘラ磨き，坏部外，脚部内外ともなで

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
20号住	65—1	甕	土師		6.0	(5.4)	長石・雲母	外白黄褐色・内黄褐色	底部から胴下部	厚い底部から器厚を半減して外面は直に立ち上がり，体部はやや内湾して外に開く。	内外面なで 底部なで
〃	—2	坏(埦?)	〃	7.5	4.4	5.4	長石と雲母	内外白黄褐色	口縁部は$\frac{1}{4}$あり	口径のわりに器高が高く口縁は直立して坏としては埦に近いものである。	内外ともなで 内外面下部は軽いヘラ磨き。 底部はなで
〃	—3	坏(高坏?)	〃	12.3		(4.4)	細かい長石と雲母	内外黒色外下部淡黄褐色	$\frac{1}{4}$	丸底と思われる底部から内湾して立ち上がった体部は口縁にて外反する。	口縁内外とも横のヘラ磨き 内外体部は小きざみなヘラ磨き
〃	—4	坏	〃	6.8		(4.2)	ち密	底部のぞき内外とも黒色	$\frac{1}{4}$	丸底と思われ口縁はわずかに肥厚して直立する。	内外とも小きざみな横のヘラ磨き。 外下部にヘラ削痕残す。
〃	—5	〃	〃	7.0	丸底	5.1	雲母	内面黒色外面淡黄褐色一部口縁黒色	$\frac{1}{8}$	厚い作りで口縁はやや器厚を減じ直立する。	口縁内外横のヘラ磨き 他は内外とも小きざみな横のヘラ磨き 口縁外面ヘラ削り痕あり。
〃	—6	蓋付坏	須恵	10.8	5.4	5.7	長石わずか	青灰色	口縁わずかに欠く。	口径のわりに器高の高いもので底部は厚い。口縁はやや内屈ぎみに内傾する。 口唇内面に回面をつくる。	右回りのロクロ使用 底部は回転ヘラ削り行い体部は3回にわたる回転ヘラ削りしている。
〃	—7	坏蓋	〃	14.3		5.3	〃	外灰色内縁灰色	完形	厚い天井部はやや凹み外面に明瞭な稜をみせ内湾して口縁に至り，口縁は内傾する。 端部は内傾する。	天井部央部まで回ヘラ削りあり。
〃	—8	高坏	土師	12.5	9.7	9.3	ち密	内面黒色外面淡黄褐色口縁部分的に黒色	坏部$\frac{1}{4}$欠軸部わずかに欠く。	内湾して立ち上がる坏部は央部にて屈曲しやや外反ぎみに外に開く。 脚部は内面に段を持つ。	坏部外面口縁は横のヘラ磨き 他は小きざみな横のヘラ磨きで下部はヘラ削り痕残す。 脚部外面縦のヘラ磨き内面なで。軸部内外とも横なで
〃	—9	〃	〃		10.7	(7.4)	大き長石石英わずか	坏部内黒外面淡黄褐色	坏部下部と脚部	坏部はかなり外に張る。 軸部は薄くなり張りは強い。	坏部内面は小きざみな横ヘラ磨き外面はなで 脚部は8に同じ
〃	—10	〃	〃		8.8	(7.2)	大きな長石と雲母	淡黄褐色	脚部$\frac{1}{4}$	脚部は軸部が急に張り出す。	外面縦のヘラ磨き，内面なで。 軸部外面横なで内面横のヘラ削り。
〃	—11	〃	〃		11.3	(7.1)	長石	黄褐色	脚部	脚部はややふくらみ軸部は強く張る。	外面軽い縦のヘラ磨き，内面なで，軸部外面横のヘラ磨き，内面横なで。
〃	—12	〃	〃		10.2	(6.6)	長石，石英雲母	淡褐色坏内黒色	坏一部と脚部	軸部にて強く広がる。	外面小きざみなヘラ磨き，内面縦のヘラ削り，軸部内外横なで。
〃	—13	〃	〃		10.5	(6.1)	〃	淡黄褐色	脚部$\frac{1}{8}$	厚い脚部は軸部にて器厚を減じる。	外面縦の軽いヘラ磨き，内面なで。 軸部内外横なで。
〃	—14	〃	〃			(3.7)	雲母	〃	脚と坏部の一部	坏部は器厚を減じて内湾して立ち上がる。	脚外面縦のヘラ磨き。 坏外面ヘラ削りのあとなで内面なで。
〃	—15	〃	〃			(4.7)	長石	坏内面黒色，外面淡黄褐色	〃	〃	坏内面小きざみな横ヘラ磨き，外面なで。 脚外面縦のヘラ磨き。
〃	—16	〃	〃			(2.5)	砂粒	内面白黄褐色 外面淡黄褐色	〃	〃	内外ともなで。
21号住	68—1	甕	土師	26.8	6.8	26.4	やや大きい長石・石英	淡黄褐色	ほぼ完形	底部は小さく台付甕に近い。底部からほぼ横に張る胴部は央部にて最大径を持ち口頸部は短かく開くなって外反する。凹凸が激しい。	外面部分的にヘラ削り。 内面ハケ調整。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
21号住	68—2	壺	土師	19.7	6.9	27.5（推定）	長石・石英わずか	白黄褐色	胴央部欠き図土復元	底部は小さく台に近い。底部から強く張り出した胴部は央部にて最大径を持ち球形にふくらみ，口縁は直線的に強く外に開く。	内外面なで。胴外下部ヘラ削り部分的にあり。体部下部に極端に薄い所がある。
〃	69—3	甕	〃	22.8		(14.4)	大きな長石と石英	外白黄褐色・内赤褐色	口縁と胴上半部（$\frac{1}{3}$）	器厚は一定していない。最大径は上部にあり，口縁は直線的に外に開く。上端は外傾する内面に明瞭な稜を持つ。	口縁内外横なで，胴外面たてのヘラ削り。内面頸部下と央部に横のヘラ削りあるもなで。
〃	—4	〃	〃	15.8		(7.7)	〃	外明黄褐色 内暗褐色	口縁と胴上部$\frac{1}{3}$	直線的に開く胴部から器厚を減じ直線的に外に開く口縁は口唇外面に段を持つ。	口縁内外横なで。胴内外かる斜位のヘラ磨き。
〃	—5	〃	〃	14.9		(9.7)	石英・雲母	黒褐色	〃 $\frac{1}{3}$	器厚は一定せず頸部は，わずかにつぼむ程度である。内面には稜を持つ。	口縁内外横なで。胴外面横ないし，縦のハケ調整内面ヘラ削り上部はヘラなで。
〃	—6	〃（鳥帽子）	〃	16.9		(17.4)	大きな長石・雲母	外赤褐色 内黒色	口縁と胴上半部$\frac{1}{3}$	胴部は長く央部付近に最大径を持ち頸部に段を持つ。口縁は内屈しながら外に開き口唇は外反し上端は外傾する。	口縁内外横なで。胴内外とも方向一定しないハケ調整。
〃	—7	甕	〃	18.4		(10.4)	大きな長石と石英	暗赤褐色	口縁と胴上部$\frac{1}{3}$強	ほぼ一定した器厚を保つ。胴部はかなり強く張る。口縁は長く直線的に外に開き口唇はわずかに外反する。上端は外傾する。口縁の立ち上がりは明瞭である。	口縁外面は横なで。内面はなで。胴外面はヘラなで，内面は頸部下に横のヘラ削り下部はなで。
〃	—8	〃	〃	17.7		(10.4)	長石多し石英わずか	外灰褐色 内黒褐色	口縁と胴上半部	ゆるやかに張る胴部から段を持ち器厚を減じて口縁は外反する。上端は外傾する。	口縁内外横なで。胴外面軽いヘラ磨きで，央部にヘラ削り痕あり。内面なで。
〃	—9	〃	〃	20.0		(12.8)	長石かなり	黄褐色	口縁と胴上半部$\frac{1}{3}$	全体に器高が低く鉢に近いものである。胴部はゆるやかにふくらみ上部に最大径を持つ。口頸部は短く外面は直立する。頸部に段を持つ。	口縁内外横なで。胴外面は斜の軽いヘラ磨き，内面なで。
〃	—10	〃	〃	13.6		(6.7)	大きな長石と石英雲母	外白黄褐色・内黒褐色	口縁と胴上部$\frac{1}{3}$	かなり外に張る胴部は最大径を持ち，口縁は外面を肥厚させ直線的に外に開き上端は外傾する。	口縁外面横なで。他はハケ調整。
〃	70—11	〃	〃	15.1		(8.5)	石英粒と長石	外黄褐色 内黒褐色	口縁と胴上部$\frac{1}{3}$	胴部の張りは強いと思われる。口縁はやや肥厚して内湾ぎみに外に張り，上端は外傾する。最大径は胴部。	口縁内外は横なで。胴部内外はなで。
〃	—12	〃	〃	16.8		(8.8)	大きな長石と石英	暗褐色	〃 $\frac{1}{3}$	器形は11と同じで口唇は外反する。最大径は胴部。	口縁内外は横なで。胴部外面はかるいヘラ磨き，内面はヘラなで。
〃	—13	〃	〃	13.2		8.7	〃 雲母	外赤褐色 内暗褐色	口縁と胴上半部$\frac{1}{3}$強	胴はなで肩でほぼ一定する。器厚は口唇にて薄くなりわずかに外反し上端は外傾する。	口縁内外横なで。胴部はハケ調整，内面は方向一定しない。
〃	—14	〃	〃	11.9		(9.7)	石英・長石・雲母	外褐色 内暗褐色	口縁と胴上半部$\frac{1}{3}$	口頸部は短くわずかに外反する最大径は胴部にあるがあまり張らない。器厚はほぼ一定する。	口縁内外横なで。胴外面斜位のヘラケズリ内面なで。
〃	—15	〃（鉢？）	〃	14.3		(9.8)	石英・長石	白黄褐色	底部を欠いて$\frac{1}{3}$	甕というより鉢に似ている。口唇は器厚を減じて外反する。	内面頸部に横のヘラ削りあるが全体になで。
〃	—16	甕	〃		丸底	(7.7)	大きな長石	明褐色 内黒褐色	胴下部と底部	丸底でふ厚く直立して胴部は立ち上がる。	内面ともなで。底部外面ヘラ削り痕ある。内面横のハケ調整。
〃	—17	〃	〃		6.4	(4.3)	石英・長石わずか	外黄褐色 内黒褐色	〃	胴部は内湾して立ち上がり器厚を減じて外に強く張る。	内外軽いヘラ磨き。底部ヘラ削り。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
21号住	70—18	甕	土師		8.4	(4.9)	石英・長石・雲母	白黄褐色	胴下部と底部 1/2	上げ底の底部からわずか直立したのち内湾して外に開く。わずかに木ノ葉痕残す。	内外ともなで。
〃	—19	〃	〃		6.4	(4.7)	長石・雲母	外明褐色内黄褐色	〃	台付甕と思われる。	内外・底部ともかるいヘラ磨き
〃	—20	〃	〃		6.4	(3.7)	大きな長石・石英	灰白色	〃	わずかな上げ底からやや屈曲して内湾して外に開く。	内外ともハケ調整。方向は一定しない。底部はなで。
〃	—21	〃	〃		5.7	(2.8)	長石多し	白黄褐色	〃 1/2	底は平担でない。屈曲したのち内湾して立ち上がる。	なで
〃	—22	甑(多孔)	〃	16.7	12.1	6.1	細かい長石	外白黄褐色・内黄褐色	口縁1/4欠く。	凹凸あるもほぼ直線的に外に開く胴部は急激に角度を内に強めわずかに屈曲して底部をつくる。口唇は外傾する。孔は13個で不規測である。	口縁外面は横なで。胴部外面は斜位のかるいヘラ磨き。内面はなで。
〃	71—23	坏	〃	14.0	丸底	6.2	ち密	内黒色外黄褐色	1/2	厚い底部から内湾しながら強く張り出した胴部は，央部で角度をかえ口縁はやや外反する。	口縁内面は横のヘラ磨き。他は横の小きざみなヘラ磨き。外面底部はヘラ削り痕あり。
〃	—24	〃	〃	13.1	〃	6.7	大きな長石と石英	黄褐色	1/4	内湾して立ち上がる体部は直立したのち口唇は外反する。	口縁外面は横なで。他は小きざみな横のヘラ磨き。外面にヘラ削り痕あり。
〃	—25	〃	〃	12.3		(4.7)	〃	外明黄褐色・内黒色	1/2(底部欠く)	内湾して立ち上がる体部は直立した後口縁は外反する。	口縁内面横のヘラ磨き，他は小きざみな横のヘラ磨き，外面ヘラ削り痕あり。
〃	—26	〃	〃	12.8 〃	丸底	5.8	長石	外赤褐色内白黄褐色	1/2 強	凹凸しながらも外に開いた体部は直立したのち口縁はわずかに内傾してほぼ口唇は直立する。	口縁外面はなで。体部は横ないし斜位（下部）のヘラ磨き，内面小きざみな横のヘラ磨き。
〃	—27	〃	〃	13.1	丸底	5.4	細かい長石	内面と口縁外面—黒色体部明黄褐色	1/2	ほぼ一定した器厚を保ち，内湾して立ち上がったのち口縁はほぼ直立する。	口縁内外横のヘラ磨き，他は横の小きざみなヘラ磨き外面にヘラ削り痕あり。
〃	—28	〃	〃	11.4	(〃)	5.9	〃	外明褐色内褐色	1/3(底部欠く)	器高の高いものである。丸底の底部は薄く体部は直立したのち内湾して口縁は直線的に外に開く。	外面はなで下部にはヘラ削りあり，内面口縁は横のヘラ磨き，下部は小きざみな横のヘラ磨き
〃	—29	〃	〃	13.3	丸底	5.7	細かい長石・雲母	内黒外黄褐色	口縁をわずかに欠く	丸底の底部はぶ厚く外に強く張り短い体部は直立したのち屈曲して口縁は直線的に外に開く。内面はふくらみを持つ。	口縁外面なで底部はヘラ削りの後ヘラ磨き。内面は小きざみな横のヘラ磨き
〃	—30	坏	〃	14.2		(3.9)	細かい長石	内面と口縁黒色他は黄褐色	底部を欠いた 1/4	丸底と思われる底部から立ち上がる体部は屈曲して口縁は外反する。	小きざみな横ヘラ磨き，外面体底部ヘラ削り痕あり。
〃	—31	〃	須恵		7.9	(2.3)	ややあらい砂粒	灰白色	口縁欠	底部中央は凹む。内湾して体部は立ち上がり，底部との区別は明瞭でない。	左回転のロクロ利用。底部切り離しは不明，周囲を手持ちヘラで削る。
〃	—32	〃	土師	12.8		(4.2)	細かい長石・石英	内面と外面口縁黒色・明黄褐色	底部を欠いて 1/4	27に同じ	27に同じ
〃	—33	〃	〃	15.2		(4.7)	〃	外明褐色内白黄褐色	〃 1/4	30に同じ	口縁内外横のヘラ磨き，体底部内外面小きざみな横ヘラ磨き。外面ヘラ削り痕あり。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
21号住	71—34	坏	土師	14.7		(4.1)	ち密	明褐色	底部を欠いて $\frac{1}{3}$	丸底と思われれる底部から立ち上がり直線的に外に開く。	内外小きざみな横ヘラ磨き。
〃	—35	蓋付坏	須恵	12.9		(5.6)	細かい長石	暗青色	底部を欠いた $\frac{1}{3}$	底部から直線的に外に開いた体部は内屈して受部を作り口縁は内傾し口唇は強く外反する。	ロクロ回転不明。 体下部は回転ヘラ削り。
〃	—36	高台付坏	〃	11.2	8.3	(7.8)	長石・石英	青灰色	口縁・体部は $\frac{1}{4}$ のみ	高台は厚く外反し端面に凹部をつくる。 凹凸のある底部から立ち上がる体部ほぼ直線にわずか 外に開き口唇はわずかに外反する。	右回転ロクロ利用。 底部は回転糸切りによる切り離しののち周囲を回転ヘラ削り。高台貼付後側面横なで。
〃	—37	坏蓋	〃	13.9		4.8	長石	〃	$\frac{1}{2}$	天井部は丸く口縁はほぼ直立して口唇はわずかに外反し端部は外傾する。	右回りのロクロ利用。 天井部回転ヘラ削り。
〃	—38	てづくね土器	土師	4.3	3.0	3.2	石英・長石	外灰白色 内白黄色	完	やや屈曲して立ち上がる体部は外面直立する。	なで。 底部かるいヘラ磨き。
〃	—39	〃	〃	4.2	2.7	2.8 ~ 2.4	〃	暗褐色	〃	口縁は水平でない。	〃
〃	—40	〃	〃	4.5	3.5	3.0	石英	外明褐色 内暗褐色	〃	38と同じ	〃
22号住	74—1	甕	土師	15.4	7.8	20.4	長石・雲母わずか	黄褐色	完	口縁はわずかに外反する；胴部は器厚が一定せずゆるやかに頸部からふくらんで胴央部に最大径を持つ。	口縁外面横なで。胴部は斜位のハケ調整下部は斜位のヘラ削り内面なで。
〃	—2	〃	〃	14.0		(13.3)	長石・石英	白黄褐色	胴下半部欠く $\frac{1}{3}$	〃	口縁内外なで。 胴部内外ハケ調整
〃	—3	〃	〃	16.4		(8.3)	〃	外黄褐色 内暗褐色	口縁と胴上部 $\frac{1}{4}$	口縁は肥厚して外反する。頸部に段を持ち胴部内湾しながら最大径に至る。	口縁内外横なで。 胴外面かるい斜位のヘラ磨き，内面なで。
〃	—4	小形甕	土師	11.7	4.0	12.8	大きな長石と石英	白黄褐色	完	1に同じ	口縁外面横なで，胴部外面斜位ないし縦位のヘラ削り，内面は口縁ヘラなで頸部に4，5条のヘラ削り施したのち下部はなで。底部ヘラ削り。
〃	—5	〃	〃	8.5	4.7	8.5	〃	淡黄褐色	口縁 $\frac{1}{3}$ 欠く	〃	内外ともなで。 底部なで。
〃	—6	鉢	〃	12.7	5.3	9.7	あらい砂粒	黄褐色	口縁半分欠く	ぶ厚い上げ底の底部から直立したのち内湾しながら外に開く体部は口縁にてやや直立ぎみとなる。	口縁内外横なで。 胴外面ヘラ削りののちなで。 内面ハケ調整。 底部ヘラ削り。
〃	—7	甕 (壺か)	〃	11.8		8.4	大きな長石	白黄褐色	口縁から胴上半部 $\frac{1}{4}$	口縁は長目でわずかに外に開く。頸部から外に張った胴部はすぐに内傾する。	口縁外面横なで，内面なで胴部はヘラ削り。
〃	—8	〃	〃		4.9	(6.5)	長石多 石英	外黄褐色 内白黄褐色	底部から胴下部	小さな底部から内屈したのち胴部は内湾しながら外に開く	外面に一部ハケ調整あるもなで底部なで。
〃	—9	小形甕	〃	12.5	5.7	8.4	〃	外黄褐色 内褐色	口唇部半分欠	ぶ厚い底部から強く外に張り出した胴部は器厚を減じて内屈して頸部をつくり口縁は外反する。	外面にところどころヘラ削り痕ある。内外ともなで。 底部ヘラ削り。
〃	75—10	坏	〃	12.7	丸底	4.8	細かい長石わずか	内黒色 外黄褐色	完	ぶ厚い底部から除々に器厚を減じて内湾しながら立ち上がる体部は直立し口唇外面をそいで内傾ぎみとなる。	口縁内外横ヘラ磨き。 底部にはヘラ削り痕あるも小きざみな横ヘラ磨き。
〃	—11	〃	〃	13.3	〃	4.9	細かい長石・石英	〃	$\frac{1}{4}$	〃	外面下部～底部にヘラ削り痕ある。小きざみな横ヘラ磨き。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
22号住	75—12	坏	土師	10.8	(〃)	4.4	細かい長石・石英	内外とも黒色	底部欠 1/4	厚い底部から除々に器厚を減じて内湾しながら立ち上がる体部は直立し口唇外面をそいで内傾ぎみとなる。	口縁内外横ヘラ磨き。他は小きざみな横ヘラ磨き。
〃	—13	〃	〃	15.3		3.7	〃	内黒色外黄褐色	〃 1/4	内湾ぎみに外に張った体部は屈曲したのち口縁は外反する。	内外小きざみな横ヘラ磨き。
〃	—14	〃	〃	15.5		4.3	石英多長石	〃	〃	〃	〃
〃	—15	〃	〃	17.8		4.0	細かい長石	内黒色外赤褐色口縁黒色	底部欠 1/4	10に同じ	〃
〃	—16	高坏	〃	17.9		(7.8)	ち密	坏内黒色外赤褐色	坏部大半欠	脚部は央部にてややふくらみ裾は長く広がる。	坏内面小きざみな横ヘラミガキ脚部外面縦のヘラ磨き，裾部内外横なで。
〃	—17	坏蓋	須恵	13.8		(4.7)	〃	外濃緑色(自然釉)内灰色	天井部欠いた 1/4	丸い天井部から伸びて端部はわずかに外面外反し口縁はほぼ直立し，口唇は強く外反する。	ロクロ回転は不明。天井部回転ヘラ削り。
〃	—18	蓋付坏	〃	12.8	4.6	4.8	長石	外黒褐色内白灰色	1/4	上げ底の底部からほぼ直線的に伸びる体部は受部にて屈曲し，口縁は内傾し口唇部内傾する口縁は凹凸激しい。	左回転ロクロ利用 底部は回転ヘラ削り。切り離しは不明。体部下端回転ヘラ削り。
〃	—19	〃	〃	12.9	4.8	5.9	細かい長石	外灰白色内暗灰色	口縁1/4欠	底部から内湾して立ち上がる体部は屈曲したのち受け部下にて外反する。口縁は立ち上がりは内傾し口唇部はほぼ直立する端部は内傾する。	右回転ロクロ利用 底部・体部下部は回転ヘラ削り切り離しは不明である。
23号住	78—1	鉢	土師	18.3		9.4	長石・石英	外赤褐色内黄褐色	底部欠いた 1/4	口縁はほぼ直線的に外に開き口唇は丸味を持つ。頸部に段を持たせ胴部央部から急激に内湾して底部に至る。	口縁外面はなで。他は小きざみな横のヘラ磨き胴下部にヘラ削り痕残す。
〃	—2	坏	須恵	13.9	5.7	4.3	細かい長石	灰白色	完	上げ底の底部から内湾して立ち上がる体部は外面に整美な凹凸面を持って外に直線的に開く。	右回転ロクロ利用。底部切り離しは静止の糸切りによる。
24号住	80—1	鉢	土師	12.8	丸底	7.2	長石・石英多し	黄褐色内と外面口縁は黒色	完	底部は丸底でお厚い。体部は内湾しながら外に開き除々に器厚を減じ，頸部にて屈曲して直立したのち口唇は強く外反する。	全体に小きざみな横ヘラ磨き，胴部横のヘラ削り痕。下部縦のヘラ削り痕あり。
〃	—2	把手付鉢	〃	13.7	5.5(丸底)	11.7	細かい長石	黄褐色剥落激しくはっきりしないが全面朱彩の可大	胴・口縁部 1/4 欠	丸底の底部はお厚く平底に近い。胴部は内湾して立ち上がり器厚を除々に減じながらほぼ直線的に外に開く。把手は大きくはめ込み式である。あまり類例をみないものである。	口縁外面横なで。縦の小きざみなヘラ磨き。底部かるいヘラ磨き。
〃	—3	坏	須恵	14.6	9.2	(4.3)	ち密	上部赤褐色下部暗褐色	底部欠く 1/4	体部の立ち上がりは明瞭でない。器厚は一定せず体部はほぼ直線的に開き口唇は端部を折りまげたように直立する。	ロクロ回転方向は不明。
〃	—4	坏蓋	〃	15.7		3.0	長石・石英	黒青色	1/4 強	天井部わずかに内湾して端部にて屈曲して口縁は内傾する鈕は大きいが低く央部が凹む。	ロクロ回転方向は不明天井部回転ヘラ削り鈕貼付後横なで。
25号住	—1	壺	土師	13.3		(6.0)	細かい長石・石英	白黄褐色	口縁から胴上部1/4	薄作りで口縁はやや外反し口唇は外傾する。頸部は内面に厚味を持たせ稜をつくっている。最大径は胴上半部にある。	口縁外面と内面はなで胴部外面はハケ調整。

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
25号住	−2	甕	土師	15.7		(5.5)	粗かい長石・石英	白黄褐色	口縁から胴上部 1/4	薄い胴部から除々に器厚を増して口縁は外反する。	口縁外面横なで，胴部外面粗いハケ調整。内面全面なで。
〃	−3	高台付甕	須恵	13.2		(7.8)	細かい砂	外暗灰色内灰白色	底部一部から胴下部 1/4 強	棱を外面に作って立ち上がる胴部は内湾しながら除々に器厚を減じて外に開く。	高台は外傾し，内面はほぼ直立す。端部はわずかに凹面をつくる。ロクロ回転左回り。
〃	−4	甕	土師	8.3		(2.1)	細かい長石・石英	黄褐色	底部 1/4	底部は上げ底。立ち上がり部は厚い。	ロクロ回転不明。切り離しは回転糸切り。
〃	−5	坏	須恵	10.6	6.6	4.4	〃	暗青色	1/4 強	高台は外傾し端部は丸い。立ち上がりははっきりせず体部は整美な凹凸を持って外に開く。	ロクロ回転右回り，底部回転ヘラ削り，切り離し不明高台貼付後側面横なで。
〃	−6	〃	土師	13.2	5.5	3.7	細かい長石	黒青色	ほぼ完形	底部は極端な上げ底となる，はっきりしない立ち上がりを示す体部はわずかに内湾して開く口縁はわずかに外反する。	ロクロ回転右回り，底部切り離し回転糸切り。
〃	−7	〃	須恵	13.3	7.1	3.3	細かい砂	灰白色	〃	厚い底部から極端に器厚を減じ，ほぼ直線的に外に開く。	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラ削りによる切り離し後周囲を手持ちのヘラ削り
〃	−8	〃	〃	12.3	6.7	4.1	細かい長石・石英	暗青色	底中部欠 1/3	上げ底の底部から外面に凹面をつくり央部からわずかに内側に傾きをかえ口唇に至る。	ロクロ回転不明。底部切り離し回転糸切り。
〃	−9	〃	〃	13.1	5.4	3.7	〃	黒青色	1/4	6に同じ	ロクロ右回転利用底部切り離しは回転糸切り。
〃	−10	〃	〃	12.2	6.6	3.6	雲母わずか	灰白色	1/4	底部央部は凹む。厚い底部から内湾して立ち上がったのち直線的に開く。央部に強いしめある。	ロクロ回転右回り。切り離し不明。
〃	−11	〃 (?)	〃		5.8	(4.3)	長石	赤褐色(生焼き)	口縁欠	厚い底部は丸底に近く内湾して立ち上がる体部は極端に器厚を減じ外に開く。凹凸激しい。	ロクロ回転右回り。底部切り離し回転ヘラ切り。
〃	−12	坏蓋	〃	13.3		3.6	長石多	暗青色	1/3 強	蓋は低いながら宝珠形である。天井部は外に張り出したのち央部から急に角度を強め内屈したのち端部を内傾させて口縁としている。	右回りのロクロ利用，天井部回転ヘラ削り，紐貼付後側面横なで。
〃	−13	〃	〃	14.3		2.8	長石・石英	黒青色	ほぼ完形	蓋は低いが宝珠形である。天井部央部はわずかに凹み，ほぼ水平に伸びたのち内湾して端部にて内屈して口縁は直立し端面は内傾する。	〃
〃	−14	〃	〃	15.3		2.2	〃	灰青色	〃	蓋は宝珠形で反りぎみとなる。器高は低く宝珠部は凹む天井部はほぼ直線的に開いて内屈したのち外面外傾きせて口縁となる。内面は内傾する。	〃
26号住	−1	坏	須恵	13.6	8.5	2.8	長石・石英	黒青色	1/3 強	底部からわずかに屈曲したのちほぼ直線的に立ち上がり口縁はやや外反する。	ロクロ回転方向不明，底部回転ヘラ削りのため切り離しは不明。
〃	−2	高台付坏	〃	13.2	9.4	3.8	細かい長石	暗青色	1/4 強	底部は央部水平なるも下げ底である。立ち上がりは明瞭でやや外反して口唇に至る高台は厚く台形状でしっかりふんばり端面は凹む。	右回転ロクロ利用，回転ヘラ切りののち回転ヘラ削り行う。高台貼付後側面横なで。
〃	−3	〃	〃		8.6	(2.7)	〃	〃	口縁欠 1/3 強	底部は内湾ぎみの下げ底体部は直線的に開く。	〃

出土場所	挿図番号	器形	種別	口径	底径	器高	胎土	色調	残存状態	器形の特徴	整形
27号住	−1	甕	土師			(11.7	大きな砂	白黄色	胴下部 $\frac{1}{4}$	内面に凹凸を持ちながら直線的に開く。	外面ハケ調整 内面なで
〃	−2	〃	〃	13.9		(7.7)	大きな長石・石英	外褐色 内暗褐色	口縁から胴上半部 $\frac{1}{4}$	胴部はなで肩で口縁は薄くなり強く外反する。口唇は外傾する。	内外ともなで
〃	−3	高坏	〃			(8.0)	細かい長石	坏部内面黒色 他黄褐色	脚部と坏部の一部	脚内面は内湾ぎみとなる。	坏部は小ぎざみな横ヘラ磨き 脚部外面縦のヘラ磨き 内面縦のヘラ削り
〃	−4	坏	須恵	15.5 (12.5)	7.8	4.5 (4.0)	〃	黒灰色	完	極端につぶれている。 底部上げ底でぶ厚い。 体部は除々に器厚を減じ直線的に開き口唇は外反する。	右回転ロクロ利用 切り離しはヘラ起しと思われるがはっきりしない。
〃	−5	〃	〃	14.9	8.3	4.2	長石・石英多し	暗灰色	$\frac{1}{4}$ 強	ぶ厚い底部はわずかに上げ底となる。内湾して立ち上がった体部は角度をやや内に向けほぼ直線的に開く。	右回転ロクロ利用 底部は切り離し回転ヘラ削り。
〃	−6	〃	〃	14.4	5.2	4.4	砂粒わずか	灰白色	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠	底部は極端にぶ厚く上げ底となる。体部は直線的に開く。	ロクロ回転不明 切り離し回転糸切り。
〃	−7	高台付坏	〃	14.9	11.3	3.9	細かい長石	〃	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠	底部内面は凹凸ある。 体部は内湾して立ち上がったのち外反ぎみに口唇に至る高台は外傾し，端面は丸味を持つ。	右回転ロクロ利用 切り離しはヘラ起しと思われ調整は回転ヘラ削り。
28号住	−1	甕	土師	14.4		(7.2)	ち密	外白黄褐色・内褐色	口縁から胴上部	胴部はなで肩で最大径を持つ。頸部内面に厚味を持たせ稜を作り口縁は強く外反する。	口縁外面なで，内面あらいハケ調整。 胴外面あらい縦のハケ調整，内面なで。
〃	−2	高台付甕	須恵		8.2	(4.4)	細かい長石わずか	外暗青色 内黒青色	底部から胴下部	高台は厚くしっかりとふんばる。 内湾して胴部は立ち上がる。	右回転ロクロ利用 内面ロクロ痕顕著 底部は回転ヘラ削りのため切り離し技法は不明。 高台貼付後側面横なで。
〃	−3	坏	土師	18.2	8.3	4.7	ち密	灰白色	$\frac{1}{4}$ 強	わずかに上げ底の底部からわずかに体部は内湾しながら外に開く，外面には稜を持つ。	ロクロ回転不明 切り離し不明
〃	−4	〃	〃	12.3	5.3	3.8	〃	内黒色 外赤褐色	$\frac{1}{4}$	底部は上げ底で体部は内湾しながら開く口唇はわずかに外反する。	内外面小きざみな横のヘラ磨き
29号住	95−1	甕	土師	13.4		(8.5)	細かい長石と雲母	黄褐色	口縁と胴上半部 $\frac{1}{4}$	口縁は外反し，頸部に段を持ち胴部はほぼ直線的に開く。	口縁外面横なで 他はなで
〃	−2	小形甕	〃	12.0		(7.8)	長石・石英	〃	底部欠 $\frac{1}{4}$	口頸部は短くわずかに外反す。	内外面なで
〃	−3	把手付鉢	〃	13.9	6.0	12.8	砂少し，雲母	内面黒色 外面黄褐色	$\frac{3}{4}$ 強	底部はわずかに丸底で胴部はゆるかな内湾をして開く。	内面と胴外面小きざみな横ヘラ磨き，外面口縁横ヘラ磨き。
〃	−4	坏	〃	16.7	丸底	5.4	長石・石英	内面黒色 外白黄褐色	完	体部はゆるやかな内湾ながら外に強く開く。	内外面小きざみな横のヘラ磨き 内面口縁横ヘラ磨き
〃	−5	〃	〃	13.8	〃	5.6	細かい長石	〃	〃	厚い底部から除々に器厚を減じて立ち上がった体部は口縁にてやや直立ぎみとなる。	〃
〃	98−1	坏	土師	11.8	丸底	4.2	ち密	白黄褐色	口縁わずかに欠く	丸底から立ち上がった体部は口縁にてほぼ直立する。	内外とも小きざみな横ヘラ磨き底部にヘラ削り痕あり。
〃	−2	蓋	須恵	5.3		1.5	〃	灰白色	〃	天井部は水平に伸び端部を直角に折って口縁としている端面は丸味をもつ，鍵は宝珠形	ロクロ回転不明

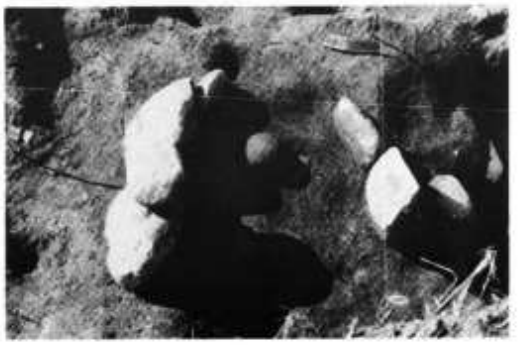
図　　版

図版1　遺跡遠景（上南より，下北東より）

図版2　遺構群（東）と古墳

図版３　古墳周溝内ふき石と遺物

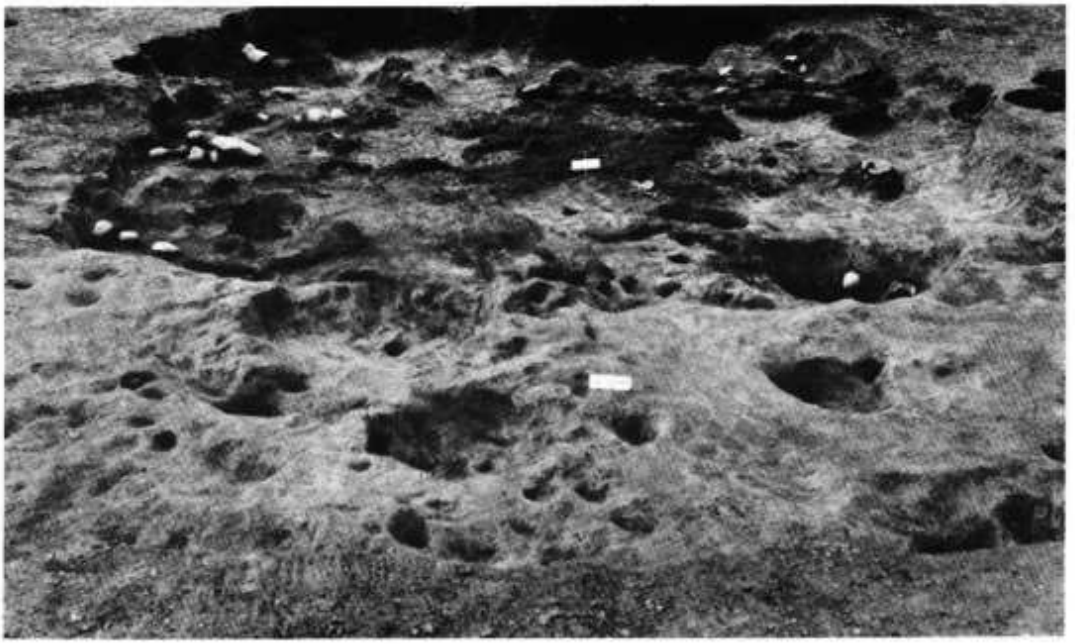
図版4　住居址群（上1～8号・14号住居北西より，下1～5号・8号住居址北より）



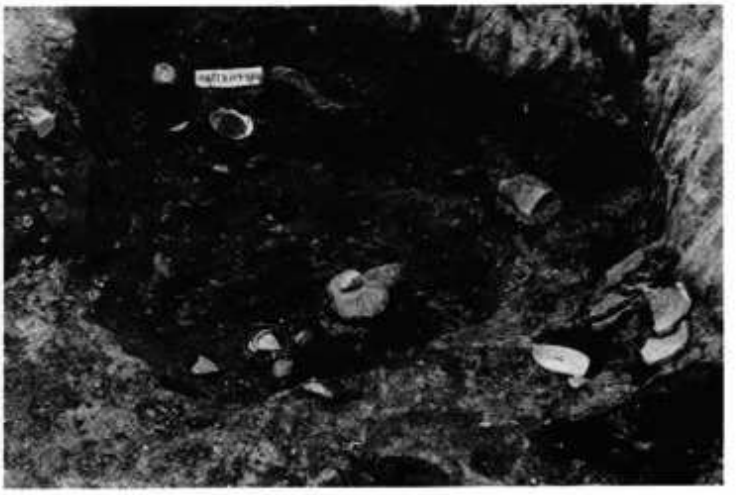
図版5　カマド（上左－1・2・4・5号，上右－5号，中－4号，下左－8号，下右－11号住）

図版6　住居址（上－6・7・16号，中－8号，下－9・10号住居址）

図版 7　住居址（上－13号，下－14号）



図版 8　住居址（上－16号，下－17・18号）



図版 9　カマドと遺物出土状態（上左14号，上右16号，下14号）

図版10　第21号住居址

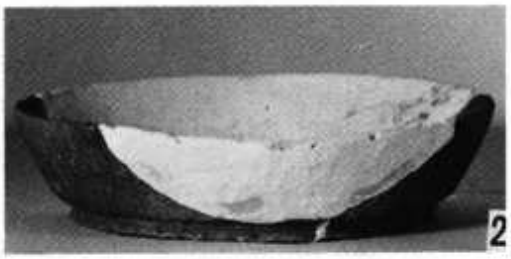
図版11　住居址（上－21・22号住，下－22号住）

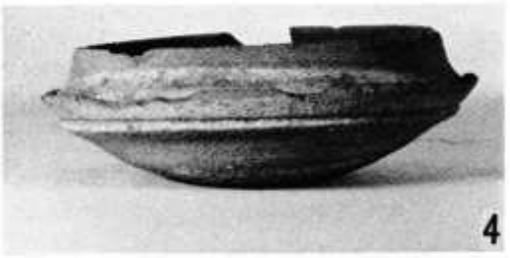
図版12　カマドと遺物出土状態（上－21号住，下－22号住）

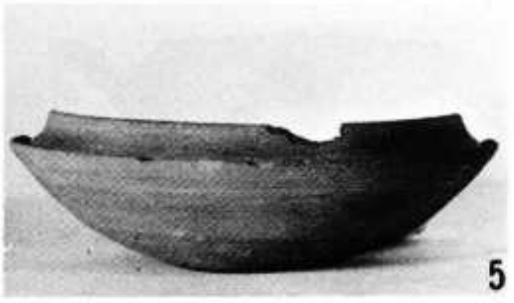
図版13　住居址とカマド（上と左下－28号住，右下－23号住）

図版14　住居址とカマド（上－29～31号住，中－29号住，下－31号住）

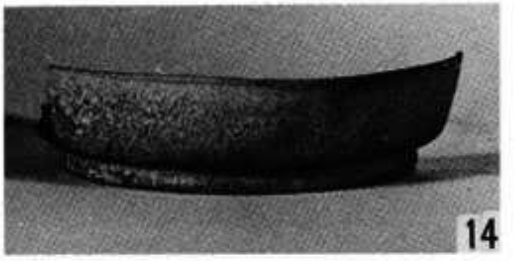
図版15　出土遺物（古墳出土）



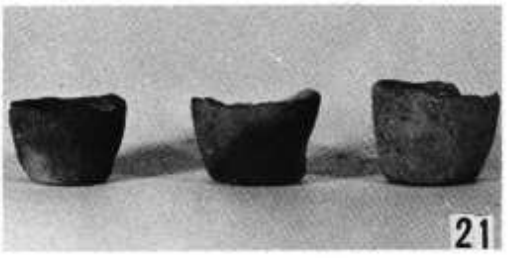


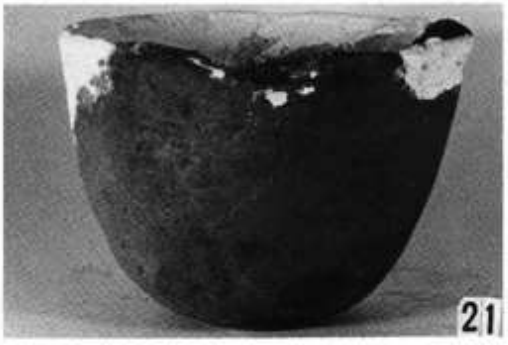


図版16　出土遺物（上－古墳，他は住居址出土）



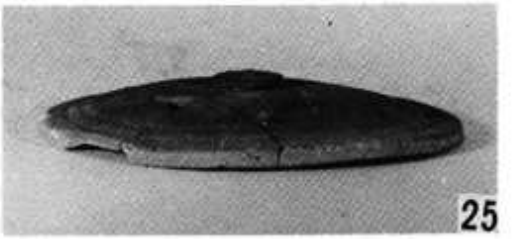
図版17　出土遺物



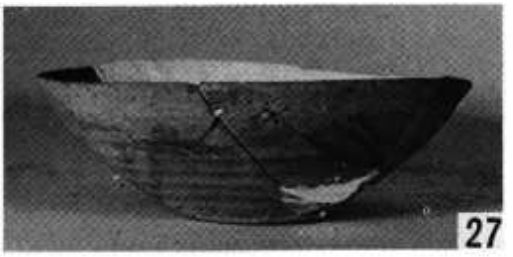


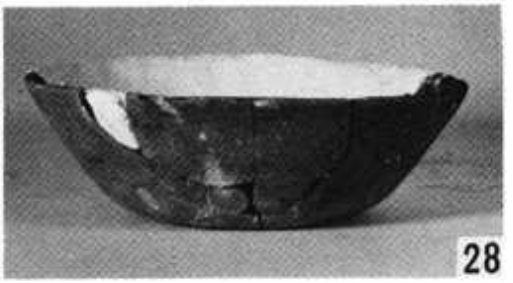
図版18　出土遺物

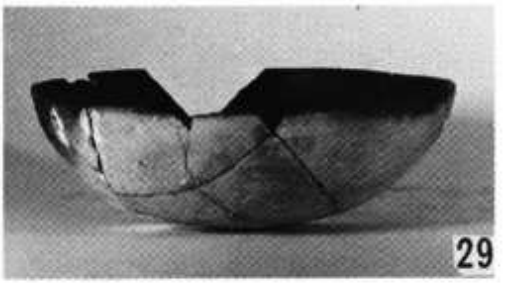
図版19　出土遺物（上段21号住，他は22号住）

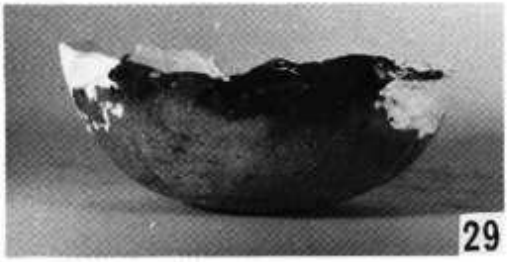


図版20　出土遺物









図版21　出土遺物

中通り下遺跡

——緊急発掘調査報告書——

昭和54年3月5日　印刷
昭和54年3月10日　発行

編　集　駒ヶ根市赤穂2423－6　市立博物館
中通り下遺跡発掘調査団

発　行　伊那市青木町伊那合同庁舎内
南信土地改良事務所

駒ヶ根市赤穂10780－2
駒ヶ根市教育委員会

印　刷　下諏訪町駅前　電話(02662)8－5553
㈱オノウエ印刷